
～名探偵コナン～裏切った男

洸ストーリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〓名探偵コナン〓裏切った男

【Nコード】

N7408I

【作者名】

洗ストーリー

【あらすじ】

黒の組織から抜け出した一人の男、『明智^{アポトキン}勇気』本名『江藤健一』。彼は、江戸川コナン、灰原哀と同じく、APT^{アポトキン}X4869を飲み幼児化してしまった。この物語は、その「健一」を含む、殺人推理ラブコメである。

明智勇気（江藤健二）プロフィール（前書き）

→ <http://953.mitemin.net/i5828/>

上のURLを開いていただくと、明智勇気の画像が見られます。シロクロですが。どうぞ、ごらんください。

明智勇気（江藤健一）プロフィール

名前…明智あけち 勇気ゆうき 本名は江藤えとう 健一けんいち
年齢は18歳。

来歴

灰原哀同様、元「黒の組織」のメンバーで、コードネームは「シードル」

ちよつとだけ有名な推理小説家の父親と、温厚な母親とともに平穩に暮らしていたが、突然母親は他界し、父親と一緒に組織に入れられてしまう。その父親は、組織から与えられた指令に失敗し、ジンに射殺される。

残ったシードルは、組織の下っ端として、小さな任務を遂行していた。

実は頭の回転が速く、いろんな知識をもっている。そのことに気づいたジンは突然、「シェリーを始末しろ」と命令するが、シードルは命令を聞かなかったため、牢に監禁される。

その牢の中で、APT X4869を飲んだ勇気は体を幼児化させ、組織を抜け出した。

そこで、道に倒れているところを、博士に拾ってもらい、匿ってもらった。灰原にすべてを話したのは、1週間後で、その間は博士の部屋にこもっていた。

人物

基本は冷静沈着で取り乱すこともめったにないが、灰原が関わるとかなり取り乱すことがある。幼いころから、父親に推理小説を書かされたり、読まされたりした影響からか、コナンや平次同様の推理

力・洞察力を誇る。時には、この二人よりすぐにトリックがわかってしまうことがある。

髪は黒。容姿も新一や平次に劣らずの容姿である。現在は帝丹小学校1年B組に在籍している。

同じ境遇に立つ、灰原哀に恋愛感情を抱いている様である。まだ直接的な場面はないが、灰原がラブレターをもらったりすると怒る所や、体が当たると、頬を染めている場面を見ると、好意を抱いているようにも見える。

コナンの事は「コナン」と呼ぶが、誰もいないときや、博士や哀がいるときは、「工藤」と呼ぶ。

哀の事は、通常は「哀」誰もいないときは本名で「志保」と呼ぶ。

逆にコナンからは、通常は「明智、又は勇気。」誰もいないときや、哀や博士がいるときは「江藤」と呼ぶ。

趣味や特技は未だ不明。

FILEO プログ

「…sherryを見つけ…殺せ…。」
シェリー

俺にそう言ったのは、目つきが鋭く、殺気を放っている大型の男。

だが命令を拒んだ俺は…、監禁された。

しかし、俺は牢から抜け出した…。

そのsherryシェリーと同じ方法で…。

FILE 1 転入生（前書き）

物語は、「瑛祐の告白」終了からです。

FILE 1 転入生

ある日の早朝、外は雨。ここは、帝丹小1－B組の教室。

「ガヤガヤ…」

室内は騒がしく、小林先生が来るのを待っている。　すると…

「ガラっ!!」

勢いよく教室の扉が開いた。

「皆さん聞いてください!!」

そこに現れたのは、両頬にそばかすがあるのが特徴の『円谷光彦』だった。

光彦

「またこの教室に転入生が来るらしいですよ!!」

「何っ!? 男か? 女か!？」

問いかけたのは、小学一年とは思えない体型の『小嶋元太』だ。

光彦

「今回は男の子らしいです！」

「かっこいい人かなあ？」

にこやかな笑顔でそう言ったのは、『吉田歩美』。

「どっちでもいいんじゃない？」

そっけなく言ったのは、茶髪でウェーブが特徴の『宮野志保』こと『灰原哀』だ。

「そうだな…。俺もどっちでもいいや…。」

灰原と、同意見を言ったのはメガネをかけた少年、そして警察の救世主、東の名探偵、『工藤新一』こと、『江戸川コナン』だ。

「ガラッ!!」

そこに小林先生登場。

小林先生

「えゝゝもう知ってる人もいるみたいですが、今日からお友達がまた一人増えます！」

「明智…：勇気…：明智勇気ですよろしくお願いします！」

コナン

「…」

コナンは、その少年を黙って見つめていた。

FILE 2 シールドとバーボン

勇気

「え？少年探偵団？？」

突如として現れた、謎の少年『明智勇気』。

その日の放課後、元太・光彦・歩美の三人は、当たり前のように明智を少年探偵団へと勧誘していた。

元太

「ああ！俺が団長の小嶋元太だ！ちなみに、ここにいる、コナンと灰原も俺らが勧誘したんだぜ！」

光彦

「最初は、僕と元太君と歩美ちゃんの三人だけでやってたんですけどね。」

コナン

「（まあ…無理やり入れられたんだけどな…。）」

「ガコッ」

元太

「？何も入ってねーぞ…。」

自分の靴箱を開けた元太が元氣なさそうに言った。

彼の靴箱には『難事件大募集！！1年B組 少年探偵団』と書かれ

てあった。

光彦

「今日も依頼ゼロですか…。」

歩美

「つまんないの…。」

すると灰原がにやけながら、

灰原

「まあ、それだけ平和ってことだからいいんじゃない？」

続いてコナンが、

コナン

「そうそう。小説やドラマじゃあるまいし、そんなに都合よく事件は起きねえって」

笑いながらそう言った。

勇気

「フーン、探偵ねえ…。」

灰原

「あら？あなた貴方も探偵に興味あるの？」

灰原が勇気に語りかけると、

勇気

「え？ ああ…そう言うわけじゃないけど…ハハ…。」

灰原

「？」

灰原は勇気の引きつった笑顔に疑問をもったが、そんなに深く考えないことにした。

「ブルルル」

するといきなり、コナンの携帯が鳴りだした。

コナン

「（誰だ…？）もしもし…江戸川ですけど？」

「Hi！ クールキッド！ ちょうど授業が終わったところかな？」

どうやら電話の主はFBIのジョディかららしい。

コナン

「ジョ、ジョディ先生！？ どうしたの？ こんな時間に！？」

ジョディ

「彼女から連絡があったのよ。」

コナン

「彼女って…水無怜奈さんから！？」

ジョディ

「ええ…隙を見計らってかけてきたらしく、彼女ははっきりこう言ったわ…『組織の新しいメンバーが動き出した！情報収集及び、観察力・洞察力に恐ろしく長けた探り屋で…コードネームは、【バーボン！】気をつけて！』ってね…。おそらくそのキレ者の標的は組織で、【シェリー】と呼ばれていた。あの茶髪の女の子…。」

コナン

「だろうね…。」

ジョディ

「FBIとすれば、あの子に張り付いて警護したいところだけど…今そんなことをすればぐ逆に彼らの居場所を知られる恐れがあるから…しばらく会うのは避けて君に任せたほうがよさそうね…。」

コナン

「うん…。そうだね…。」

ジョディ

「それともう一つあるわよ。彼女からの伝言。」

コナン

「…え？」

ジョディ

「つい最近、組織にいた一人の男が抜け出した見たい。詳しくは聞いてないけど…もしかしたらと思って…」

コナン

「（抜け出しただと…？）」

ジョディ

「その抜け出した男のコードネームは【シードル】！それ以上は分からないわ…。とにかく気をつけて！彼らに動きがあったみたいだから！」

コナン

「う…うん…。」

「ピッ！」

電話を終えたコナンは携帯の電源を切った。

コナン

「（シードルに…バーボン…。）」

「バッ！」

するとコナンは、後ろを振り向いて、

コナン

「（まさか…まさかこいつ…？）」

コナンの視線の先には、転校生、明智勇気が映っていた。

FILE 3 クロシ…

「ザー…ザー…」

外は小雨が降っていた。

光彦

「この後…どうします?」

元太

「ホントは、野球とかやりてえけどよ…」

歩美

「この雨だもんね…。」

コナン

「んじゃ、博士ん家^ちでゲームやろうぜ!」

歩美

「うん。行こ行こ!」

コナン

「…」

コナンは険しい顔で、ある人物を見つめていた。

そんなコナンの様子に気づいた灰原は、

灰原

「どうしたの？怖い顔して…あの子がどうかした？」

灰原が言うあの子とは、転入生、『明智勇気』のことである。

コナン

「ん？あ…いや、ちよつとな。」

灰原

「何？また隠し事？」

コナン

「いや…だいじょーぶ！オメーは何も心配することねえって！」

灰原

「オメーはって…やっぱり何か隠してるわね！？」

コナンに迫る、灰原。

コナン

「あ…だから、まだ事件とかが起きたわけじゃ…ねーから…」

「事件です！…！」

コナンと灰原の言いあいを妨げるように、光彦の声が重なった。

勇気

「ん？」

元太・歩美

「?？」

コナン・灰原

「へ？」

いきなりの発言に驚く5人。

歩美

「コ、コナン君と哀ちゃんが事件なのっ!／／？」

コナン・灰原

「はぁ!??？」

光彦

「いえ!その後ろ！」

コナン

「ん？」

振り向くと、一人の少年が元太の靴箱を開けていた。

少年

「あ…」

探偵団の存在に気づいた少年は、一緒に学校を出た。

＊

少年探偵団と少年は近くの歩道を歩いていた。

ちなみに、小雨はやんだようだ。

光彦

「なるほど…では、1年A組、杉浦開人君すぎうらかいとの話をまとめると…」

その少年の名は杉浦開人すぎうらかいとというらしい。

光彦

「君のお父さんは小さなアパートの大家さんで、住人は3人…その中の一人が、夜な夜な怪しげな行動をしていて、何をやっているのかを僕たち少年探偵団につきとめてほしいんですね？」

開人

「うん！」

開人はにこやかな笑顔で、返事をした。

すると、勇気は小声で灰原に疑問を聞いた。

勇気

「ねえ？依頼って、子供からしか来ないのか？」

灰原

「え？…ええ…どうかしら、まあ、時と場合によるわね…。」

勇気

「そうか…。」

コナン

「…」

相変わらず、勇気への視線を崩さないコナン。

元太

「じゃあ、今晚こいつん家泊^ちって、そいつを見張^{みま}ってよーぜ！」

歩美

「うん！それがいいね！明日土曜日でお休みだし…」

開人

「あ、今日はダメだよ！」

勇気

「え？何でだ？」

開人

「今日の夜は、お父さんとオセロする日だから…」

灰原

「だからさっき…私達が帰ったあとで依頼を下駄箱に入れようとしていたのね？ 今日みんなが来たらお父さんと遊べなくなるから…」

開人

「う、うん…。」

光彦

「でも、あのまま僕たちが帰っていたら、君の手紙を見るのは、来週の月曜日になっていましたよ？」

開人

「あ、そうか！」

コナン

「それで？ その人はどんな怪しいことをしているんだ？」

開人

「それは明日！ ウチに泊まりに来て自分の目で確かめためた方がいいと思うよ！ クロシ…江戸川君！」

開人は表情を一変させた。すごくスマイルだ。

コナン

「あ、ああ…。」

開人

「そうだ！ よかったら昼間でもいいよ！ 僕の部屋やアパートもゆっくり見てほしいしさ！」

光彦

「じゃあ、明日！お昼にみんなでいきますか！」

歩美

「うん！！」

開人

「じゃ明日！ぼくん家は、米花町2丁目の23番地の木馬荘っていうアパートだから！待ってるよークロシ…江戸川君！！」

「ダッ！」

と言って、開人は走って帰っていった。

コナン

「お…おう。」

元太

「なんだよ…コナンばかり…。」

光彦

「それに何でしょうか？…クロシって…」

歩美

「ヨロシクって言おうとしたんじゃないかなあ？」

コナン

「米花町2丁目の23番地木馬荘って…。」

何かを考えているコナン。

灰原

「あら、知ってるの？そのアパート…」

コナン

「あ、いや…博士^ちん家の近くだなあ…と思ってよ…」

灰原

「ええ…帰り道によく通るわ…そのアパート…」

勇気

「（米花町2丁目23番地…か…。）」

いったい勇気は何を考えているのか…？

FILE 4 シードルの正体

夕方の帰り道で、元太・光彦・歩美の3人と別れた、コナン、灰原、そして転入生、明智勇気の3人は同じ道を帰っていた…。これから衝撃の事実を聞かされるとも知らずに…。

灰原

「ねえ…：そういえば貴方^{あなた}の家ってどこなの…？」

勇気

「…」

勇気は黙り込み、何も話さない。

灰原

「ちょっと…？聞いているの？」

口を開いたのは、勇気でなく、コナンだった。

コナン

「もう…：もう…：正体はわかってんだ…。オメーは、黒の組織から逃げ出した一人で…、コードネーム…『シードル』だろ？」

勇気

「フツ…さすがは東の名探偵…気が付いてたか…。」

灰原

「え！？くっ…工藤君！？何を言ってるの？…この子が…彼らの仲間…？抜けだしたって…。」

いきなりのコナンの発言に、灰原は普段のポーカーフェイスを崩している。

コナン

「ジョディ先生から聞いたんだよ…さっき電話でな…。黒の組織から抜け出した一人がいるって…。明智…オメーのその表情みてりや…疑いたくもなるぜ…。転校初日だったのに…、平然とした顔してやがる…。」

灰原

「…それもそうね…。」

勇気

「ああ…抜けたさ…オメーと一緒に方法を使っ…灰原さん…。」

「

灰原

「…APT^{アポトキシン}X4869を飲んだのね…。」

勇気

「ああ…。逃げ出したのは…。先週…。運のいいことに、阿笠博士
って人に拾ってもらって…。餓死せずにすんだんだ…。」

灰原

「――っ！？博士に拾ってもらったって…貴方^{あなた}1週間も博士の家
にいたの!？」

勇気

「え？あ…ああ…。なんか『哀君には、タイミングを見計らって君
のことを話すから、しばらくわしの部屋におってくれ』って言われ
てな…。」

灰原

「それで…ときどき博士の行動がおかしかったのね…。気にしては
いなかったけど…。」

衝撃の事実が次々と判明するのか、コナンが口を開いた。

コナン

「組織の大きさにビビって、抜け出したのか？」

勇気

「…まあ…そうだな…。」

コナン

「そうか…。ま、これでおれたち3人は運命共同体ってことだ!」

灰原

「(どうして私…、この人の気配に気づかなかったの…? 何も感じなかった…。)」

コナン

「ちなみに…、オメーの本名は何だ? まさか、『明智勇気』じゃねえだろ?」

勇気

「『江藤健一』だ…。」

灰原

「(油断できないわ…この人…。)」

コナン

「ここじゃ…あれだし、詳しいことは博士^ちん家で話そうぜ!」

こうして、3人は阿笠邸へと向かった。

FILE 5 江藤健一

午後7時過ぎ―

ここは阿笠邸のリビング。

灰原は、この1週間なにかあったのか、あわてた様子で博士に問いかけていた。

灰原

「どうして黙ってたのよ!? 博士!」

博士

「すまんのお…。もしかしたら、哀君、怯えて、学校に行かないと
いうかもしれないと思ったんじゃない?」

灰原

「だからって…。」

灰原は呆れた様子。

勇気

「でも、ありがとうよ。博士。あのままだったら餓死してたぜ。」

コナン

「んで? オメー、これから博士^ちん家に居候するの?」

灰原

「「（え！？）」

勇気

「ああ…。行くところねえから…。そうなるな。」

灰原

「居候って…、貴方…あなた…本当に組織を裏切ったの？私を…シェリーを消しに来たんじゃないのかしら…？」

灰原は、この阿笠邸で勇気と一緒に住むことを拒んでいる。

勇気

「…まあ…あいつ（ジン）の命令は、『シェリーを消しに行け』だったけどな…。」

それを聞いた、コナンがあわてた様子で、

コナン

「あ、あいつだと！？」

灰原

「もしかして…。」

勇気

「『ジン』だ…。それを拒んだ俺は、監禁されたんだ…。なぜ、その場で殺さなかったのかはわからねけどな…。」

灰原

「ジン…。」

『ジン』という言葉聞いて、寒気を感じている灰原。

阿笠

「まあ…なんじゃ！せつかく住人が増えたんじゃ！辛気臭い話はそこまでにして、ご飯でも食べんかの？」

コナン

「そうだな…。どうやらこいつ（勇気）の言ってることは嘘じゃねーみてえだし…。」

灰原

「ねえ…信じていいのかしら…？貴方^{あなた}のこと」

勇気

「え?…お…おお…」

灰原

「そう…。」

そして…4人は夕ご飯を食べ、コナンは探偵事務所へと帰って行った。

＊

時刻は23時を過ぎていた…。

博士と灰原は同じベッドで、勇気はソファで眠りに就いた…。

FILE 6 赤白黄色

一翌日―

約束通りに、米花町2丁目23番地の木馬壮の前に集合した、コナン、灰原、勇気と探偵団の3人。
だが…。

元太

「な…！？なんだこりゃ！？丸焦げじゃねえかよ…！」

歩美

「ウソー…！」

灰原

「そういえば、夜中にサイレンが鳴っていたわね…。まさかここだとは思わなかったけど…。」

コナン・勇気

「……」

歩美

「じゃ、じゃあ！昨日のあの子は！？開人君はかいとどうなっちゃったの！？」

そこには、何かを考えている、コナンと勇気と、涙ぐんでいる歩美の姿があった。

光彦

「も、もしかしたら…火事で…」

???

「いや…その開人^{かいと}っていうボウヤは無事だ！少々火傷を負ってはい
るが、消防隊員に助け出されて、病院で寝てるよ…。」

元太・歩美

「よかったあ〜！」

コナン

「あ！弓長警部！」

コナンたち、6人の目の前に現れたのは、警視庁刑事部捜査一課火
災犯捜査係の弓長警部だった。

コナン

「それで？この火事で亡くなった人いる？」

弓長

「幸い、死人は出ちゃいねえが、その開人^{かいと}君の父親が、大火傷を負
って、今 集中治療室で虫の息だそうだ…」

コナン

「じゃあ火事の時、そのこのほかの家族や、このアパートの住人は
みんなうまく逃げだせたんだね！」

弓長

「いや…その子には母親もいるんだが丁度友人と旅行中で…さっき旅行先のホテルに電話したら驚いて、すぐに病院に飛んでいくと言ってたよ…」

勇気

「……」

また、何かを考えている様子の勇気。さすがのコナンも弓長警部と話すのに夢中で、勇気の表情には気づかなかったみたいだ。

弓長

「あと、住人は3人いるんだが、3人とも、火事があった頃、丁度外出していて朝帰ってきたらしくてな…」

コナン

「外出？火事って夜中だったんでしょ？」

弓長

「ああ…、今朝の2時半頃だ。まあ、3人ともガキじゃねえから、夜歩いて朝帰りってのもおかしくはねえが…」

元太

「その3人の中の誰かじゃねえのか？火イつけたの！」

弓長

「なに？」

歩美

「昨日、開人君かいといったもん！その3人の中に夜になったら怪しいことをしている人がいるって！」

弓長

「怪しいことってどんな？」

元太

「しらねーよ！」

光彦

「それを確かめにここへ来たらこんなことになってたんです！」

弓長

「おい！その3人をこっちに連れてきてくれ！」

刑事

「あ、はい！」

「ダッ！」

弓長警部の部下と思われるものが、その3人のもとへと向かった。

＊

勇気

「んで？　どうなんだよ？」

コナン

「あん？」

勇気

「何かわかったのか？　東の名探偵さん♪」

コナン

「まだわかんねえよ…。単なる事故なのか…。それとも…。」

勇気

「…そうか。」

コナン

「？」

刑事

「連れてきました！」

3人がコナンたちの目の前に現れた。…すると、その3人を見た灰原が怯えだした。

灰原

「!?!?」

「ドックン!!!!!!!!!!」

灰原

「（この感じ…）」

怯えだした灰原は、コナンの後ろに隠れた。

コナン

「ん？」

勇気

「？」

灰原

「（獲物を射竦めるような視線…）」

勇気

「???…どうしたんだ？灰原。」

「ドックン！」

灰原

「（いる…この近くに！組織かれらの仲間が！）」

光彦

「どうしたんですか!?!」

灰原

「(どうして...? どうしてこんなところで...!?!?)」

歩美

「哀ちゃん? 具合でも悪いの?」

灰原の異変を見て、心配する探偵団たち。

灰原

「(考えている暇なんかない! 今すぐ...今すぐここから逃げなきゃ...!?)」

コナン

「どした?」

灰原

「!!.....」

勇気

「...?」

灰原

「(消えた...?)」

コナン

「おい？大丈夫か？」

灰原

「え…ええ…。」

ようやく灰原は落ち着き、コナンの肩から握っていた手をおろした。

弓長

「じゃあ、ちょっと部下の質問に答えていてくれ…」

＊

弓長

「で？この3人の中の誰なんだ？その怪しいやつって…。」

元太

「だから、しらねえって言ってるだろ？」

キレ口調で元太が言った。顔も怒っている。

歩美

「それを聞きに開人君^{かいと}に会いに来たんだもん！」

弓長

「何だ…だったらそう早く言ってくれ…。」

コナン

「ちなみにあの3人ってどんな人？」

弓長

「ああ…。右から…、大工をやっている細井竜平さん…：大学院生の
沖矢昴さん…：フリーターの真壁吟也さん…。」

刑事

「弓長警部！焼け跡からこんなものが！」

どうやら刑事は日記を拾ったみたいだ。

弓長

「こりゃー、開人君の日記じゃねえか！」
かいと

刑事

「とにかく読んでみてください！」

弓長

「えーっと、最後のページは10月5日…：昨日か…。『今日は朝か
らやな天気…：ボクは早く学校に行かなきゃいけないけど…：赤い人は
寝坊できるかもね…：』この赤い人って？」

刑事

「まあ、続きを。」

弓長

「『学校から帰ったら玄関で転んじゃった…白い人が出かけるトコでよかったよ…』」

コナン・勇気・灰原・元太・光彦・歩美

「……………」

6人はあっけらかんとした顔をしていた。

弓長

「『今日の夜は赤い人も白い人も黄色い人も出かけてる…お父さんと二人っきり!もっと遊びたいけど…明日、探偵団のみんなが来るから早く寝よーっと!」

…誰だろう…?夜中に誰かが帰ってきた…お父さんと口喧嘩してる…黄色い人だ…。

怪しいことしてるのがお父さんにバレちゃったのかな?…怖いから耳ふさいで寝よ…起きたら江戸川君にこのこと話さなきゃ…。』」

元太

「じゃ、火をつけたやつは黄色いやつで決まりだな!」

光彦

「ええ!朝に帰ってきたって嘘をついていますし!」

弓長

「だがなボウズ共…その黄色いやつって…どいつなんだよ?」

コナン・勇気
「…」

FILE7 クロシロ君

刑事

「弓長警部！」

と、言ったのは弓長の部下。

刑事

「ひと通り、このアパートの住人3人聞きたいことは聞き終えましたが…。」

弓長

「そ、そうか…。」

刑事

「? どうかしましたか？」

弓長

「いやな、この火事で助けだされたアパートの大家の息子の開人^{かいと}ってボウヤがいただろ? あの子が火事あった前の日に相談してたそうだ…住人の中に夜な夜な不審な行動をとってるやつがいるから調べてくれと…このボウズ共にな！」

といった、弓長の視線の前には、コナン、勇気、灰原と探偵団の3人が。

歩美

「ボウズ共じゃないもん！」

光彦

「僕たちは歴れっきとした…」

元太

「少年探偵団だぞ！」

3人が威張ってそう言う。

弓長

「そういやあ、日記にそう書いてあったなあ…。」

刑事

「日記？」

弓長

「その開人君かいとの日記だよ。不審な住人のことを今日この子らに話すつもりだったそうだが…。まあ、日記を読んでみる！火事の前の日に書かれたヤツを…」

刑事

「は、はあ…」

すると、刑事が日記を読みだす。

刑事

「『10月5日…今日は朝からやな天気…ボクは早く学校に行かないいけないけど…赤い人は寝坊できるかもね…学校から帰ったら玄関で転んじゃった…白い人が出かけるトコでよかったよ…。今日の夜は赤い人も白い人も黄色い人も出かけてる…お父さんと二人つきり!もつと遊びたいけど…明日、探偵団のみんなが来るから早く寝よーっと!…誰だろう…?夜中に誰かが帰ってきた…お父さんと口喧嘩してる…黄色い人だ…。怪しいことしてるのがお父さんにバレちゃったのかな?』——ってこの黄色い人なる住人が犯人に間違いないですね!3人共朝帰ったら火事になっていたと言ってますし!」

弓長

「ああ…だがよ…その黄色い人ってのが、あの中の誰だがわからねーんだよ!」

そう言った、弓長の視線の前には、住人3人が映っていた。

刑事

「えーっと…あの頬にバンソーコーを張っているのが、大工をやっている細井さんで…その横の眼鏡をかけているのが…大学院生の沖矢さん…そしてそのまた横の小太りなのがフリーターの真壁さんでしたね…。」

弓長

「ああ…3人とも名前に色は入っちゃいねえし…」

刑事

「黄色い服を着た人もいませんね…」

弓長

「やってる事も大工に学生にフリーター…色を連想させるものはないな…。」

光彦

「…」

二人の会話を光彦が真剣に聞いている。

光彦

「赤白黄色ですか…。」

歩美

「お花の色みたいだね…。」

元太

「うーん…黒いヤツならいるんだけどなあ…。」

灰原

「(え?)」

黒いヤツという元太の発言に驚く灰原。

歩美

「黒い人？」

元太

「ホラ、あの色黒の男だよ。！来てる服も黒いじゃんか！」

歩美

「でも黒い服ならあの太った人や、眼鏡の人も着てるよ！」

光彦

「まあ、顔の色ならあの眼鏡の人が白ですよね……」

歩美

「うん！あの太った人は色白っていうより……青白いもんね……」

弓長

「とにかく……もう少し突っ込んで聞いてみるか……どいつがその問題の黄色い某っていうのかをな……」

＊

細井

「……………まったく何回言わせるんスかっ！？火事のあった夜は大工の頭や先輩たちと飲んでたって言ったでしょーが！」

と主張するのは、大工の細井竜平、25歳。

弓長

「だがさつき、その頭たちに確認を取ったらあんた、夜中の1時過ぎぐらいから姿を消したそうじゃねえか…。」

細井

「ああ…久し振りの酒でグデングデンに酔っちゃまって…酔いをさまそうと一人で公園のベンチで横になってたら寝ちゃまって…気づいたら朝になってたってワケっすよ!」

弓長

「じゃあ火事のあった夜中2時半頃、貴方と一緒にいた人間はいないわけだな?」

細井

「あ、ああ…」

コナン

「ねえ?何なのその顔の絆創膏…ばんそうこうケンカでもしたの…?」

すると、突然割ってコナンが会話に入ってくる。

細井はコナンを見つめ、

細井

「…何スカ?このガキ…」

弓長

「いいから答えて…」

細井

「仕事中に、顔に角材をぶつけちまってね…まだ新米だからケガなんて…ホラ、しょっちゅうツスよ！」

と、言いながら、弓長に絆創膏ばんそうこうをつけた手を見せる細井。

弓長

「ちなみに、あんたの好きな色は？」

細井

「い、色っスか？海の青っス…たまに、サーフィンやってるスから…。」

＊

沖矢

「その夜は、一人で車でドライブしてました…教授に提出する論文に煮詰まったらよくやるんです…気分転換に…。僕の手は少し離れた駐車場に停めてるんですが…見ますか？」

と、大学院生の沖矢昴、27歳。

弓長

「いや…それよりどのあたりをドライブしてたんだ？」

沖矢

「堤無津川緑の並木道を…緑を見ていると心が安らぐのでついそこに…ちなみにこのアパートの植物にも毎日僕が水をやっていましたよ…大家さんは手入れに関心がなかったみたいでしたので…」

弓長

「ホォー…じゃあ、好きな色は緑とか？」

沖矢

「いや…強いて言えば黒ですね…知られたくない自分の内面を覆い隠してくれるようで…まあ、同じ理由で黒はいやな色でもありますけどね…。」

コナン

「……」

後ろでコナンがじっと沖矢昴を見つめていた。

その後ろでは…。勇氣も住人3人を見つめていた。

＊

真壁

「昨日の夜は、杯戸町はいどちょうで映画を見ていたよ…夜10時から朝5時までオールナイト、【怪獣ゴメラ】の3本立てを…」

そう言ったのは、小太りで、フリーターの真壁吟也、29歳。

弓長

「一人でか？」

真壁

「ああ…一緒に行くはずだったネット仲間が急に来られなくなって…」

弓長

「ネット仲間ってのは？」

真壁

「あ、僕趣味で、デイトレードやって…その情報をインターネットで交換する友人がいるんだよ…」

難しい言葉に元太が…

元太

「でいとれーっと…？って何だ？…？」

コナン

「ああ、デイトレードは…」と、コナンが言いかけた瞬間、

勇気

「デイトレードは、主に個人投資家による株式・債券などの日計り取引のことだろ？株式・債券取引やFX、商品先物取引、CFDなど市場流動性の高い取引において行われる事が多いんだ。」

元太

「オメー、よく知ってんな！」

歩美

「勇気君すごい！物知り何だね。」

コナン

「なっ！？…なんでオメーがそんなこと知ってんだ…」

いきなりの勇気の発言に、コナンも驚いた様子だ。

勇気

「さあな…。」

真壁

「そう…。まあ、ホント趣味程度だから…儲からないけど…。」

弓長

「あんたは、フリーターということだが…生活費はそれで？」

真壁

「ああ…日払いの派遣登録をしてるから…「それってさー」」

コナンの声が、間に入る。

コナン

「土木関係？」

真壁

「え？」

コナンは真壁の指の爪を見ながらそう言った。

コナン

「ホラ、お兄さんの爪…けっこう泥が入ってるよ。」

真壁

「いや、それはこの前やったサバイバルゲームのときの泥だよ…。」

山の中を駆けずり回ったからね…派手にやられてペイント弾の色が落ちなくて、服が駄目になっちゃたけど…。」

コナン

「じゃあ、好きな色は迷彩服によくつかわれているネイビー…」

真壁

「ああ…ネイビーグリーンさ…。」

細井

「好きな色が事件と何か関係があるんスか？」

弓長

「あ、まあ…色々…。」

と、話している中…灰原と光彦は。

灰原

「ねえ…円谷君。」

と、小声で光彦に語りかける灰原。

灰原

「ちょっと協力してくれる？」

光彦

「あ、はい！」

灰原

「そのまま、10歩後ずさりするだけでいいから…」

光彦

「あ、後ずさりって後ろに何かあるん…」

灰原

「よそ見しないで！貴方はじっと私のほうを見てるのよ！…できる？」

光彦

「は、は／＼／＼…はい！／＼／」

勇気

「！！！」

灰原と光彦の怪しげなやり取りに気づいた勇気…。

勇気

「（なっ！…）」

「ジッ！」

灰原は住人3人を光彦の陰に隠れながら睨んでいた。

灰原

「（いる…絶対この中に…さっき私にプレッシャーを感じさせた…組織かれらの仲間が！）」

「（はやくそれを誰だかつかんで…何とかしな——っ!？）」

驚いた灰原の肩には、勇気の手があった。

勇気

「何やってんだ…？」

灰原

「（…江藤君…）」

光彦

「あ…いや…決して変なことをしていたわけじゃないですよ！勇気君！って、怒ってませんか？」

勇気

「べっ、別に怒ってねえよ！」

灰原

「（江藤君このひとも元々は私と同じ組織かれらの仲間…。なのに…何も感じなかった…。）」

＊

弓長

「ウーム：好きな色でもないとする…何なんだ：黄色い人って…」

刑事

「あの…警部！少し考えたんですが…このまま少年の日記を鵜呑みにするのは危険じゃないでしょうか？赤・白・黄色と書いてまるで住人のことのように思われてますが…何分、子供の書いた日記ですし…もしかしたら、その少年の空想の人物だったって言う可能性も…。」

歩美

「そんなことないもん！」

と、いきなり歩美が言う。

元太

「開人君言ってたぞ！夜になったら怪しいことするヤツがいるって！」

光彦

「とても作り話を言ってるようには思えませんでした！」

歩美に続いて、元太、光彦も反論する。

コナン

「それに、おじさん達、警察の人は悪いことをした少年がいたらま

ず、その子の周りの大人たちから話を聞いてどんな子だったか知ろうとするでしょ？ だったら、その逆もアリなんじゃないかなあ？ たとえ子供でも開人君は住人^{かいと}たちをよく観察してニックネームまでつけてるんだから！」

と、コナンが得意げに話す中、

「ぶな屋敷だね…」

コナン

「え！？」

という声に反応するコナン。

沖矢

「ぶな屋敷の事件のときに、ホームズがワトソン博士に言った台詞^{せりふ}だ…。」

勇気

「…」

沖矢

「ワトソン君、君は医者として子供の性質をつかむためにまず両親のことから調べて見るということは終始やっているだろう…だったら、その逆も真なりとは思わないかい？ ……だったかな？」

コナン

「へー、お兄さんもホームズ好きなんだ!!」

沖矢

「ああ…一冊残らず持っていたよ…全部焼けてしまったけどね…。」

弓長

「まあ、ホームズはともかく、この日記をむしすることはできねえよ!できれば入院しているあの子の回復を待つて誰が黄色い人か聞けば手っ取り早いんだが…。」

刑事

「さっき、病院に電話しましたが、開人君の意識はまだ戻らないらしいです…」

弓長

「そうか…」

コナン

「……」

歩美

「その日記!歩美にも見せて!」

弓長

「ああ…」

刑事B

「警部!」

すると、後方から弓長のもう一人の部下の刑事がやってくる。

弓長

「ん？火事場からまた何か見つけたか？」

刑事B

「あ、はい！開人君かいとの部屋の辺りから…大量のミニカーが…。」

コナン

「（ミニカー…？）」

弓長

「子供の部屋にミニカーがあっても不思議じゃねえだろう？」

刑事B

「しかし、その数があまりにも多かったので…軽く100台以上はあったかと…。」

弓長

「100台は確かに多いが、最近の親は何でも与えちまうからなあ…。」

刑事

「もしかしたら、大家である親の趣味ってことも…。」

歩美

「…あれ？なんだろ…ここ。」

すると突然、日記を見ていた歩美が何かに気づく。

光彦

「え？」

勇気

「ん？」

歩美

「ホラ、この最後の、『起きたら江戸川君にこのこと話さなきゃ』ってとこの…『えどがわ』っていう字を何度も消して書き直してあるから…ちよつと黒くなってるよ。」

元太

「漢字で書こうとしたんじゃないかねえのか？」

光彦

「いや、下にうつすら見えるのはカタカナのようですね…。クロシ…でしょうか…？」

コナン

「（クロシ…？）」

勇気

「…！（フツ…）」

勇気は何かに気づいた様子。

刑事

「クロシロ君！」

コナン

「え？」

弓長

「なんだよそりゃ？」

刑事

「いや、さっき病院に電話した時母親が言ってたんですよ！学校で起きた事件をすぐに解決してしまう男の子が隣のクラスにいて、『その子が明日、ウチに来るってとてもうれしそうに息子が昨日旅行先のホテルに電話してきたと…』」

勇気

「……」

刑事

「息子がつけたニックネームが…『クロシロ君』だとね…」

コナン

「！！」

コナンも何かに気づいた様子。

歩美

「じゃあ、昨日、開人君かいとが言ってた『クロシ…』ってヨロシクじゃなくて…」

光彦

「コナン君のことだったんですね!」

元太

「けど、なんで黒白なんだよ!?!」

光彦

「さあ、開人君かいとが元気になるのを待って、本人に聞くしかないですね…」

コナン

「いや…その必要はないさ…。」

歩美

「え?」

コナン

「クロシロ君としては、この場でシロクロはつきりさせてやろうじやねえーか!この中の誰が黄色い放火犯かってことをな!!!」

FILE 8 勇気の推理と新たな隣人

細井

「あのよお…」

弓長

「ん？」

細井

「さっきから気になってるンすけど…」

沖矢

「何ですか？その日記とは…」

真壁

「【黄色い人】とかって言うのも聞こえてたけど…」

さすがに長時間の事情聴取に、ピリピリしてきた住人の3人。

刑事

「あ、いや…」

弓長

「火事になったこのアパートの大家の息子の日記だよ…。その中に
出てきてるんだ【黄色い人】っていうのがな…。まあ、今ん所この火
事とは関係なさそうだから気にすることあ…。関係
大あります！！！」

弓長の言葉をかき消し、必死に光彦が叫ぶ。

弓長

「え？」

光彦

「開人君の日記に書いてあったんですよ！夜中突然、その【黄色い人】が帰ってきて、開人君のお父さんと口喧嘩してたよ！あなた達3人は火事のあった夜は出かけていて、朝帰ってきたといってたよね？」

歩美

「これって誰かがウソついてるって事だもん！」

元太

「そのウソついてる黄色いやつてのが、アパートに火をつけた犯人なんだよ！その黄色い奴、夜になったら怪しいことしてたって言ってたしよお！」

光彦に続いて、元太と歩美の二人も自分の意見を主張する。

細井

「確かに大家さんの息子のことはよく知ってるけどよ…」

沖矢

「あの子に誰か、黄色い人なんて呼ばれてましたか？」

真壁

「さあ…」

沖矢

「それのその、怪しいことってどんなことなんだい？」

弓長

「ダメじゃねーか黄色い人のことを喋っちゃ！」

元太・光彦・歩美

「え〜〜なんで!？」

3人の声が重なる。

弓長

「そいつが放火犯だと知ったら、3人共、自分は黄色い人じゃねえと、言い張っちまうだろう？」

歩美

「あ、そっか！」

コナン

「いや…大丈夫だよ…」

この3人の中の誰が放火犯かってことは、もうわかってるからさ
!」

細井

「な、何だと!？」

沖矢

「それはぜひ、聞かせてほしいね。」

真壁

「誰なんだよ?…黄色い人って…」

コナンの発言を聞いて、三者とも、視線をコナンたちへと向ける。

弓長

「お、おい!ボウズ!」

コナン

「もちろん、僕もすぐに黄色い人が分かったわけじゃないよ!開人君の日記には、赤い人や白い人も出てくるから…その赤い人や白い人が誰なのかがわかって、やっと黄色い人がわかったってワケさ!」

いつものように、得意げに話すコナン。その顔からは笑みもこぼれている。

細井

「あ、赤い人や、白い人もいるのかよ?」

コナン

「うん!日記にはこう書いてあるよ。『今日は朝からやな天気…ボ

クは早く学校に行かなきゃならないけど、赤い人は寝坊できるかもね…』これって、赤い人は毎朝何かをやっていて、この日は雨が降っていたからその何かをする必要がなくなったってことだね？それって何かわかるか？」と、探偵団に質問を投げかける。

光彦

「普通、洗濯物を干すぐらいですが、男の一人暮らしで毎日…」

元太

「運動会は雨だと中止だぞ！」

歩美

「大人は運動会やらないよ！」

灰原

「花の水まき…」

と、ここで灰原が答えを言う。

歩美

「そっか！小林先生言ってたね！お花の水は、朝と夕方にやりましょうって！」

コナン

「ああ！だから毎日アパートの植物に水をあげてたっていう沖矢さんが赤い人って訳だよ！」

弓長

「だがよ…ボウズ、なんであの兄ちゃんが赤い人なんだ？顔色からすると赤って言うより…白だが…」

コナン

「ホラ、開人君の部屋の辺りにミニカーがたくさんあったんでしょ？きっと開人君は車好きだったんだ！車で赤って言えば、真っ先に思いつくのは…」

元太・光彦・歩美「!!!!」

ここで、探偵団の3人が、

元太・光彦・歩美

「消防車だ!!!」

と、また声をそろえて言った。

弓長

「なるほど…開人君はこの兄ちゃんが、ホースで水まいてる様子を見て【あの人は消防車！赤い人だ！】ってあだ名をつけたわけか…」

コナン

「うん！」

光彦

「だとしたら…白い人も車の色って事ですよね？」

元太

「白い車なんていっぱいあるぞ？」

歩美

「歩美のお家の車も白だし…」

コナン

「あるだろ？きまって白い車が…」

灰原

「【救急車】…日本じゃ白いわね…あの車…」

コナン

「ああ、道路運送車両法で、車体の色は白と決められているからな
！」

光彦

「でも誰なんですか？救急車って…」

コナン

「救急車は何をしてくれる？」

歩美

「怪我人を運んだり…」

元太

「車の中で手当てもしてくれるよな！」

光彦

「！！！」

ここで、光彦が答えを言う。

光彦

「そうか！絆創膏です！このお兄さん、顔や指にいくつもの絆創膏を貼ってます！」

細井

「！！！」

弓長

「そういや、日記にも書いてあったな…『学校から帰ったら、玄関で転んで白い人が出かけるところでよかった』って…。」

細井

「ああ…膝ひざから血がでてたからよ…もってた絆創膏をボウズにやっ
たんだ…まあ、その前にもボウズに何度か絆創膏をやったんだが…
まさかこの色黒の俺に、白い人なんてあだ名をつけてたなんてな…」

弓長

「…とまあ、残るは黄色い人だが…」

光彦

「黄色い車って言えば…」

元太

「タクシーは黄色いぞ！」

歩美

「でも、白や緑もあるよ？」

弓長

「そうか！！車両系の建設機械！ありゃー事故を防ぐために確認しやすい、明るい黄色で塗装されてる場合が多いな…」

歩美

「けんせつキカイ？」

小学1年生にこの言葉は難しかったようだ。

弓長

「ブルドーザーとかショベルカーとか、土を掘ったりならしたりする車だよ…」

コナン

「そう…つまり、指の爪に土が入ってた…」と、クールにコナンが言いかけたその時、

勇気

「真壁さん！あんたがこのアパートを放火した、黄色い人だ！」

コナン

「な…？（こいつ…また…）」

光彦・歩美

「勇気君！」

なんと、それまで沈黙していた勇氣は見事にコナンの台詞を奪った。せりふ
それだけではなく、勇氣はこれからコナンが言おうとしたことを、
すべて言うのである。

真壁

「な、何言ってるんだよ？ 言っただろ？ この指の爪はサバイバルゲームで山の中をかけずり回ったからだって！」

勇氣

「あんた、確か派手にやられて服が駄目になったて言ったよな？」

真壁

「あ…ああ…」

勇氣

「日本でやっているサバイバルゲームで使われているのは、BB弾を発射するエアソフトガン…ペイント弾を使うのは、ペイントボールって別のゲームだ！ ルールはほとんどサバイバルゲームと一緒にしたいけどな。」

コナン

「な…なんだ…こいつ…」

灰原

「…」

コナンは呆氣にとられ、灰原はじつと勇氣を見ている。

弓長

「ホォー…」と、真壁を見る弓長警部。

真壁

「あ、いや、子供にも分かりやすいようにサバイバルゲームって言っただけさ！本当はそのペイントボールをやっていたんだよ！」

勇氣

「…ペイント弾は水溶性のインクでできてるから、服についても洗い落せばきれいに落ちるんだ。」

弓長

「ホ、ホォー…」

勇氣

「それに真壁さん。好きな色は、ネイビーグリーンで言ってただろ？ネイビーの名前がつく色は海軍の制服でよくつかわれているネイビーブルーって藍色だけ…迷彩服によく使われてんのは、オリーブドライブって色だと思うけどなあ？」

弓長

「お前さん…本当にそのなんとかゲームをやったことがあるのか？」

真壁

「あ、あ、実は、この前始めたばかりで…聞きかじった名前を適当に言っただけで…」

そういった真壁はすでに汗だくである。

コナン

「じゃあ、アパートの庭があったところを調べればいいんじゃない？」

真壁

「（な！？）」

コナン

「黄色い人が夜な夜な怪しいことをしてたっていう開人君の言葉と、真壁さんが爪に入った泥をウソまで付いてごまかそうとしている事を合わせたら…真壁さんは夜、人目を忍んで、庭を掘り起こしてたっていう事…」

勇気

「そう…。だから埋ってるはずだ。真壁さんが誰にも見せたくない何かがあるね。」

コナン

「埋ってるのは、もしかしたらデイトレードで儲けたお金…だったりして…」

真壁を見ながらにやけるコナン。

真壁

「あ、ああ…アタツシケース2個分…ざっと2億はたまったかな？」

刑事

「に、2億っ!？」

弓長

「そんな大金どこで？」

真壁

「だからデイトレードだよ! いいシステムを思いついちゃったからね。税金を払いたくないから100万たまる度に銀行から下ろして庭に埋めてたんだけど…夜中、映画から帰ってきたら、大家さんがそのトランクを持って僕の部屋の前で待ってて…『この金は何だ! ?』ってしつこく聞くからイラっときて、突き飛ばしたら、大家さん階段から落ちて動かなくなっちゃって…」

弓長

「それで? 怖くなって火をつけて逃げたってか？」

真壁

「う…うん。燃えちゃったら何もかもリセットできると思ってさ…もちろんトランクは元の場所に埋めたよ…後で掘り起こすつもりで…」

弓長

「リセットだとお!!? わかってんのか!? お前がやったことはゲームに負けたから電源を切るのとはわけが違う!!! 何十年も培ったこのアパートと思い出を一夜にして黒こげにしちまったんだ!!」

怒りのあまり、キレ口調で真壁の胸ぐらをつかむ弓長警部。

弓長

「リセットなんかさせやしねぞ：お前さんの人生ゲームはまだまだおわっちゃいねえ！ たつぷりと償わさせてやるから覚悟しとけ！ 巻き添えを食った大家親子の分もなあ！！」

真壁は汗をかき、ビビっている。

刑事

「あ、弓長警部、その親子のことなんですが：たった今米花総合病院から連絡があつて大家さんの手術は成功し、開人君も意識を取り戻したそうです！」

弓長

「おお！ そうか！！」

元太・光彦・歩美

「よかったあー！！！！」

喜ぶ弓長警部と探偵団。

光彦

「でも謎が1つ残りましたよねえ？」

歩美

「うん。コナン君が白黒君って呼ばれてたやつだよな。」

元太

「黒と白の車なんてあったか??」

弓長

「フン…そいつはきつと、警察の車パトカーのこつた!」

歩美

「あ、そっかー!!」

弓長

「このボウズのことだろ? 警察顔負けのボウズにや…うってつけのあだ名だぜ! だが、今回はこっちのボウズも名推理だったなあ!!」

といって、勇気の頭をなでる弓長警部。

勇気

「あ…うん…。ありがとう…。」

コナン

「(俺の言いたいことほとんど言いやがったな…江藤の奴…。だけど…こいつ…なんであんな推理が…。)」

光彦

「それしゃ、これから開人君のお見舞いにみんなで行きますか!!」

歩美

「さんせー!」

元太

「その病院!結構遠いから博士の車で連れてってもらおーぜ!」

沖矢

「博士?君たちの知り合いに博士がいるのかい?」

歩美

「うん!いるよー!」

元太

「いつもくだらねえゲームばっかつくってるけどよ!」

光彦

「一応、工学部の博士号を取ったと言っていました!」

沖矢

「それは奇遇だなあ:僕も工学部の博士号を取ろうと、大学院に通ってる身でね:家はこの近くなのかい?」

光彦

「はい!すぐそこです!」

沖矢

「その博士に会ってみたいんだけど:」

歩美

「いいよー案内してあげる!」

沖矢

「それはありがたい…」

灰原

「…」

灰原はコナンの陰に隠れて、沖矢昴を見ていた。

勇気

「??」

その灰原の様子を不思議そうに勇気は見ていた。

＊

—阿笠邸—

博士

「ほー、工学部の博士号を…行く行くはワシの商売敵になるわけじゃな？」

沖矢

「いえいえ…好きでやり続けているだけです…。しかし広いお住まいですねえ…。」

博士

「ああ、今はワシとこの子らの3人だけじゃ、広すぎるかのお？」

ちなみにこの子らとは、灰原と勇気のことである。

沖矢

「じゃあ、住人がもう一人増えても、問題はなさそうですね…」

博士

「え？」

勇気

「は？」

灰原

「(?!?!)」

沖矢

「実は、住んでいたアパートが燃えてしまいました…よろしければ新しい住居が決まるまで、ここに居させてもらえないでしょうか…」

博士

「あ、ああ…構わんよ…。この子らが良ければじゃが…」

灰原は、『ブンブン!』と首を大きく左右に振っている。

勇気

「…」

勇気はじつと沖矢をにらんでいる。

すると、コナンが、

コナン

「じゃあ、新一兄ちゃんの家使う?」と言った。

灰原

「(え?)」

勇気

「(何考えてんだ…。工藤の奴…。)」

沖矢

「新一兄ちゃん?」

コナン

「うん!急にいなくなったお兄ちゃんだよ!」

勇気

「…」

コナン

「ホラ！あの隣の家！僕、鍵預かってるから！」

と言って、自分の家を指さすコナン。

歩美

「ちよっとー！」

元太

「何してんだよ？」

光彦

「早くお見舞いに行きましょう！」

探偵団の3人が玄関から叫んでくる。

コナン

「おう！今行く！」

灰原

「ちよっと！？何考えてるの？貴方は組織に殺されたことになっている工藤新一なのよ！？もしも家に来る電話や手紙で貴方が生きていることがあの人の口からばれたら…」

コナン

「大丈夫だよ！」

灰原

「大丈夫って…」

コナン

「ホームズファンに悪い人はいないから!!」

と、笑顔のコナン。

灰原

「…」

目が点になり、あきれた様子の灰原。

勇気

「は…。」

勇気もあきれた様子。

コナン

「はい!家の鍵!」

と言って、鍵を沖矢に渡す。

沖矢

「本当にいいのかなあ?その新一兄ちゃんに断らないで…」

コナン

「うん！後でメールしとくから！」

沖矢

「ありがとう！助かるよ。」

コナン

「その代わり…留守はちゃんと守ってよ？」

沖矢

「ああ…もちろんさ！！！」

勇気

「（新たな…隣人…か…。）」

FILE 9 デス・アイランド

ここはとある海。東西の名探偵が、海の上でなにやら会話をしている。

平次

「ほんなら、今度はあの茶髪で、ショートの姉ちゃんや…。」

コナン

「茶髪がまだらで、気合い抜け気味だから地味な色のワンピース…」

平次

「いや、ちょっとポツチャリしてるから、体が締まって見える黒のビキニで決めてんで…」

「ザパ…」

その茶髪の女は平次の推理どおりの水着だった。

平次

「ホラ見てみ、また俺の勝ちや！」

お前…こういう推理ホンマイケてへんなあ…。」

コナン

「ほっとけ…」

「何がイケてへんの？」

と、二人の後ろに、ビキニを着た二人の少女が立っていた。

平次

「か…和葉…」

声の主は、服部平次の幼馴染、遠山和葉だった。

隣には、毛利蘭もいる。

そして…その横には…。

平次

「ちゃうちゃう！このガキがやろうやろうゆうてうるそうてかなわんからしゃーなしに…」

この言葉にコナンは…。

コナン

「平次兄ちゃんすごいだよ！『今日の和葉！トラジマの水着で決まりやで』ってピッタリ当てたもん！」

平次

「ア、アホ！」

焦る平次。

和葉

「ト…トラジマ…？この水着のどこがトラジマなん！？／／／」

蘭

「これはゼブラ柄！シマウマよ…」と、笑顔で蘭が言う。

平次

「トラもシマも同じやんけ！大阪でシマ言うたら…トラやし…」

和葉

「…」

蘭

「そ…そだね…。」

目が点になる二人。

平次

「ん…？」

と、平次は蘭の横に目をやった。

平次

「ちっこい姉ちゃん…いつの間におったんや!？」

和葉

「はあ!？哀ちゃんも朝から、ずくずくと一緒におったやん!！」

灰原

「鈍いわね…探偵なのに…。」

どうやら灰原も来ていたようである。恰好は水着ではなく私服でスカート。裸足である。

平次

「ハハ…。さやか…。すまんすまん…。んで??? そっちのちっこい兄ちゃん是谁や?」

蘭

「ああ。この子は明智勇気君でコナン君と哀ちゃんの同級生よ。この前、転校して来たんだって。」

平次

「ほお。よろしくな!」

勇気

「あ…うん…。」

ちなみに勇気の恰好も私服で、裸足である。

さらに、後ろに目をやった平次。

平次

「で？あのオツチャンは何をしとんのや？」

平次の言う、【オツチャン】とは、今、サングラスをかけ、アロハシャツを着ていて、取材に答えている。毛利小五郎のことである。

TVスタッフ

「いよいよ明日ですね、東西名探偵推理対決！自信のほどは？」

小五郎

「自信？そんなものは最初からありませんよ…あるのはこの毛利小五郎がケツの青い大阪の若僧に負けるわけがないという…確信だけっスよ～～？」

にやけ顔で自信満々の小五郎。

平次

「あのボケナス…」

と、怒る平次。

コナン

「ハハ…。」

呆れて笑うコナン。

????

「おーい！スタッフは全員集まってー！下見に行くよー！」

大声をあげたのは、TV局ディレクターの竹富雅男である。
たけとみまさお

平次

「下見？」

竹富

「ああ…明日君と毛利探偵に来てもらう例の島に行ってロケハンするんだよ！」

謎の死体と奇妙な文字が残された無人島にね…」

勇気

「（ホォー…死体と奇妙な文字ね…。）

心の中でつぶやく勇気。

竹富

「何なら君も来るかい？西の名探偵君？」

平次

「そうやなあ：（先回りするんはちよつとずつこいけど：あのオッサンが工藤に入れ知恵されて、万が一先に解きよったら腹たつし：）」
「と言いながらコナンをにらむ平次。」

コナン

「？」

平次

「よっしゃ！オレも下見につき合う（お）うたろ！」

と言いながら、コナンを抱きかかえる平次。

コナン

「お：おい？」

平次

「二人で知恵合わせて謎をあっちゅう間に解いてしもうて、大阪人が東京者よりエライっちゅうトコをお茶の間のみんなに見てもらはんや！」笑顔の平次。

コナン

「オレ：江戸っ子なんだけど：」呆れるコナン。

その後ろで：

勇気

「なんで、お前は蘭さんや遠山さんみたいに水着に着替えて海に入らなかったんだ？」

灰原

「あら：貴方そんなに私が水着に着替えて、海に入る姿が見たかったのかしら？」

半分冗談でそう言う灰原。

勇気

「え？あ…いや…そういうわけじゃ…」

灰原

「…？まあいいわ…それより…。あの沖矢昴って人…何も感じなかったの？貴方は。」

勇気

「ん？うーん…別に何も感じなかったけど…？」

灰原

「あ…そう…。」

勇気

「おお…。」

後ろでコソコソ話す勇氣と灰原の姿には…誰もきづかなかった。

＊

「ゴオオオオ…」

下見に行くため、コナンたちは、クルーザーに乗っていた。

平次

「おっ！アレやアレや！アレが身元不明の死体があったちゅう船浦
島や！」通称”鬼亀島^{おにがめじま}…”

コナン

「鬼亀島？」

平次

「見てみ！島の先っちょが亀の頭みたいになってるやろ？」

コナン

「んで？なんでこんな所でオツチャンとオメーが推理対決なんだよ？」

平次

「まあ一種の島おこしみたいなもんやな…さっきオレらがおった島の町長の金城っちゅう家が、誘拐やら強盗やらにあって島の評判が悪くなって観光客が減ってきてしもうたから、TV局呼んで盛り上げてイメージアップしよっちゅう話や！あの船浦島もその町長の島らしいしなあ…」

コナン

「（死体の謎を解いてもイメージアップにならね一気もするが…）」

平次

「まあ…TV局ゆうてもちゃんとしたスタッフはさっきの竹富さんぐらいで、後は、この辺の海に詳しい地元の連中みたいやけど…ん？」

平次は後ろを振り返る。

「ねえ？君たちどこから来たの？」

「東京？」

蘭

「あ…はい…。」

和葉

「あたし、大阪！」

蘭と和葉に声をかけていたのは、スタッフの一人で、金髪の久米好
継と、同じくスタッフで黒髪の池間伸朗であった。

久米

「んじゃ、明日の撮影が終わったら一緒に潜ろうよ！」

池間

「いいポイント知ってんだ！」

平次

「アカンアカン！今日も明日も明後日も予定がパンパンに詰まっ
てんねん！チューブ加えてペンギンみたいなヒレつけて、おまえらと
のん気に海でお魚さんゴツコしてるヒマないんじゃボケ！」

蘭と和葉に声をかけた、池間と久米の二人に苛立ちの顔を見せてい
る、平次とコナン。

久米

「あん？」

池間

「その子、お前の何なんだよ？」

平次

「ああ…こいつはオレの…」と言いかけて和葉を指さす平次。

和葉

「（オレの…？／＼／＼）」

平次

「全っ然関係ないただの幼馴染でやかましいてしょーもない女やから…手えだすなや!!」

和葉

「何やて!?!」

蘭

「なんか…日本語おかしくない…?」

久米

「だから何なんだ? お前は?」

池間

「なんでこの船に乗ってんだ? スタッフじゃねえだろ?」

平次

「へ? オレの事しらへんのか?」

????

「西の名探偵…服部平次…今回の特番の主役の一人よ!」

突然現れたのはスタッフの平良伊江。
たいらよしえ

池間

「え？このボウズが？」

久米

「だって…まだガキじゃ…」

竹富

「だから面白いんじゃないの！売り出し中の高校生探偵が、毛利小五郎に挑むってな！」

平次

「（オレがあのだケナスに挑むんか！？）」

????

「どーでもいいが…さっさとやる事済ませて切り上げようぜ…この辺じゃ陽が暮れるとグソーの使いがマブイを取りに来るっていうし
よお……なあ！？船長？」

加え煙草のこの男は、スタッフの大東幹彦。
だいてうみきひこ

「…」

船長の名は下地崇。
しもじたかし

蘭

「グソーの使いに？…」

和葉

「マブイを取られる？」

久米

「グソーはあの世…」と、久米が言うのを遮って…。

勇気

「グソーはあの世、マブイは魂の事…沖縄に伝わる昔話だよ…。」

蘭・和葉

「え!？」

勇気の豆知識に驚く蘭と和葉。

久米

「な…なんだ?このガキ…。」

勇気

「女の人が夜なべして機はたを織っていると…死に装束をまとったあの世の使いが、水辺から音もなくやってきて魂を吸い取るっていうね…。」

蘭

「へ…へえ…よく知ってるね…勇気君…。」

和葉

「そ…そやね…す、すごいすごい…」

引き気味の二人。

平次

「工藤…このちっこい兄ちゃん…何者や!？」

小声でコナンに問いかける平次。

コナン

「そういや…言ってなかったな…あいつも灰原と同じで…組織から抜け出した一人なんだよ。」

…妙に物知りでな…俺にもよくわかんねえ…」

平次

「あのアホトキシンとかいう薬でちいそうになったんか!？お前と同じで。」

コナン

「アポトキシンだよ!…まあ…そうだな…。」

灰原

「（やけに物知りね…江藤君…。）」

平良

「島に着いたら、ひと泳ぎしてくるわ。」

久米

「え…？あ…ああ…。」

＊

「ブパツ！！」

平良

「フーツ…。」

「ザプツ！！」

再び海に潜る平良。

和葉

「平次イ〜！！」

蘭

「ディレクターさんが呼んでるよお〜！！」

＊

平次

「ホォー…『姫眠るるは…申なりて…乙にあらず』か…ホンマにこの柱に刻まれてる字イの前に死体があつたんか？」

竹富

「あ…ああ…文字を背にするように寄りかかって…毎日飲まず食わずで餓死した男の死体が一年前にな…。ちょうど一年前に大型の台風が立て続けに来たから…それに遭遇して転覆した船の乗員が、この島に流れ着いたんじゃないかって地元の人と言ってたけど…」

平次

「…」

和葉

「なあ…それより誰が建てたん？無人島にこんな家…」

平良

「町長の金城さんよ…前は別荘代わりに使ってたらしいけど…台風でめっちゃめちゃになってからは手入れしてないみたいね…」

和葉

「へえ…。」

大東

「確かに…前見たときとはえらいかわりようだ…。浦島太郎になった気分だぜ…。」

コナン

「前につて…よくこの島に来るの?」

大東

「ああ…二年前までは…船の上から見ていたよ…この島の周りはムロアジがよく捕れるからな…。」

コナン

「(ムロアジ…?)」

竹富

「まあとにかく僕は服部君とここで打ち合わせしてるから島の周りの怪しげな場所を適当に探してきてよ! 謎を解く鍵なんかじゃないかってヤツを!」

平良

「OK!」

＊

すでに外は辺りがだんだんと暗くなり、夕日が照っていた。

—クルーザーの中—

平次

「姫眠るるは…甲なりて乙にあらず…甲と乙は多分、甲・乙・丙の事やから…姫が寝てんのは二やのうて一やっちゅうことやろーけど…」

勇気

「（…）」

平次

「おい…工藤？なんかわかったか？」

また小声でコナンに問いかける平次。

コナン

「んにゃ…全然…。」

灰原

「クス…さすがに東西の名探偵さんも苦勞してるみたいね…。」

コナン

「あんだよ？ 灰原…。オメーもなんか知恵出せよ…。」

灰原

「あら？ 私より江藤君に頼んだほうがいいんじゃない？」

コナン

「ああ…江藤！なんかわかったか？」

勇気

「ん？ いや…まったく…。」

蘭

「そう言えば…平良さん遅いなあ…。」

和葉

「ホンマやね…。この船に集まってから一時間ぐらいたってんのに…。
もしかしてまだ潜ってんのとちゃう？」

蘭

「あるかも…」

コナン・勇気・平次

「!!?」

「ダダダ!!」

灰原

「…」

「ダッ！」

三人に続いて、灰原もあとを追うように走りだした。

蘭

「ちよつとー！ー！！」

和葉

「平次イ〜〜！？」

コナン

「じゃあ、俺と江藤でこっちの海岸側を探すから！」

平次

「ああ！こっち側は任しとき！！！！」

勇気

「志保も服部について行ってくれ！！」

「ダダダ！！」

灰原

「えー！？え…ええ…。」

コナン・勇気

「平良さん!!!!!!」

蘭

「待ってえ!!」

平次

「ねーちゃん!!!! いてるか??!!?」

「「お~~~~い!!!!!!」」

「ザッ!!」

コナン・平次

「!!!!!!」

勇気

「な……」

コナン・平次

「た……平良さん……。」

そこには、手を合わせて目を閉じている平良さんの姿があった。
そして……平良の顔の横には……

灰原

「……我は……グソーの使いなり……」

と砂浜に書いてあった…。

FILE 10 危険な来訪者

久米

「ええ！？平良さんが殺された！？」

コナン達、一同は、平良の死体がある海岸に集まっていた。

池間

「マ…マジかよ！？」

平次

「殺されたんは、今からだいたい2時間くらい前…細いロープみたいな物で首、絞められたんや…」

平次は、平良の顔を見ながらそう言った。
確かに平良の首には、絞められた跡があった。

平次

「手や足についてる細かい切り傷やひっかけ傷は、首絞められた時に暴れて当たってしもうた草や枝の後…つまり犯人はこの姉ちゃんを森途中で殺してわざわざこの浜に運び、ついさっき逃げてったっちゅうこっちゃ！…この気色悪い文句を砂の上に残してなあ…」

竹富

「わ、我はグソーの使いなり!？」

大東

「でも探偵の兄ちゃんよお…なんでわかるんだ？」

平次

「ん？」

大東

「ついさっき逃げたなんて…」

コナン

「簡単…」とコナンが言おうとした瞬間…。またしても……。

勇気

「簡単さ! 砂があそこまで濡れてるってことは、満潮のとき波があそこまで来たってことだろ？」

灰原

「なるほど…今、波は字のすぐ下だから、波が引いた後でさっき書いてないと砂に書いた字なんて消えてしまうわね…。」

見事に、勇気と灰原がコナンのセリフを奪ったのである。

コナン

「(お前ら…)」心の中で怒るコナン。

平次

「つ、ついでにゆわしてもらおうと…ここは船着き場の丁度真裏や！オレらみんな1時間前からこの姉ちゃんを船の中で待って…真っ先に探しに出たオレとこのボウズ達が、島の両側から回り込んでこの姉ちゃんの死体を見つけたっちゅうことは…オレら以外にこの島にいてるっちゅうこっちゃ！この姉ちゃんを絞殺しよった犯人がな！！」

蘭

「ウソ…」

和葉

「ア、アタシらのほかに…？」

不安な様子を見せる、蘭と和葉。

勇気

「もしかわ…そのグソーの使ってたのが…やったのかもな…」

蘭

「え！？？勇気君！？」

和葉

「それ、本気で言うてんの！？」

さらにビビる、二人。

勇気

「え…！？あ…冗談だよ？…ハハ。」

灰原

「…」 勇気をじっと見つめる灰原。

和葉

「もう脅かさんといてや！！」

平次

「それより、和葉、お前確かデジカメもってたなあ…」

と、和葉を見ながら言う平次。

和葉

「あ、うん…今持ってるよ。」 自分のズボンのポケットを見ながら確認する和葉。

平次

「ほんなら工藤、例の光る腕時計とサンダルは肩つぽ貸してくれ！」
小声でコナンに語りかける平次。

コナン

「え？時計はわかるけど、サンダルは何に使うんだよ？」

平次

「これやこれ！」

コナン

「…なるほど…大きさの比較になるものがほしかったわけね…」

平次は、光る腕時計で例の文を照らしながら、和葉のカメラで文を撮っていた。

平次

「今、撮っとかんと次に潮が満ちたときこの字イが波で消されてしまうからなあ…」

勇気

「平良さんも波にさらわれる前に船に運んどいたほうがいいんじゃないの?」

久米

「そ、そうだな…」

勇気の指示通りに平良の死体を抱える、久米と池間。

久米

「しかし…なんで平良さんが…」

池間

「ひょっとして海の中に何かあるんじゃない…」

久米

「海の中?」

池間

「ホラ、平良さんこの島に来てすぐシュノーケリングしてただろ？
こんな海に潜るなんて絶対何かあるぜ…」

蘭

「こんな海？」

コナン

「まあ…それを調べるのは船で向こうの島に一回帰って明日明るく
なってからしたほうが…」

平次

「フン…そう言うやろ思ったで…」

「ダッ！」

平次はコナンのサンダルを捨て、突然走り出した。

勇気

「?..?」

コナン

「え? あ…(まさかアイツ、オレが止めるのを見過ごしてサンダル
を…)」

勇気

「(なるほど…)」

コナン

「誰か平次兄ちゃんを止めて!! 海に潜る気だよ!!」

和葉

「え？ ええやん…潜るぐらい…」

蘭

「海の中に事件を解く鍵があるんでしょ？」

灰原

「バカね…潮流が速いこの海でこんな暗い中潜ったりしたら…」

勇気

「プロのダイバーだって危ないぞ！」

蘭・和葉

「ええ！？？」

平次

「（確かこの辺やったなあ…）」

コナンの光る腕時計を加えている平次は…すでに海に入っていた。

和葉

「平次イ〜やめとき！！」

蘭

「危ないよ〜！！」

海岸で叫ぶ二人の声は全く平次の耳には届いていない。

「ザプツ！！」

和葉

「へ、平次ィ!？」

FILE 11 グソ一の使い。

危険と分かりながらも、海に潜った平次。
果たして…。

「ゴポゴポゴポ…」

平次は順調に、潜っていた。

平次

「(ん…? なんや? 何かあんぞ…海の底に塊が…!! ここ、これは…
…碇!?)」

「ズオオオオ!!」

平次

「うわっ!!」

平次は波に流されてしまった。

和葉

「平次イ!!」

海岸では、蘭と和葉が平次を待っていた。

平次

「ふはっ!!」

すると、蘭たちが叫んでいる逆の方向に平次はあらわれた。

蘭

「あ、いたよ！」

和葉

「平次：あんた、泳ぐの速いなあ：。」

平次

「流されたんじゃない！ボケ！！」

＊

海岸に戻ってきた平次は、和葉に服を渡されていた。

和葉

「え？潮の流れが速いの知ってたん？」

平次

「ああ：あのおっさんゆうてたやろ？この島の周りはムロアジがよ
うとれるて：ムロアジは潮流の速い海にいてる回遊魚や：その魚の

群れ狙うてるカモメもぎょーさんとんでたし…。」

ちなみにあのおっさんとは、大東のことである。

蘭

「じゃあ、さっき船から服部君が平良さんを慌てて捜しに出たのって…。」

平次

「そうや！あの姉ちゃんがあのも海に潜っていたとしたら、潮に流されてしもたかもしれへん思てなあ…。」

和葉

「けど平次！カッコつけすぎやで！一人でそんな危ない海に潜んのなんか…。」

平次

「アホ！オレは早よ事件解決したろ思て…。」

コナン

「そうそう！まさか平次兄ちゃんが小五郎おじさんに確実に勝つために先に材料集めとこうなんてズルイ事するわけないしね…」と、ニヤニヤ顔でコナンが言う。

平次

「あ、当たり前やんけ…」 凶星の平次。

勇気

「だとしたら最低だよな…。探偵として…。」
勇気もニヤケ顔だ。

平次

「あのなあ…。」

竹富

「と、とにかく話はクルーザーに戻ってから…」

大東

「どこに戻ってからだって？」

竹富

「だから、クルーザーに…」

蘭・和葉

「!!!？」

勇気

「!!!」

蘭

「ちょ、ちょっと…」

和葉

「船、なくなってるやん!？」

そう、さっきまであったはずのクルーザーが、コナンたちの目の前から忽然と姿を消していたのだ。

久米

「お、おい！まさか、あの船長！死人が出たからビビって帰っちゃったんじゃない？」

平次

「アホ！殺人があつたことは死体みつけたオレらしか知らん事やんけ！」

池間

「じゃあ、あの船長が犯人じゃないのか？オレ達が平良さんを探しに船から出てった後、クルーザーで死体があつた浜に先回りして、文字と死体を…」

平次

「アホ！無理や！オレとこのボウズ達は海沿いを探しながら回り込んでんだんやで？」

灰原

「クルーザーが通ったら、私たちが気づくはずでしょ？」

大東

「フン…どっちにしても事件の鍵はあの船長が握ってるようだな…。」

勇気

「…」

和葉

「まあ、とにかくこの島に救助船が来るまでの辛抱や！」

蘭

「そ、そだね…夜になってもスタッフの人が帰らないのに気づけば、TV局の人が探しに来るだろうし…」

と言いつつも、若干、不安な顔を見せる蘭と和葉。

竹富

「あ、いや…この島のロケハン、本当は昨日やるはずだったんだよ…でも、船とかの手配に手間どっちゃって…だからプロデューサーに内緒で今日こっそり…」

久米

「おいおい！じゃあ、オレ達がこの無人島に来てること誰もしらねーのか？」

竹富

「あ、ああ…ロケハンは、昨日済ませたって言っちゃたから…。」

池間

「まさかあんた！番組を盛り上げるためにあの船長とつるんで、こんな事してるんじゃないやねえだろうな？」

怒りながら竹富に迫る池間。

竹富

「と、とんでもない！！！」

和葉

「ま、まあ…大丈夫やで！いくらなんでも蘭ちゃんトコのオツチャ

ンが気づいて、迎えに来てくれはるから、あの家の中で待ってこ！」

平次

「……なあ？何かヤバいんとちゃうか？オレら……」

コナン

「ああ……」

引きつった顔のコナンと平次。

勇気

「そおか？何かスリルで気分が出るぜ……俺は。」

コナン

「……ハハ……。」

その頃……小五郎は……。

＊

「フハハハハ！！！！！」

小五郎の目の前のテーブルには、豪華な料理がたくさん置いてある。

小五郎

「いやあ：最高っすな！この泡盛！」

「ええ：その酒は明日の推理対決の英気を養ってもらうために用意させた古酒クースでございます。」

と言ったのは、町長の金城兵吾だ。

金城

「しっかり解き明かしてくださいよ：毛利探偵。どういう結末になろうと私は覚悟してますから…。」

それにしても遅いですね、服部君やお嬢さん方…」

小五郎

「なーに心配することありません：どーせ、決戦前夜に私と顔を会わせたくないだけっすよ！」

まあ、ガキ共はほっといて、こっちは朝まで飲み明かして元気つけちゃいましょう！泡盛でモリモリっとなね？」

＊

池間

「なにに！！？碇だと！？」

外はすでに夜。コナンたちは家の中に入り、それぞれ椅子に座っていた。大東だけは腕組みしながらなぜか立っている。

池間

「本当に平良さんが潜ってた海の底にそんなものがあったのか？」

平次

「ああ…。鎖が切れてしても錆びついた…。船の碇がなあ…」

蘭

「それって一年前にここで死んだ人の船の碇じゃない？」

和葉

「そやそや！船でこの島びたどり着いてこの家の中で台風が過ぎんのを待ってたけど、碇の鎖が切れて船だけ流されてしもてんて！」

平次

「ちゃうちゃう！碇には貝や海藻がびっちりついてたから…。あら、海に沈められてから四、五年はたってんで…」

池間

「四、五年…。そういえばそのぐらい前だったよな？町長の家で例の事件が立て続けに起こったのは…」

久米

「ああ…」

コナン

「な〜に？例の事件って？」

池間

「最初は五年前…町長の一人娘の都お嬢様が誘拐されて…その一年後、今度は町長の家に強盗グループが押し入って、家宝の金の屏風が盗まれたんだ…犯人から電話を取った町長や執事の話だと、誘拐犯も強盗犯も同一人物って話だな…」

灰原

「それで？その犯人はどうなったの？」

久米

「お嬢様も身の代金も屏風の代償金も町長が突っぱねたから捕まらずじまいで、お嬢様も屏風も行方知れずって話だぜ…」

竹富

「町長としては踏んだり蹴ったりだよ…お譲さんが誘拐されたのは丁度奥さんを亡くした頃らしいし、強盗グループに家政婦が一人殺されて執事は怖がってやめてしまったらしいし…町長は身の代金をケチる冷血漢だと陰口をたたかれた上に…自分が所有してるこの無人島で、餓死した男の死体とこの家に刻まれた妙な文字が見つかって…おまけに今回の殺人事件…本当にグソーの使いに魅入られてしまったんじゃないかと思ってしまうよ…」

蘭・和葉

「……」

勇気

「ホォ〜…。」

和葉

「な、なあ、確かこの柱に刻まれた字イって『姫眠るるは甲なりて乙にあらず』やったやん？」

蘭

「う、うん…」

和葉

「この姫って誘拐されたお嬢様の事なんとちゃう？」

蘭

「ええ！？じゃ、じゃあ、そのお嬢様はもう殺されていてこの島のどこかに埋めれてるって事？」

和葉

「そうや…あの世の使いになって化けて出て平良さんの首を…」

話しながら、ガタガタと震える二人。

「ガツッ！」

するといきなり、大東が包丁をテーブルに勢いよく突き刺した。

蘭・和葉

「ぎゃっ！」

大東

「あの世の使いにビビってんならそのナイフを使いな…昔話だと女は魂を口から抜かれねーように小刀シークを口にくわえたっていうからよお…。」

まあ、護身用にもなるしな…」

「ガラ…」

などと言いながら、物置を開ける大東。

そんな大東をちよつとムカついた目で見ると、コナンと平次。

大東

「ん？ホォーこいつはおもしれえ…見てみなこの湯飲み茶碗！誰かが灰皿代わりに使ってるぜ！」

大東が持ち出した湯飲み茶碗には、数本の煙草が入っていた。

勇気

「ん？煙草の種類はバラバラで…火を消すためにそこに乾いた水もまだ乾いてねえな…」

平次

「ホンマや…ちゅう事は、オレらがこの島に来る前に得体の知れん連中が集まって、何かをしたちゅう事やな…」

灰原

「…一人や二人じゃないかもね…」

コナン

「いるんだろうよ…。平良さんを殺し、この島のどこかで息を潜めている…グソーの使いってやつがな…」

FILE 12 ミステリー・ワード

外はすっかり闇に包まれていた。コナンたちは未だ、家の中にいる。

池間

「オイオイ…本当かよ？平良さんを殺した犯人の仲間が、他にも大勢この島に隠れてんのか？」

平次

「その可能性もあるっちゅうこっちゃ…。」

大東

「フン…ひょっとしたらどこかで息を潜めて狙ってるかもしれないぜ…俺たち全員の魂をな^{マフイ}ぁ…」
くわえ煙草の大東がそう言う。

和葉

「え…？」

蘭

「そんな…。」

不安な表情の蘭と和葉。

灰原

「じゃあ、もうこの部屋にいるんじゃない？」

久米

「それはないよ…この部屋にいるとき誰もいないのをみんなで確かめただろ？」

コナン

「でも、この家一年前の台風でいろんな所の窓ガラスが割れてたから…」

平次

「オレらがここで話してる間にこっそり忍びこむのは簡単やろなあ…」

竹富

「じゃ、みんなで手分けして家の中を調べてみよう…」
ビビりながらも席を立った竹富。

平次

「そうやな…ここで固まってビビってもしゃーないし…」

勇気

「じゃあ、久米さんと池間さんと大東さんは二階を頼むよ。」

池間

「あ…ああ…」

久米と大東は声を発さず勇気のほうを振り向いただけだった。

平次

「オレらは、この竹富さんと1階を調べるから…」
と言いながら竹富を指さす平次。

竹富

「そ、そうだね…女の子が二人もいるのに男が君一人じゃ…襲われた時危ないから…」

平次

「はぁ？何言うてんねん？」

竹富

「え？」

コナン

「（守ってもらうのはあんたのほうだよ…）」

呆れ顔のコナンに対し、灰原は『クスッ』と笑い、勇気は灰原の笑い顔を見つめていた。

それに気づいた灰原は…。

灰原

「…何？…」

と、聞いた。

勇気

「え？あ…いや…な…なんでも…」

＊

先頭を歩いている平次はろうそくを持っている。隣にコナン、勇気。

その後ろに竹富、蘭、和葉、灰原が並んで歩いていた。

竹富

「へえ〜空手を…」

蘭

「ええ…一応、都大会で優勝しました…」

和葉

「アタシ、合気道二段！」

遠慮気味の蘭に対し、自慢げに話す和葉。

竹富

「そ、そりゃ頼もしいね…」

平次

「あのオッサン、こっちの組に入れて正解やったな！」

コナン

「ああ…一番弱そうだったからな…。」

勇気

「…！おい、部屋があったぜ。」

＊

『グッ』とドアノブを握った平次。

「ギィィ…。」ドアの開く音のせいで、より一層緊張感が高まる、

蘭と和葉。

平次

「おゝい…誰かいてるか？」

蘭

「なんか、誰もいないみたいだね…。」

和葉

「そ、そやね…。」

勇気

「ん？何だここ、他の部屋と比べてやけに広いな。」

竹富

「多分、町長と奥さんの部屋だからだよ！ホラ！町長と奥さんの写真も机の上に飾ってあるし…。」

と言って、写真を手に取り、勇気に見せる竹富。

勇気

「ん？これ…2枚重なってるぞ…。」

竹富

「え？」

勇気

「え？？？裏から別の若い女と映ってる写真出てきたぞ！」

平次

「なんやと？ちょっと、見せてみい！」

そう言って、平次は勇気から写真を奪い取った。

平次

「…まさかこの町長…浮気しとったんと…」

写真を見た平次はそう呟いたが。

竹富

「違うよ…裏にあった写真の女性は、町長の一人娘の都お嬢さんだよ！奥さんに似て、色白で気立てが良くて誰が射止めるか島中の評判だったらしいよ…。」

まさか五年前、短大在学中に誘拐されて行方知れずになるなんて思わなかったからね…」

平次

「あんた確か、九州のTV局から来たゆうてたけど…その割にはえらい詳しいなあ…」

竹富

「あ、いや、町長の家で家政婦をしていた松本嘉子さんといところ同士でね、よく話を聞かされてたんだ

…」

平次

「へえ…」

和葉

「なあ…その家政婦さんってひょっとして…」

蘭

「強盗事件の時に亡くなった…」

ここで、後ろから、顔がこわばっている蘭と和葉が竹富に疑問を投げかける。

竹富

「ああ：四年前のあの事件で強盗グループの一人にね：あ、いところ士といえ、スタッフの池間君も母親が町長の奥さんと姉妹でいとこ同士だと言ったよ…。直接会ったことはほとんどないらしいけどね…」

コナン

「ねえ？この写真の後ろに写ってるお城って見たことないけど、どこのお城？」

竹富

「それは、お城じゃなくて町長の家だよ…。お城みたいに大きな屋敷でね嘉子さんの話だとその屋敷が建った頃、まだ小さかった都お嬢さんはとても喜んでいたそうだよ！お城のお姫様になったみたいとね…」

和葉

「ほんならやっぱりこの家の柱に刻んであったあの変な字イの『姫』っちゅうんは…」

蘭

「お嬢様のこと？」

蘭と和葉は互いに見つめあってそう言う。

灰原

「…変な文字ならこの柱にも書いてあるわよ…」

二人の後ろのいた灰原が、柱の上を見上げながらそう言った。

蘭・和葉

「え？」

灰原

「きっと、そのお嬢様を書いた字なんじゃない？」

蘭・和葉

「ええ!!?」

ビビる二人。

灰原

「ほら、三つ…」

と言って、灰原は柱を指さした。

平次

「ホンマや…柱にクレヨンみたいな物もんで書いてあるなあ…」

勇気

「ん…？一番上が『ちよにい』……その20?ぐらい下に『かあちゃん』…で、一番下が『わたし』か…『わたし』の字のそばにたくさん線が引いた後からみると…お嬢様が小さい頃この島に一緒に来た誰かと背比べしてた跡かも…」

和葉

「なんや…背比べか…脅かさんという…」

蘭

「でも変じゃない？『かあちゃん』ってお母さんのことでしょ？お

嬢様なのに庶民的っていうか…」

コナン

「いや…『かあちゃん』はお母さんのことじゃないみたいだよ…」
コナンは柱を見ながらそう言った。

蘭

「え？」

コナン

「ホラ見てよ！消えかけてるけど、この部屋の扉に同じクレヨンで書いてあるでしょ？『ママのお部屋』って…」

蘭

「じゃあ誰なの？この『かあちゃん』と『ちよにい』って…」

竹富

「お嬢さんの学校の友達じゃないかなあ…」

コナン

「違うよ！だってお嬢様がこんな小さい時にあんな大きい友達がいるわけないもん…」

『わたし』と『かあちゃん』『ちよにい』は書かれている場所が20？ほど離れているのでコナンの言うとおりである。

平次

「『かあちゃん』と『ちよにい』ならこっちの扉にも書いてあんだ！」

和葉

「向こうの部屋が『ちよにい』の部屋で…こっちが『かあちゃん』の部屋や……」

それだけやない…字イのそばに変な絵が描いてあんねん…」

勇気

「ホントだ。『かあちゃん』の方は鳥で…『ちよにい』の方はウナギ…見たいだ。」

蘭

「で、でも、こんな暗い中で見る子供の絵って…」

和葉

「気色悪いなあ…」

また怯える蘭と和葉。

平次

「まあ、とにかく…こんな無人島の家には部屋があるっちゅう事は、『かあちゃん』も『ちよにい』もお嬢様としょっちゅうここにきてた人間やっちゅうこっちゃ！」

コナン

「救助船が来て向こうの島に帰ったら町長さんに話を聞いて、この二人が何者か教えてもらわないといけないみたいだね…この殺人事件に関係あるかもしれないし…」

「うわあああ!!!!!!」

すると、突然、大きな叫び声が家中に響き渡った。

コナン

「!？」

平次

「なんやっ!？」

FILE 13 救助船

突然響き渡った、叫び声。

蘭

「何？今の声…」

竹富

「久米君じゃないか…？」

和葉

「二階で何かあったんとちゃう？」

コナン・平次

「(まさか…犯人が…)」

東西名探偵が思っていることは一緒だ。

平次

「クソッ！」

コナン・平次は2階へ向かって走り出した。

「ダダダ…」

久米

「ああ…」

久米は頭を抱えガタガタと震えている。

平次

「おい！？どないした？まさか、犯人見つかったんか？」

池間

「違う違う！」

平次

「え？」

勇気

「久米さんが急に大声出して、腰を抜かしたんだよ。窓のカーテンに隠れてた、この絵を見てね…。」

コナン

「（な？…こいつ…いつの間に二階に…。）」

蘭

「あの絵のモデルって…さっき写真で見たお嬢様なんじゃない？」

竹富

「たぶん奥さんが描いたんじゃないかなあ…奥さんは絵を描くのが上手だったと嘉子さんが言ってたし…」

池間

「嘉子さん？」

竹富

「あ、ああ…嘉子さんとは私のいところで町長の家で家政婦をやっているね…」

池間

「へえ…つまりここには町長の家にならのかかわり合いのある

人間が、四人もいるってわけか…。」

平次

「四人やと?」

池間

「ああ…オレの母さんは六年前に病死した町長の奥さんの妹だし…、ディレクターは家政婦といとこ同士…オレとダイバー仲間の久米は、小中高とお嬢様と同じ学校に通ってた同級生で…、この大東さんは町長の奥さんと幼馴染らしいしな…。」

大東を見ながら言った、池間。

コナン

「幼馴染?」

コナンは池間を見上げる。

池間

「ああ…去年、奥さんの墓参りに母さんと来た時に、このオッサンが墓に華を添えててな…母さんに聞かれてそう答えてたんだ…。」

コナン

「ねえ、お母さんが奥さんの妹なら、お兄さんもこの島に来たことあるの?」

池間

「いや…この島どころか町長の家にも行ったことはほとんどねえーよ…町長は大金持ちで敷居が高かったからな…。」

勇気

「けど、なんでお嬢様の絵を見て久米さんがビビらないといけない

んだろ…。」

池間

「さあな…お嬢様の幽霊が出たとも思ってるんじゃないか？もう殺されてるって噂だったしな…」

灰原

「…で？この家に不審な人物はいないみたいだし？一つの部屋でまとまって、救助船が来るのを待った方がいいんじゃないの？」

コナン

「あ、ああ…そうだな…」

＊

「……………」

大東は立って腕組み、竹富、久米、池間は椅子にすわり、ひじをついて、沈黙している。

蘭と和葉は座りながら寄り添って寝ている。

コナン、勇気、平次は起きていた。が…、疲れているのか、灰原も

座りながら寝ていた。

「……………」

勇気

「おせえな…。」

「コンッ…。」

勇気

「ん…?」

灰原は、隣にいた勇気に寄り添って寝てしまった。余ほど疲れているのだろう。

勇気

「（な／＼／＼…。まあ、…いいか…。）」

運よく、コナンと平次らは時計を気にしていたので、その光景を見ていなかった。

＊

コナン

「オイオイ…いくらなんでも遅すぎねえか…?」

勇気

「ああ…。」

平次

「まあ、あの小五郎^{ポケナス}のことやから…どーせ、どっかの姉ちゃんと酒盛りしてるんやろけどなあ…」

と、平次が言ったその時

「ゴッ！！ガガガ…」

と、すごい音がした。

この音で、眠っていた女三人は目覚めた。

平次

「！！！」

和葉

「ふぁ…何今の音…？」

蘭

「も、もしかしたら！」

灰原

「！！…寝てしまったのね…私…。救助船…来たのかしら？」

勇気に寄り添って寝ていたことには、寝起きのせいか気がつかなかった灰原。

「ガチャ！」

蘭が扉を開けた。

蘭

「あ、やっぱり！救助船よ！」

和葉

「助かったあ！！」

勇気

「ん？」

平次

「なんか…なんか変やぞ！あの船！！」

コナン

「ああ…明かりもついてないし、船の止め方も滅茶苦茶だ…。」

蘭

「おい！！」

和葉

「ここや…ここ…！！」

そんなコナンと平次の言葉にも目も向けず、船へと走り出した、蘭と和葉。

「タタタ…」

蘭は懐中電灯を船へと向けた…。

蘭・和葉

「…？…！！！！きつ、…きやああああ！！！！」

なんと二人の目の前には、血を頭から流し、船に吊らされている、船長の姿があった。

そして船長の顔の横には、血で書かれていた：『我はグソーの使いなり』と…。

FILE 14 姫と竜宮城（前編）

コナン達は、全員クルーザーの前に集まっていた。

平次

「ひどい殺し方やな…犯人はこの船長を硬いパイプみたいな物^{もん}で何べんも何べんも殴ったんや…もう死んでるてわかった後も何べんも…」

勇気や灰原、スタッフは皆、船長の死体をじっと見つめていた。

蘭

「そんな…」

平次

「ほんで、この死体の首に縄くくりつけて船の横に吊るして、手にはめてた軍手に船長の血ィ付けて、例の字を書いたんやろ…『我はグソーの使いなり』ってなあ…こら相当恨み持った奴の仕業やで…」

竹富

「で、でも一体誰が…」

久米

「や…やっぱりいるんだ！この島や島の周りの海に俺たち以外の人間が…人を殺して楽しんでる連中が隠れてるんだよ！！」
ガタガタと震えている久米。

勇気

「（んなバカな…）」

大東

「確かにそうだ…船がこの棧橋に衝突したとき、俺たちは全員、あの家の中にいた…。犯人が海の上でこの船を乗り捨てたか、別の船に飛び乗ったかはしらねーが…。俺達のほかに誰かが、この島の近辺に潜んでいるのは間違いなさそうだ…」

池間

「ああ…『グソーの使い』と名乗る…いかれた殺人気がな…。」
大東と池間を強張った表情で見つめる蘭と和葉。

コナン

「いや…そうとは限らないよ…。」

蘭

「コ、コナン君!？」

コナンはいつの間にかクルーザーの上に乗っていた。

コナン

「今、船の中を見てきたら操縦席のところにちっちゃいTVテレビみたいな機械があつてさ——その画面見たらこの船、棧橋から海をグルーッと一周しただけみたいだよ!」

池間

「そ、そうか、自動操縦機だ! オートパイロットそれを使えば無人でも…」

大東

「だがなボウズ…海には潮の流れってもんがあつてなア…いくら自動操縦でもこんなピッタリと棧橋にぶつけることなんか…」

すると、勇気がコナンの前に立ち、

勇気

「んにゃ…ピッタリじゃなくてもいいよ…」
と言った。

灰原

「（！！この人…また…）」

大東

「ん？」

勇気

オートパイロット

「船の自動操縦機が潮流で受ける誤差は、だいたい50m～100m…この島のこっち側の海岸に擦り気味に着くように設定したとしたら、島の周りのリーフにそって、ぶつけることは可能…。」

平次

「そのボウズの言う通りや！見てみ！船の横っ腹に擦った跡がついてるやろ？珊瑚礁をガリガリ削って船が進んだ証拠や！」

大東

「ほう…」

平次

オートパイロット

「つまりや、自動操縦機を使たら何時間も前にこの栈橋から死体を吊った船を出したとしても、この犯行は可能やっちゅうこっちゃ！…島の中にずーっとおった…オレらにもな…」

平次は大東、竹富、池間、久米の四人を見ながらそう言った。

池間

「お、おい…じゃあまさか…俺たちの中に犯人がいるかもしれないっていうのかよ？」

平次

「ああ…オレら六人が平良さんを捜しに船を出たとき、あんたらもオレらの後を追って船から出たゆうてたやろ？そんな時、一番最後まで船に残ったやつやったら船長は殺せるというてんねや！」

池間

「誰だよそれ…？」

久米

「オ、俺じゃないぞ…」

大東

「最後に船から出たのはこの俺だ…」
自分に指をさした大東。

竹富

「じゃ、じゃあ…まさか…あんたが…」

大東

「だが、俺が船から出た後、こっそり船に戻って船長を殺すことは他の三人にもできるし…それに忘れちゃいねーか？探偵の兄ちゃん…平良っていう姉ちゃんの死体を見つけた時のことを…」

平次

「ん？」

久米

「そ、そうだよ、お前言ってたじゃないか！平良さんの死体のそばの砂に書いてあった文字はあの時、島の真裏の船の中にいた俺たちには書くのは無理だって…」

竹富

「そ、それに平良さんの時も船長の時も、死体のそばに書いてあった文句は全く同じなんだから同一犯なんだろう？だったら我々の中に犯人がいるわけないよ…」

大東

「まあ、犯人が複数犯なら俺たちの誰かと同じ字を書くように示し合わせたって事も考えられるが…そいつも犯人が仕掛けた罠かもしれないなあ…俺たちの中に犯人がいると見せかけて、仲たがいさせて孤立させるためのなあ…」

平次

「…」

蘭

「と、とにかく船は戻ってきたんだし…」

和葉

「そやな…話は向こうの島に戻ってからした方がええんとちゃう？」

平次

「いや…船長の死体下ろす時、オレも船人中見たけど燃料はほとんど残ってへんかった…」

蘭・和葉

「ええ?？」

平次

「それだけやない…無線も壊されてたし…おれらの荷物もみんなの
ーなってる…ちゅうことは…犯人はオレらをこの島に閉じ込めて
まだ何かやらかす気イかもしれへんな…」

蘭

「や…やらかすって…」

和葉

「まだ人殺す気なん??」

不安と緊張がより一層高まる二人。

平次

「ああ…殺されたなかったら、さっきみたいにあの家の中で救助船
を待つしか手はないっちゅうこっちゃ!」

池間

「――ったく…いつまで待ったら救助船はくるんだよ…」

久米

「さあな…」

と言に残し、コナン、平次、勇気、灰原の四人以外は家の中に入っ
て行った。

平次

「…おかしいな…この事件…」

コナン

「ああ…」

平次

「犯人が最初に殺した平良さんは、胸で手え組まして目エも閉じさせてたのに…二番目に殺した船長はボコボコのタコ殴りや…」

コナン

「犯人が、二人以上いて別々の人間が殺したせいかもしれないねえが…それにしても殺し方が違いすぎる…。」

平次

「それに気になるんは…」

と、平次は言いかけた瞬間…、

勇気

「気になるのは殺させる間の平良さんと船長の行動…だろ？」

平次

「あ、ああ…」

コナン

「そうだな…平良さんは危険を冒して潮流が速い海にわざわざ潜ってたし…船長は、帰りの待ち合わせ時間ギリギリまで船で島の周りを回ってたし…」

平次

「船ん中に海底探査機もあったから…あらきつと、この辺の海ん中

を探してたんやろうな…多分、オレが海の底で見た碇の先についてたはずの…何かをなあ…」

コナン

「…ああ…。それより江藤、ちよつと聞きてー事があんだけど。」
と、突然勇気に話しかけたコナン。

勇気

「ん?…」

コナン

「前も聞いたけど、なんでオメー…認めたくねえけど…おれや服部並の推理力があんだ?」

服部

「…そやな…なんでや…兄ちゃん何者や?」
なにもん

勇気

「…もう死んじまったけど…親父が推理小説家でよ…工藤の父さんみたいに有名じゃないけど…その影響か、ガキの頃からいろいろやらされてたんだ。…小説書かされたり、読まされたりな…。」

灰原

「まるで工藤君ね…。でも、貴方に一つ忠告しとくけど、大人の前でその自慢の推理力を発揮するのはやめてくれないかしら? 仮にも今のあなたの姿は小学1年生…もしこのことが組織にばれたら…」
勇気をにらむ灰原。

勇気

「そのことか…。悪い悪い…。ついな…。これから気をつけるよ。」

笑顔で謝る勇氣。

コナン

「親父さんって…オメーの両親…なんで亡くなったんだ？」

勇氣

「母親はオレが生まれてすぐ死んじまった。…親父はその推理力が認められて無理やり組織に入れられたんだ…。オレと一緒にな。」

灰原

「でも…あなたたち親子の存在なんて全く知らなかったわ…。」

勇氣

「俺たちは下っ端だから…。親父は組織に殺されたけど…おれは耐えたんだ…。組織を抜け出すチャンスを見つけるまでな。」
ちよっと寂しそうな表情をした勇氣。

コナン

「なるほど…。オメーの素性はよくわかったけど…今は事件が優先だな。」

ここでコナンが話題を本題へと戻す。

平次

「そうやったな…で、工藤、兄ちゃん、気イついてたか？オレらがさっき集まってた部屋のイスの裏…」

コナン

「ああ…クレヨンで描いた子供の字だろ？…確か俺が座ってた椅子が『わたし』で…蘭が座ってた椅子が『ママ』…」

平次

「で、なんでか知らんけど…おれが座ってた椅子の裏には…」

「「『かねしろさん』…」」

コナン、勇気、平次が声をそろえて言った。

平次

「あの字、お嬢様が書いた字やろ？そしたら、金城さんはお父さんのはずや…何で『パパ』って書かへんねん？」

勇気

「それに、お嬢さんと背比べしてた『かあちゃん』と『ちよにい』の椅子がなかったのも引っ掛かる…。」

コナン

「ああ…あの家に部屋まであるのに椅子がないのは変だな…。…『かあちゃん』と『ちよにい』か…何者なんだ？」

謎が深まる中、波は「ザザン」と音を立てた。

FILE 15 姫と竜宮城（中編）

———家の中———

蘭、和葉、大東、久米、池間、竹富の6人は先に家で待機していた。

池間

「おいおい、もう朝の5時じゃないか…どーりで腹が減るわけだ…。」

久米

「丸半日何も食ってねえーからな…。」

竹富

「ああ、喉も乾いたし…。」

蘭

「じゃ、私たち台所から何かとって来ましょうか？」

和葉

「保存食とか、缶ジュースとかあるかもしれへんし…。」

竹富

「そ、そうだね…。」

蘭と和葉は、顔を強張らせながらも、ろうそくを持って台所へと向かった。

その様子を、不安そうに池間が後ろから見ている。

池間

「大丈夫かよ？女の子二人だけで…。」

竹富

「大丈夫だよ…。あの子たち、結構腕が立つらしいから…。」

池間

「へえー…。」

——台所——

蘭と和葉は、台所へ着くと戸棚を開け出し、保存食を探し始めた。ちなみにろうそくは、蘭が持っている。

和葉

「あったあった！！センベイとかりん糖や！！」

蘭

「でも、そんなの食べたら余計喉が渴くんじゃ…」
笑いながら話す蘭。

和葉

「食べへんよりマシなんちゃう？」
と、和葉が笑顔で話した直後…。

「ポタ…。ポタ…。」

と、廊下から水がはねる音がした。
当然、二人はこの音に反応する。

和葉

「何なん？今の音…。」

蘭

「さあ…水が落ちる音みたいだったけど…。」

「ポタ…。ポタ…。」

徐々に音が近くなってくる。

蘭

「ちよつとヤダ！こっちにくるよ！！」

和葉

「ま、まさか…。」

「ガチャ…。」

ドアノブに手がかかる。

蘭・和葉

「（グソーの使い！？）」

「ギィィィ…。」

平次

「ん？」

現れたのは、“グソーの使い”ではなく平次だった。
平次の周りには、コナン、勇気、灰原の姿もある。

平次

「何してんねん…？ナイフと包丁くわえて…」

和葉

「へ、平次^{へいひ}…」

と言って、二人はナイフと包丁を口から外した。

和葉

「そんなことゆたかてグソーの使いや思てんもん…。」

蘭

「ホラ、大東さんが言ってたでしょ？魂を吸い取られなくなかったら刃物を加えてろって…。」

和葉

「だいたい平次も平次や！何であんたぬれてんの？」

和葉の言うとおり、平次のズボンはびしょびしょに濡れていた。

平次

「ん？あ、これか？」

コナン

「あの後また、平次兄ちゃん海に潜ったんだよ！」

勇気

「犯人がああの栈橋で俺達の荷物を捨てたんなら、携帯電話が入った服部さんのバッグがああの辺の珊瑚礁に引っ掛かってるかもしれないってね！」

和葉

「それで…あったん？バッグ…」

平次

「いや…潮に流されてしもたみたいや…ん?…『かあちゃん』や…」

和葉

「え?」

和葉の隣に、横倒しになった椅子があった。裏には平次の言った通り『かあちゃん』と書かれている。

灰原

「こっちの椅子の裏には、『ちよにい』って書いてあるわよ…。」
と、灰原が腕組みをして椅子を見ながら言った。

和葉

「なあ、もしかして…その『かあちゃん』って家政婦やった松本嘉子さんの事なん tochやう?」

蘭

「そっか!家政婦のかの字を取ってかあちゃんね!家政婦さんならよく台所にいるし…」

服部

「ほんならなんなんや!この『ちよにい』って…」

『ちよにい』と書かれた椅子を指さしながら、そう言った平次。

灰原

「全く…。何がなんだかさっぱりね…。」

灰原はすでにお手上げ状態だったが、
勇気

「…」

勇氣は考えている様子。

コナン

「あれ？薄く字が残ってる…。最初に書いた字を消してその上から『ちよにい』って書いたみたい…。薄くて読みにくいけど…『どじようさん』じゃないかなあ？」

平次

「そやったらあの『ちよにい』の下に描いてあつた絵エはドジョウやったんか…。」

灰原

「『ちよにい』とドジョウなんて関係ないんじゃないの？」

勇氣

「確かに…。かあちゃんの下あの鳥どりの絵が鳥カラスなら分か…。！？」
勇氣は言葉に詰まった様子。どうやら何かが頭の中で引っ掛かったらしい。

平次

「カラス鳥…。」

和葉

「でもあの鳥、お嬢さんが屏風の絵エ見て描いただけなんとちゃう？」

蘭

「じゃあ、あの鳥の絵は白鷺シラサギなの？」

コナン

「白鷺…」

コナンと平次も何かに気づきはじめている。

和葉

「さっき、ディレクターさんがゆうててん！四年前、町長が盗まれた金の屏風には、白鷺シラサギが描いてあったって…」

蘭

「国宝級で時価二億円もするそうよ…」

平次

「鳥カラス…白鷺シラサギ…ドジョウ…。」

コナン

「クソッ！ここまででてんのに！」

東西名探偵は頭を抱えている。

勇気

「……………！！（なるほど…。）後は…。」

灰原

「あら？謎は解けたのかしら？裏切り者の探偵もどきさん？」
と、ニヤケ顔で灰原が言った。

勇気

「探偵もどきって…オイ…。」

和葉

「トラなら大阪…タカなら福岡…コイなら広島…」

上を向いて和葉も考えている。

蘭

「タイやヒラメだったら竜宮城なのにね…」
蘭が笑顔で言う。

コナン

「（竜宮城！？）」

平次

「（それや！！！！）」

と、ここで東西名探偵が何かにひらめき、話し合う。

それを見た和葉が…、

和葉

「なあ…やっぱり変やでコナン君…。年、サバ読んでんのとちゃう？」

と、小声で蘭に言った。

蘭

「そ、そんなことないと思うけど…。」
若干、引き気味の蘭。

コナン・平次

「！！？」

さらに何かに気づいた二人は和葉に迫る。

平次

「和葉…今何てゆうた？」

和葉

「え？」

平次

「今、なんちゅうたか聞いてんねん！！！！」
ものすごい顔で和葉に問いかける平次。

和葉

「サ…サバ読んでんのと…ちゃ、ちゃう？？」

それを聞いた東西の名探偵は、家を飛び出した。

和葉

「へ、平次？？」

蘭

「コナン君！？」

勇気

「やっと気づいたか…。（悪いが二人…、今回はオレの方が先にトリックにわかつちまったな…）」

＊

二人は砂浜を全力で走っていた。

コナン

「今、午前6時10分前…」

腕時計を見るコナン。

平次

「平良さんの死体を見つけてからもう12時間以上たってんぞ!!
俺らの推理どおりやったらまだ……残ってるはずや!!」

「ザザア!!」

足を止めた二人。

平次

「あ、あらへんぞ…」

コナン

「確かこの辺のはずだったけど…」

平次

「クソッ! やっぱ犯人に消されてしもうたか!」

コナン

「…いや…見落としてるぜ…俺のこの小さな足跡をな…」

平次

「ほんならやっぱりこれはトリック…。でも、どないすんねん? 犯人わかったけど証拠があれへん…」

コナン

「ないんなら出させるしかねーだろ…姫が眠るるこの森に誘い出して…。」

——家中——

一方こちらは、勇気たちがいる家中。

蘭

「どこ行っただろ…二人とも…。」

和葉

「何やってん…一体…。」

残った二人は、顔が強張りながらも、コナンと平次を待っていた。

灰原

「…で、貴方もわかってるんでしょ？」

こちらもなにやらこそこそと話している。

勇気

「ん？ ああ…。」

灰原

「いかなくていいのかしら？ 名探偵さんのところに。」

勇気

「行くよ…先回りしてな…。」

FILE 16 姫と竜宮城（完結編）

和葉

「へ、平次!？」

蘭

「コナン君!？ もー、どこにいったのよ?」

和葉

「心配させなや!!」

コナンと平次は勇気や蘭たちがいる家へ戻っていた。慌てて飛び出してため、蘭と和葉が心配しないのも無理はない。

平次

「まあ、ええやんけ! おかげでわかってしもうたんやから…。」

蘭

「わ、わかったって?？」

和葉

「ま、まさか…」

この平次の発言に、食いつく蘭と和葉。

平次

「そうや! 犯人が使ったトリックも、その犯人が…とぼけた顔してオレらのそばに…ずーっとおったちゅうこともない!」

平次は、蘭と和葉の後ろにいる、4人のスタッフを見ながらそう言った。

蘭

「ええ！？この中に犯人がいるの！？」

和葉

「誰なんそれ？早よ教えてーな！」

蘭と和葉も後ろの4人を見ながらそう言う。

平次

「そらまだや…」

笑顔で言う平次。

蘭・和葉

「は？」

目が点になった二人。

平次

「誰がやったかっちゅうんはこれから一人ずつ話聞いてから決めさしてもらおうで…」

まずは久米さん…あんたからなあ…」

久米

「え…」

平次

「まあ、ちょっと聞いたらわかる事やから、他の人は待ってるうちに聞かれる順番決めといてや…」

そう言って、平次達は扉を閉め、部屋を出て行った。

池間

「おい…遅くないか？」

竹富

「あれから30分くらいたってるのに…」

平次達は、30分たっても部屋には戻ってきていなかった。

和葉

「多分もうすぐやて…ちょっと聞くだけや…言うてたし…」

蘭

「そうだね…あれ？」

和葉

「どうしたん？」

蘭

「そう言えば…コナン君と勇気君は？」

と言いながら、テーブルの下を見る蘭。

和葉

「え？いてへんの？哀ちゃんはどこにおるのにな。どこに行ったかしらへん？哀ちゃん。」

珍しく灰原に問いかける和葉。

灰原

「…さあ？知らないわ。」

灰原は、いつものようにポーカーフェイスで冷たく答えた。

蘭

「どこに行ったんだろ…。」

「コラ、ちょー待て！！！！！」

いきなり、室内に平次の叫び声が響き渡った。

蘭

「え？」

和葉

「平次？」

当然、全員この声に反応する。

大東

「おい、どーした！？！」

大東が、扉を開け、平次に問う。

平次

「どーもこーもあらへん！アイツ逃げよった！」

蘭

「に、逃げたってことはやっぱり犯人は…」

コナン

「平次兄ちゃんがあんな嫌味言うからだよ！『あんたが喋んの待ってたら浦島太郎になってまうで！』なんて…」

コナンは呆れた顔で平次を見上げながら言った。

平次

「しゃーないやろ？何聞いても答えへんねやから…
まあとにかくみんなで手分けして久米さん捜そ！海に入って自殺で
もされたら洒落にならへんぞ！」

＊

池間

「お——い！久米——！！」

竹富

「どこだ——！！」

池間と竹富の二人は砂浜を走りながら捜している。

蘭

「久米さ——ん！！」

和葉

「おったら返事しいい！！！！」

蘭と和葉は森付近を。

和葉

「おっい？」

「ハア：ハア：。」

久米を搜索しているさなか、森の中にはタンクトップを着た、怪しい人影が息を潜めていた。

その怪しい人影は息を「ハアハア」と吐きながら見つからないように、森の中に入って行った。

謎の人影はさらに中へとはいって行き、何かを見つけそれを持ち出そうとした。

すると、後ろから別の人物がタンクトップを着た男をロープで締め上げようとした。

「ガッ！！」

「ブチッ！」

しかし、タンクトップを着た男は口に小刀をくわてえおり、ロープは切れた。

「な！？」

ロープの男は驚いている様子。

「何驚いてんねん：あんたが教えてくれたやんけ：あの世の使いに魂取られたくなかったら：口に小刀シーク加えとけて：そうやったよな？大東さん？」

タンクトップの男は久米と同じ格好をしていた平次で、ロープで締め上げようとした男は大東だった。

コナン

「おじさんが殺そうとしていた久米さんは、まだ家の中だよ：ぐっすり眠ってるけどね：。」
木の陰からコナンが出てくる。

平次

「ほんで久米さんのTシャツと短パン借りて：久米さんのふりしてあんたを罠にかけたんや：平良さんと船長を殺し、ほんで久米さんがここにくんのを待ち伏せしてたあんたをな！！！」

コナン

「今平次兄ちゃんが言った三人は、町長のお嬢様を誘拐し、屏風を盗んだうえに家政婦さんまで殺した強盗グループだったんでしょ？」

大東

「お、おいおい：何言ってるんだ：久米の兄ちゃんを捜してたら怪しい人物を見かけてよお、犯人だと思って捕まえようとしたただけだぜ：。それに俺には平良の姉ちゃんシークは殺せねえんじやなかったのか？あの死体のそばの砂の上の文字は潮が引いた直後に書かれたものだから、その時、島の反対側の船の中にいた俺たちにはその文字は絶対かけねえって：。」

平次

「確かにそうや：潮が引く前に砂に字イ書いたって、波に消されてしもて残すんは無理や：あれがホンマに引いてる最中の波やったらな…」

そう言った、平次の表情には余裕があるようにも見える。

大東

「ハハ：冗談はよしな：お前も見ただろ？あの死体の頭を1mぐらい上まで砂がぬれていたのを：満潮時に波があそこまで来ていたんならどう考えたってあれは引いてただろ？」

コナン

「そうそう、そうやってボク達サバ読んじやったんだよ…」
と、コナンが大東の背後から言った。

大東

「ん？」

大東は後ろを振り返る。

コナン

「ホントは、あんな所まで波なんてこないのに、砂がぬれてたせいで満潮のラインはあそこだって間違えちゃったんだ！」

平次

「そうや：俺らが平良さんの死体見つけた時、ホンマは満潮やったんや：それをあんたにサバ読まされて引いてる波やと思いこまされたっちゅうこっちゃ！あん時、満潮やったら話は簡単やろ！潮が満ちても波かぶらんギリギリんとこに字イ書いて、その横に死体置くだけや！満潮になって、オレらが死体見つけても潮は引くだけやから気づけへんしな…」

大東

「だったらこれからあの字を捜しに行こうじゃないか！もうあれから半日たってるからまた潮は満ちてる…波に消されねえ位置に書いてあったんならまだ字は砂の上に残ってるはずだろ？」

平次

「いや、もう残ってへんかった…どーせオレらがあの場所から離れたスキにあんたが消したんやろうけど…」

大東

「オイオイ…」

コナン

「でも、ボクの足跡は残ってたよ！」

大東

「え？」

また、後ろを振り返る大東。

コナン

「だってボクがサンダル脱いだの平次兄ちゃんがあの手を撮ってた時だけだもん…ボクあの手、字の横に立ってたからその時の足跡がまだ消えてないんなら、満潮になっても足跡は波に届いてないってことだよな？」

大東

「だがな、ボウズ…あの手、浜の砂はまんべんなくぬれてたぜ…バケツを使ったとしてもあんなにきれいにぬらすことは…」

「バケツじゃない…」

と、いきなり別の声が聞こえてきた。

大東

「え？」

コナン

「お前…いつの間に…。」

横から突如現れたのは、勇気だった。

勇気

「俺たちが乗ってきたクルーザーさ。クルーザーがたてる波を使って浜の砂を満潮の時より多めにぬらしたんだ。船長が、帰りの集合時間をクルーザーでグルグルまわって、例のものを探すのを見越してな。」

大東

「な、何だよ？その、例のものって…。」

平次

「そんなきまつてるやろ？オレが海の底で見つけた碇…あの碇の鎖に結わえつけて沈めてたはずの『姫』や…」

大東

「ひ、姫だと？」

平次

「この島の家の柱に字イが刻んであったやろ？『姫眠るるは甲なりて乙にあらず』って…これだけやとなんのこっちゃわからんけど、浦島太郎の昔話とこの島が『鬼亀島』やっちゅうことを合わしたら

筋は通んで：甲は亀の甲羅：乙は海の中の竜宮城にいてる乙姫おとひめ：つまりあの字イは『姫眠るるは海の中やのうてこの島ん中にある』ちゆう意味や！」

勇気

「そう。姫ってのは強盗グループがつけた隠語…。そして俺がさっきこの森に見つけに来た：海に沈めてたのに一年前の台風でここに打ち上げられてしまった：白鷺が書いてあるこの金の屏風の事だ！」
と言って、勇気は手に屏風を持ち、開いた。

コナン

「（あいつ：屏風を見つけないこの森に先回りしてたのか：。）」

平次

「盗んだ後、隠し場所に困ってしもた強盗グループが、密閉したこのケースに入れて、ボートに結わえつけてから碇で海に沈めてほとぼりが冷めんのを待ってたんやろ：潮の流れが強うて誰も潜らへんこの海やったら見つかりにくい思てなあ…。そしたら1年前にえらい台風が来てしもて心配になった強盗グループの一人が、この島の様子見に来てボートが島に打ち上げられてんを見つけたけど、乗ってきた船が立て続けに来た台風で流されて島に取り残されてしもたから仲間のために屏風の在処を示すあの字イを書いたんや。」

勇気

「それで、あの字の意味に気づいたあんたは、この島の謎を解く『東西名探偵推理対決』っていうこの番組に目をつけて強盗グループに復讐することを思いついたんだ：。強盗グループがまだ屏風見つけてなかったら、番組スタッフに潜りこんでる可能性が高いからね。」

大東

「だ、だが、どうやってその仲間を見分けたって…」

大東の表情も徐々に強張ってきている。

コナン

「浦島太郎だよ…。ホラ、おじさんこの島に来た時言ってたじゃない！浦島太郎になったみたいだって！そのヒント聞いてすぐにあの文字の意味がわかるのは、海に屏風を沈めた強盗グループだけだもんね！」

平次

「そのヒントで森ん中に探しに来た平良さんの首絞めて殺したんやろ？さっきオレにやってみたいに…。ほんで、死体を帰りの待ち合わせ時間までに森ん中に隠して、クルーザーが残橋に着いたんを確かめてから死体をあの浜に寝かせてグソーの使いやっちゅうあの字イを砂に書いたんや…。後は、満潮になるのを待ってみんなで平良さんを捜しに行こゆうてあの浜で死体を見つけたらアリバイは成立するちゅうこっちゃ！」

大東

「フン！面白い推理だが、その犯行なら俺じゃなくてもできるんじゃない…」

平次

「いや、やったんはあんたや…。殺し方がそれを証明してんで…。惨殺された船長と違って、平良さんは遺体として扱われとった…。あら犯人がしってた証拠や…。平良さんの正体が、五年前に誘拐された町長の娘の都お嬢様やっちゅう事をな！！つまりあの誘拐は狂言で、お嬢様自身も強盗グループの仲間の一人やったちゅうこっちゃ！オ

レがその事に気づいたんは、強盗グループがああ屏風の事を『姫』
てゆうてたわけと：お嬢様が小さい頃、あの家の中に書き残した、
『ちよにい』と『かあちゃん』の字イの意味がわかった時や：これ
がみんな“日本の城”にひっかけて同じ人物がつけたあだ名やてな
：。

屏風の『姫』は白鷺嬢と謳われた姫路城の『姫』！『かあちゃん』
の『かあ』は鳥、鳥城からすゆわれてる漆黒の城、松本城！強盗グループ
に殺された家政婦の松本嘉子さんのこっちゃ！ほんで『ちよにい』
は千代田城の別名を持ってる江戸城や！江戸城ゆうたら東に構える
大きな城：

そうやろ？町長の家で執事やってた：大東さん？」

平次の発言に、大東は驚きの顔を隠せないでいた。

平次

「まあ、お嬢様は最初あんたの事を江戸城の江を取って『どじょう
さん』てゆうてたみたいやけどな：」

大東

「：」

平次

「あんたが執事やてわかったんは、椅子に座らんとずっと立ってた
事と、部屋はあんのに台所にしかあんなの椅子がなかった事：ほん
で、灰皿探していきなり食器棚開けた時や：あんたは最初からあの
家の中に灰皿がないんをしってるんとかうかってな！あん時の煙
草の吸殻が入った湯飲み茶碗もあんたが用意してたんやろ？複数犯
に見せるために：。けど、一個だけわからへんねや：久米さんが死
んだはずのお嬢さんの絵にビビったんを見て強盗グループの一人や
て気イついたんはわかるけど、なんで船長が仲間やてわかったんや
：……船長がクルーザーで島の周りを周るんを予想してんとこのトリ

ツクは…」

大東

「フ…忘れるわけありませんよ…あの船長は四年前の強盗事件で私が雄一目撃した犯人…妻になるはずだった大切な人を殺した憎き相手なんですから…」

大東は、突然口調を変え語り出した。

勇気

「え？じゃあ…そしたら家政婦の松本さんて…」

大東

「婚約してたよ…彼女の仇を取るために旦那様に暇をもらい、容姿や口調を変えてまで強盗グループを追っていたんですが…、まさかお嬢様がその一人だったとは…」

コナン

「え？じゃあ、知らなかったの？」

大東

「ああ…肌や髪の色が違ってたから気づかなかったよ…首を絞める直前に『ごめんね、ちよ兄』と言われるまでは…。お嬢様の亡骸を前にしてようやくわかったような気がしたよ…あの誘拐事件は母親を亡くして、お嬢様が本当の父親ではない旦那様の愛情を試すためで、その時、身代金を突っぱねた旦那さ何反発して旦那様が大切にしていた屏風を盗んだんじゃないかとね…。」

平次

「ほんならやっぱりお嬢様は奥さんの連れ子やったんか…。」

大東

「ええ…今思うと今思うとこの事件に、お嬢様がかんできると旦那様は薄々感づいていたのかもしれませんが…暇をもらうとき…こうおしゃっていましたから…『こうなったのはおそらく私のせいだよ…だから恨むのはわたしにして…事件を追うのはやめにしないか…』…とね…。」

勇気

「…」

大東

「やはりこの事件は旦那様の言うとおり…開けてはいけない玉手箱だったのかもしれませんがね…」

コナン・平次

「……」

彼の気持ちを代弁するかのように金の屏風が哀しく彼を見守っていた…

長い時間密閉され急に空気に触れて参加したためにこぼれおちた絵の具が…まるで涙のように…

そして…

朝日が昇り：

——港——

小五郎

「なにい！？事件は解決しちゃっただ！？ホントかよ！？オイ！？？」

鬼の形相の小五郎。

平次

「ああ：あんたが酒飲んでええ気分で寝てるうちにな：」
後ろで、コナン、勇氣、蘭、和葉、灰原が呆れ顔で小五郎を見ている。

小五郎

「じゃあオレのTV出演は！？ギャラは！？」

平次

「知るかボケ：」

小五郎

「んじゃお前が何か起こせ！」

平次

「え？」

小五郎

「食い逃げでも何でもいい！派手な奴を一発！！」

コナン

「オイオイ…おっちゃん…。」

終始呆れ顔のコナンであった。

FILE 17 I・LOVE LETTER?

「キンコンカンコン…」と、学校ではお馴染みのチャイムの音が校内へと響き渡る。

ある日の放課後、ここは帝丹小学校1・B組。ほとんどの児童が帰宅の準備をしている。

事件は…突然起こる。

元太

「なあ？昨日のアレ見たか？えっと…なんていったけな？あの推理ドラマ…！」

と、元太が言う。

光彦

「ああ…確か、『名探偵FOX』ですよ？あ、そう言えば、今日は『FOX』の小説版の発売日でしたよ…！」

コナン

「（げ！？マジかよ！？あの小説、今日発売だったのか…！）」

大好きなミステリー小説の発売日を忘れていたコナンは。

歩美

「え？帰るの？コナン君…！」

急いで教室を出ようとしたコナンに気づいた歩美は、すぐ問いかけた。

コナン

「あ…ああ！今日は小五郎のおじさんは麻雀で、蘭姉ちゃんも空手でいないから、留守番しなきゃならねーんだ！じゃあな！」

元太

「お、おい！？コナン！？」

元太の声も届かず、コナンは急いで探偵事務所…いや“本屋”へと向かった。

光彦

「いっちゃいましたね…」

勇気

「ほっとけよ…俺たちだけで帰ろうぜ。」

と言って、勇気はランドセルを背負い、教室を出て行った。

灰原

「ほら？行くわよ？」

光彦

「あ…はい！！」

歩美

「待って〜！」

元太

「だ、団長を置いて行くなよ〜！」

勇気、灰原と探偵団の3人は玄関で、雑談し始めた。

元太

「う〜ん…依頼の手紙…来てねえーな…。」

光彦

「あの開人君かいとの事件以来、全く音沙汰なしですからねー。」
と言いながら、自分の靴箱を開ける元太と光彦。

歩美

「そうだねー…あれ？哀ちゃん、その手紙なくに？」
歩美は灰原の持っていた手紙に反応した。

光彦

「え？灰原さんの靴箱に…依頼の手紙ですか？」

元太

「本当かつ！？え？でも…何で灰原の靴箱なんだよ…。」

灰原

「手紙を入れた人が小嶋君の靴箱と間違えたのかしら…。」

歩美

「哀ちゃん！とにかく読んでみて！」
なぜか笑顔が光っている歩美。

灰原

「え…ええ…。」

勇気

「何の事件だあ…今度は。」
勇気は、欠伸をしながら、めんどくさそうに言った。

灰原

「『…灰原さん！…僕は…貴方の事が前から好きでした…お話があ

るので…明日の夕方3時に、米花公園まで来てください…。待っています…。1-C組 梅野弘樹』って…えっ!？」
さすがの灰原もいつものポーカーフェイスをかなり崩している。

光彦

「そ…それは…もしかして…」

元太

「灰原への…ラ…ラ…」

歩美

「ラブレタ〜ッ!？」

元太と光彦はかなり驚いているが、歩美はかなり喜んでいる様子だ。

灰原

「…何よこれ…」

勇気

「じゃあ、さっさと行こうぜ!米花公園によ!」
かなりの苛立ちを見せながらそう言った勇気。

灰原

「え?」

まだ戸惑いを隠せない灰原。

勇気

「こんなもん!さっさと済ませたほうがいいだろっ!」

光彦

「お、落ち着いて下さいよ勇気君!いつもの冷静さはどこにいった

んですか？それに今日じゃなくて明日ですよ？」

元太

「そうだぜ、腹でも減ってんのか？」

光彦

「いや…それは元太君だけですって…。」

元太の発言に呆れる光彦。

勇気

「あ…悪い…。でも…どうするんだ？その梅野ってやつの返事…行くのか？哀。」

元太・光彦

「（え！？！？）」

二人は全く同じ表情をした。

灰原

「…。」

灰原は黙り込んでしまった。

FILE 18 I・LOVE LETTER?

小雨が降る中、勇気と灰原、そして探偵団の3人はいつもの帰り道をいつも通りに歩いていた。

いつもと違うことといえば、コナンがこの場にいないことだ。しかし、今は5人にとっての問題は、コナンがいないことではなく、灰原の靴箱に入っていた、1年C組の梅野弘樹君からの“ラブレター”だ。

灰原は沈黙し、下を見ながら歩いている。勇気はその灰原の姿をジッと見ていた。

と、ここで元太と歩美が話始める。

歩美

「でも、びっくりしちゃったね!! まさか、哀ちゃんの靴箱の中にラブレターが入ってるなんて…」

元太

「ああ…。でもどうすんだよ? 明日は土曜日で学校も休みだぜ?」
そう、元太の言うとおり、今日は金曜日で、もちろん小学生に部活などはないので、明日の土曜日は休みになる。

歩美

「そうだよね。哀ちゃん、行くの? 明日…。」

歩美が話しかけてきたので、灰原はとっさに、視線を下から横へと変えた。

灰原

「え!?!?…え…ええ…。とりあえずは行ってみるわ…。」

光彦

「へ、返答はもう決めてるんですかっ!？」

光彦が顔を赤く染めながら、声を張らせた。

と、ここでさっきまでポツポツと降っていた小雨がやみ始めた。

勇気

「んなもん…断るにきまってんだろ…?」

勇気は傘を閉じ、探偵団3人を見ながらそういった。

元太

「な、なんでそんなことわかるんだよ?」

勇気

「この、クールで大人っぽい感じの“哀”が…、子供相手に付き合
うと思うのか?お前ら…。」

勇気は呆れ顔で言った。

光彦

「!…!…ちょ、ちょっといいですか…?勇気君…。」

元太

「さっきから思ってたんだけどよ…。」

元太と光彦が同時に勇気を見ながら言う。

勇気

「ん?」

後ろを振り返り、二人を見る。

光彦

「いつから灰原さんの事を…『哀』って呼び捨てで…しかも名前で！呼ぶようになったんですか？」

元太

「俺も光彦もコナンも、『灰原』って、名字で呼んでんのによ!!」
若干、キレ口調の二人。

灰原

「…それもそうね…私、名前で呼んでいいなんて許可した覚えはないんだけど？」

灰原も呆れ顔で勇気を見る。

勇気

「…まったく…何でもいいだろ？そんなもん…。何でお前たちと呼び方まで合わせーねーといけねーんだ？」

灰原

「…はいはい…。そこまで言うなら貴方の好きにしていいわ…。」
完全に呆れた様子の灰原。

元太

「え？じゃ、俺たちも…」

元太・光彦

「あゝい…」

灰原

「だ・か・ら、貴方達はダメ!!!」

そんな様子を歩美は一人、何とも言えない表情で見つめていた。

勇気

「…ハハ…。」

その後、勇気と灰原は3人と別れ、阿笠邸へ帰還した。

——阿笠邸——

現在、午後7時すぎ。

夕食後、勇気は灰原が言わないだろうと思ったのか、今日の経緯をすべて博士に話した。

博士

「ほお。哀君に男の子からラブレターか…。青春じゃのお!!」

勇気

「いや、博士…。青春ってな…。仮にも俺ら、小学1年生なんだけど?」

本日二度目の呆れ顔の勇気。

博士

「いいじゃないか。哀君。明日返答しにいくんじゃろ?」

灰原

「…行くわよ…。米花公園でしょ?…私、一人で行くから…。
あなた江藤君はついてこないで。」

勇気

「な、なんでだ!？」

若干、頬を赤く染めた勇気は珍しくあわてだした。

灰原

「…いいから! ついてきたら…抹殺するわよ!！」

灰原は鬼の形相になった。

勇気

「いっ!?! ハイ…。(怖…)」

『抹殺』という、誰でもビビるような言葉を残して、灰原は地下の研究室へと向かった。

FILE 19 I・LOVE LETTER?

日が昇り、翌日の昼15時。

探偵団バッジの調子が悪いことに気づいたコナンは、探偵事務所を出て、阿笠邸へと向かった。

——阿笠邸——

コナン

「悪いな、博士。」

博士

「な〜に。これくらいだったら数日で直るじゃろ!」

コナンは、トイレへ向かおうとした途中、あることに気づいたので博士に問いかけた。

コナン

「あれ? あいつらは?」

博士

「あいつら? ああ: 勇気君と哀君か。哀君は米花公園に行ったようじゃが:。勇気君はわからんのう:。」

コナン

「米花公園? 一人で? 灰原が:?? 元太たちと遊ぶ約束でもしてんのか?」

自らは、元太達に誘われてなかったので、コナンは不審に思った。

一方…こちらは米花公園。

そこには、一人の少年の姿があった。

その少年とは、もちろん灰原へのラブレターの差出人、『梅野弘樹』である。

梅野

「あ…は、灰原さん！」

梅野は、緊張した面持ちで、灰原の名前を叫んだ。

灰原

「こんにちは…。」

灰原は、いつもの様なポーカーフェイスではなく、優しい表情をしていた。

梅野

「…あの、灰原さん…、手紙…読んでくれましたか?？」

緊張がほけないまま、梅野は言葉を発した。

灰原

「読んだわ…。」

と、一言言って、灰原は沈黙してしまった。

梅野

「返答を聞かせてください!」

梅野の声は、公園中に響き渡る。

灰原

「……私……。」

コナン

「ハア?? 灰原にラブレターだっ!??」

コナンは、目を限界ギリギリにまで開き、仰天した。

博士

「う…うむ…。しかし、そこまでびっくりすることなからう…。哀君もあれでも女の子なんじゃから…。」

博士は、呆れ顔でコナンにそう言った。

コナン

「わ、わ…ってるけど…、でも、あの灰原にねえ、物好きもいるんだな…。」

コナンは腕組みをしながら、もう一人の行方不明者の事を口にする。

コナン

「…ん? 江藤はどこに行ったんだ…」

———米花公園———

灰原

「私は…、悪いけど貴方の想いには応えることはできないわ…。ごめんなさいね…。」
少し、寂しそうな表情で灰原は言う。

梅野

「え…どうしてっ!?!」
自分が思っていた返答と違ったのか、梅野は慌てだす。

灰原

「…：闇には…光は入っちゃいけないのよ…。」
と言に残し、灰原は公園を去った。
梅野は何のことか理解できないまま、公園に置き去りにされた。

米花公園から阿笠邸への帰り道を灰原は、ゆっくりゆっくりと歩いていた。
夕方ということもあり、夕日が地面を照らしている。

「断ったんだな…。」

一人の男の声が、灰原の後ろから聞こえたので、とっさに後ろを振り返った。

灰原

「江藤君…。」

男の正体は勇気だった。

勇気

「なんだよあの返答…闇に光は入っちゃいけないって…。もつと他にあったんじゃないのか？」

灰原

「…え？貴方…聞いてたって事は…近くにいたのっ!？」

予想していなかった出来事に、灰原は耳を疑った。

勇気

「わ…、わりいかよ…。」

勇気は拗ねた表情になる。

灰原

「ハア…。貴方…昨日私が言ったことを忘れたの？」

呆れ顔で灰原が言う。

勇気

「…気になったんだよ…。」

ボソッと、勇気が言う。

灰原

「…え？気になったって何が…？」

勇気は、「さあな！」と言い残し、阿笠邸へと走って行った。

灰原

「あ……ちよつと！……まあ……、いいわ……。」

前を走って行った勇気を後ろから見つめながら、灰原は心の中で、
（私の事も心配してくれる異性がいるのね……）と思いながら、勇気
の後を追って行った。

FILE 20 少年探偵団の危機! (前編)

あの灰原へのまさかのラブレター事件から早くも、2週間ちよつと経とうとしていた。アレから大きな事件は何も起きてはおらず、平穏な日々が続いている。そんな中、探偵団の3人が、コナンと灰原、そして、勇気にこんなことを提案してきた。

歩美

「ねえ? 今度の日曜日、みんなでトロピカルランドに行こう♪」
ランドセルを背負い、教室を出ようとしていた、コナンと勇気に歩美は話しかけた。

「「トロピカルランド?」」

コナンと勇気が同時に声を出した。

歩美

「うん♪ いいじゃない! たまには。ねえ? 行こう?」
歩美はパーフェクトスマイルでコナンと勇気に問いかける。

灰原

「そうね…、たまにはいいんじゃない?」

灰原が珍しく肯定した。

勇気

「どうする…? コナン…。」

コナン

「しよーがねえな〜…。」

コナンはため息を出しつつも、OKをだした。

歩美

「やったあ〜♪」

光彦

「でも、久しぶりですねえ〜トロピカルランド!」

元太

「よ〜〜し! いっぱい乗りまくって、いっぱい食うぞお〜〜!」

光彦

「トロピカルランドでも…食べるんですね…。元太君…。」

元太に聞こえないように、小声で光彦が言った。

コナン

「まったく…よりによって何でトロピカルランドなんだよ…。」

勇気の隣でコナンは呟いた。

勇気

「…ん? 何かあんのか?」

コナン

「ああ…あそこは…」

そう言いかけたコナンの脳裏にある光景が思い浮かぶ。それは思い出したくもない光景…。自分が今の体になった原因が、あそこにある。ジンとウォッカに出会った場所。工藤新一を失って、江戸川コナンが誕生した場所でもある。

勇気

「…あ、そうだったな…。悪い…。」

勇気はコナンが思っていることを理解したようで、謝った。

灰原

「ほら？帰るわよ？2人とも。」

コナン

「あ…ああ…。」

勇気

「…」

＊

そして、日曜日当日。

トロピカルランドに着いた6人は、まず何に乗るかを話し合っていた。

歩美

「歩美、メリーゴーランドに乗りたい〜！」

光彦

「いいですね〜！僕も賛成です！！」

元太

「ええ？オレはジェットコースターがいいぞ！」

光彦

「もう〜文句言わないで下さいよ元太君！ここは、女の子優先であるべきです！」

元太

「わ…わかったよ…。」

前ではしゃいでいる3人を目に、後ろにいるコナン、勇気、灰原は抜け殻が抜けたような顔をしていた。

勇気

「哀…、お前…来たいんじゃないかったのか？」

灰原

「…私も最初はそう思ってたわ…でもいざ来てみると、そんなにテンションは上がらないわね…。」

と、灰原はぼやく。

コナン

「全く、なんであそこまではしゃげるのかね〜…、子供ってのは…。」

」

勇気

「それは、ガキだからだろ？」

コナン

「そうなのかな。ま、それしかねえーか…。」

灰原

「ま、工藤君も江藤君も、体は大人でも、心はあの子たちと同じで子供なんだから、十分楽しめるんじゃない？」

灰原は、からかうようにいった。

コナン

「悪かったな…。」

勇気

「どういう意味だ…、それ…。」

2人を見て、灰原は「クスッ」と笑った。

元太

「なあ？ やっぱじゃんけんでどこ乗るか決めようぜえ！！」

光彦

「また元太君は！ 歩美ちゃんはメリーゴーランドって言ってたじゃないですか！」

ここで、元太と光彦は言い争いを始めた。

元太

「いいじゃんかあ！ 別に！」

歩美

「もう！ 2人とも喧嘩しないでよ！」

3人を見た勇氣は、空気を読み、
勇氣

「じゃあ、じゃんけんで決めりゃいいだろ？」

元太

「ほらっ！勇氣もこう言っただしよお！」

光彦

「しょうがないですねえ…」

元太、光彦、歩美はじゃんけんを行い、結果は元太が勝った。

元太

「じゃあ、まずはジェットコースターな！」

光彦

「ええ！？じゃ、じゃあ…僕は遠慮しようかと…。」

歩美

「光彦君…コースター、苦手なんだよね？」

と、歩美がきくと、光彦は小声で、「はい…。」と答えた。

元太

「ダメだ！団長の言うことは絶対だぞ！？それに、俺たち6人で少年探偵団なんだ！一人でも欠けたらだめなんだ！」

元太が胸を張って言う。

光彦

「ええ〜!？」

光彦がそう不満げに言うが逆らう事などできず、嫌々ながらも「はい・・・」と言ってしまふ。

コナン

「ハハ…。(いきなりジェットコースターか…疲れるぜ…)」
と、コナンが思っているなか、

「……」

勇気

「ん? どうした? 志保…。」

灰原

「別に…。」

いつもと様子が違う灰原を見た、勇気は心配したのか、問いかけた。

勇気

「…苦手なのか? コースター…。」

灰原

「馬鹿ね? そんなわけないでしょ? 名探偵モドキさんの推理も今回は外れよ。」

勇気

「モドキって…またかよ…。」

コナン

「おい？行くぞ？お前ら。」

勇気

「あ…あ…あ…」

勇気に続いて、灰原もどことなく重い足取りで先に行ったコナン達の元へ向かう。高まる鼓動を抑えながら…。

FILE 21 少年探偵団の危機! (中編)

運のいいことに、他の客はあまりいなかったのですんなりと中に入ることができた。そして、

前にコナンと歩美、その後ろに勇気と灰原、さらに後ろに元太と光彦の順で乗り込む。

「……」

灰原は、何かを察したように辺りをキョロキョロと見まわしていた。

勇気

「どうした? さっきから…。」

灰原

「別に…」

灰原は冷たくあしらった。

不思議そうに灰原を見る勇気だったが、発車直前だったので視線を前へと変える。

「ゴゴゴゴゴー!!!」という音でコースターは発車し、その他の客も悲鳴を上げ始めた。

歩美は隣にいるコナンの手をしっかりと握っている。

コナン

「おい?...大丈夫かよ? 歩美ちゃん」

歩美

「うぐっ…」

コースターは徐々にスピードを上げながら進んでいるので、コナン

の問いに答えている余裕など今の歩美はない。

そして、いよいよコースターは頂上まで上り終わり、そのまま急スピードで下降していく。

ここで灰原が目を閉じて、隣に座っている勇気の手を「ガシッ」と力強く握った。

勇気

「え!?!」

突然の出来事に驚きを隠しきれない勇気。今の灰原哀の表情は、普段のポーカーフェイスの灰原哀ではなく、お化けを見たときに思春期の女の子がするような顔になっていた。

勇気

「な…（可愛いな…）」と心でつぶやいた勇気。

元太

「楽しかったなあ〜!」

歩美

「うん!! ちょっと怖かったけど…」

光彦

「そ、そうですね…。」

元太と歩美はいつもと何変わらない表情だったが、光彦は青い顔を
してぐったりしていた。

「……………」

コナン

「あんだよ？ 灰原…どうしたんだ？」

光彦同様、青い顔をしている灰原にコナンは話しかける。

勇気

「…大丈夫か？」

勇気も心配している様子。

灰原

「…平気よ…。みくびらないでくれる？」

何事もなかったような灰原を見てコナンはほっと息をついたが、勇
気は未だ心配そうに灰原を見ていた。

元太

「じゃあ今度は…」

光彦

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ…元太君。休ませてください…。
」

元太

「ちえ…しょうがねえな…」

不満げに元太はそう呟く。光彦は近くのベンチを指差し、そこで休

もうと言っていた。元太は、光彦があまりにも青い顔をしていたので、仕方なくみんなにベンチで休むように団長らしく指示をする。5人が席に着いて、少し休んでから、元太達三人がジュースを買いに行った。

それから少し沈黙した後、三人がジュースを買って戻って来る。そして、さまざまな乗り物を乗り終わり、既に時間は夕方4時をまわっていた。

元太

「じゃあ、最後はあれだよな!!」

元太が指さしたのは、ゆっくりと回り、デートで言えば定番の“観覧車”だった。

光彦

「そうですね。アレに乗って帰りましょう!」

歩美

「うん!じゃあ早く行こう!」

三人はまだ元気があるのか観覧車に元気良く向かう。その後から少し疲れている灰原と、疲れてはいないがやる気が全くないコナンと勇気が続く。並ぶこともなく、6人は観覧車の元に向かう。向かう時に電話をしていた係員がチラッと見える。そして、係員が電話を切ってコナン達に指示をし、その指示に従って観覧車に乗りこむ。

歩美

「うわゝ…綺麗だね…」

光彦

「本当ですね」

光彦と歩美が外の景色を眺めながら、それぞれ感想を言う。

灰原

「…でも、いきなり観覧車が止まったら、私達、どうなるのかしらね」

何気なく呟いた灰原の一言で空気が静まり返る。

コナン

「（オイオイ…）」

元太

「こ、怖えこと言うなよな…」

と、元太が言った瞬間、『ガタン!』と観覧車が揺れる。

光彦

「え…？な…、なんですか？」

歩美

「もしかして…止まったの…？」

勇気

「どうやら…そうみたいだな…」

元太

「マ…、マジかよ…!」

特に根拠もなしにさりげなく言葉を発する。元太、歩美、光彦はさすがに不安な気持ちになるが、コナンと勇気、灰原の3人は特に気にした様子ではない感じだった。しかし、一向に動く気配はない。

コナン

「…動かねえーな…」

勇気

「そうだな…」

灰原

「…」

徐々にこの3人にも不安が高まってくる。

元太

「あれ？…あれ警察じゃねーか!？」

コナン

「な、何っ!？」

警察という言葉を目にして、コナンの表情が変わる。観覧車から下を見ると確かに警察のパトカーが何台もある。

灰原

「あれは…目暮警部…」

勇気

「それだけじゃない…高木刑事に佐藤刑事…白鳥刑事に…迷探偵（小五郎）…」

コナン

「（…蘭!）…）なんであいつまで…?」

遠くからなのでかすかにしか見えないが、そういう面々だということとはわかった。

そして、コナンはポケットから携帯電話を取り出し、目暮警部の携帯にかけた。

FILE 22 少年探偵団の危機! (後編)

観覧車前に集まる警察の面々、小五郎に蘭……。何故小五郎や蘭が居るのかというと、コナンが出かける前にトロピカルランドに行くというのを知らされていたからだ。しかし、何故警察が居るのかという……。うと…。

目暮

「目暮だ」

コナン

『警部さん! コナンです!』

目暮

「コナン君か!? 君たちは今、観覧車の中にいるのかねっ!？」

コナン

『う、うん! そうだよ! ねえ? どうして警部さん達がここに?』

目暮

「実はさっき、警視庁に予告電話がかかってきたんだ。トロピカルランドの“観覧車”を爆発させるといふ爆弾犯らしき男からね…」

コナン

「えっ!? 爆弾!？」

「「「ば、爆弾!?!?!」」」

コナンの言葉を聞いて、傍にいた勇気と灰原以外の3人が罵声をあげる。

元太

「ば…爆弾って…やばいじゃねーか!」

光彦

「もしかして爆弾が仕掛けられてるんですか？」

歩美

「ええ!??」

光彦と歩美が驚きながら、辺りを見回す。

灰原

「…ねえ?もしかしてこれじゃない?」

灰原が何気なく座席の下にあるものを取り出し、みんなに見せる。

勇気

「…『カチカチ』聞こえるな…。針が動いてる音だぜ。」

目暮

『爆弾のデザインは…』

目暮から電話で聞きながら、コナンはさっき灰原が取り出したものを見る。

コナン

「…間違いない…それが犯人が仕掛けた爆弾だ…。」

先程灰原が出したものを指差しながらそう言うコナンに、探偵団の三人は怯えた表情をする。

コナン

「警部さん…それでどうするの?」

目暮

『爆弾にはタイマーが仕掛けられてるらしい…その爆弾が入ったものを取り外せるかね?』

コナン

「やってみるよ…」

コナンが爆弾が入っているらしい青のデザインの袋を外すとカチカチと音が鳴っている爆弾を発見する。

コナン

「…これか!」

爆弾を見てコナンの表情が変わる。そして、爆弾のタイマーを発見する。

コナン

「あと…25分32秒…」

元太

「…え?何があと25分なんだよ!」

聞かなくてもだいたいわかっていたが、やはりこういう時は聞きたくなるらしい…。コナンは皆を見て、ふうと息を一つついてから切り出す。

コナン

「決まってるだろ…?爆弾が爆発するまでの時間だよ…」

光彦

「そ…そんな…」

灰原

「でも…どうして観覧車を止めたのかしら？これ…もしかして遠隔操作でも爆発するんじゃない？」

「「「えっ！？？」」」

灰原の言葉に三人は固まってしまう。コナンはというとさっきからずっと考え込んでいる様子だ。

光彦

「ど、どうするんですか…それと…なんで遠隔操作で爆発すると？」

勇気

「…まだ30分近くあるってことは、前もって仕掛けた可能性が高いってことだろ？で、今になって警察に予告電話がかかってきた…。そして、観覧車を止めた…。つまり…爆弾犯は警察に観覧車を止めないで爆弾を爆発させるとか言ったからじゃないのか？」

勇気の推理にコナンはすぐさま目暮にそうなのか尋ねる。すると…

目暮

『その通りだ…』

勇気

「…ホラな…」

タイマーはこくこくと過ぎている。灰原はさっきから窓ばかりを見てコナンと勇気は、どうするべきか考えている様子。光彦、元太は下を向いてうつむき加減。歩美は、溢れ出る涙を抑えられずに、その場で泣き崩れている。

勇気

「大丈夫だよ…歩美。助かるって」
歩美を見ながら言った勇気。

歩美

「ヒック！…だって…」

目暮

『コナン君！今、救助ヘリを送った！これで脱出を…』
最後の手段をとるしかなかった。しかし、そうなるとトロピカル
ンドの観覧車は…。それに救助ヘリが来た時点で爆弾犯は爆弾を爆
発させるのかもしれない予感もあった。コナンはなんとか爆弾犯の
正体をつかもうとしていた。目暮の話しでは観覧車に乗っているの
はコナン達しかいないらしい…。コナンはいろいろ思い返していた。

コナン

「（…ん？待てよ…確か…！）」

勇気

「…：…：…：そうか！！」

勇気もコナンと同時にひらめく。

灰原

「どうしたの？」

窓を見ていた灰原は、勇気の方を振り返った。

勇気

「分かったんだよ…俺もコナンも…爆弾犯の犯人がな！」

灰原

「え？」

普段のポーカーフェイスを崩し、驚いた表情になった灰原。

コナン

「ねえ？警部さん！何で観覧車に乗っているのが僕達しかいないってわかったの？」

目暮

『それは係員に聞いたからだよ。それがどうかしたのかね？』

コナン

「僕達…その係員さんの指示で乗ったんだよ…。ねえ？爆弾の予告電話がかかってきたのって何時頃？」

目暮

『確か…4時少し過ぎだと…』

コナン

「4時少し過ぎ？僕達が乗りこんだのは確か…4時少し過ぎ…。偶然にしては出来過ぎてない？」

コナンの言葉に目暮が考え込む。そして、コナンは目暮に確信とも言える言葉を発する。

コナン

「警部さん…その係員が怪しいと思うよ…だから……」

コナンの作戦に目暮は同意した。そして、高木刑事に係員を呼んでくるように言う。

係員

「はい？なんですか？」

目暮

「かなり状況は深刻です…。もう子供達を脱出させるしかありません…」

係員

「そうですか…でも、犯人にバレませんか…？」

目暮

「その心配はありませんよ…：…今だ！！！」

目暮の指示で高木刑事と佐藤刑事が係員を取り押さえる。

係員

「な、なにをするんですか?! こんなこととして…あっ!？」

目暮

「これを調べさせてもらいますよ…」

そう言って高木が係員から携帯を奪った。調べるのは携帯のリダイヤル履歴…そして…

高木

「これはどういうことです？今日の16時3分に警視庁に電話してるそうですが？」

高木は携帯のリダイヤル記録を係員に見せる。

佐藤

「今日、16時からかかってきた電話は爆弾犯のからしかないわ！爆弾を仕掛けたのはあなたですね？」

佐藤は係員にそう尋ねると、係員は何もかも自供した。何故観覧車を爆破させようとしたのかは、あの観覧車にどうやら車の事故で死んだ死体を隠し、それを観覧車ごと爆弾で吹き飛ばそうと思ったかららしい。爆弾は昔、大学でそういう専門知識があったことから作ったらしい。本当かどうかは定かではないが…。

目暮

「じゃあ、爆弾のタイマーを止めてくれるかね？これ以上は意味がない…」

目暮にそう言われた係員は、素直にタイマーを止めた。

こうして爆弾事件もようやく落ち着き、コナン達6人も無事助かった。

それから、コナン達は事情聴取を明日に延ばし、元太、光彦、歩美の3人は警察の車でそれぞれ家に戻された。小五郎と蘭はコナンが博士の家に泊まると知ったため、コナンは勇気、灰原と共に、迎えに来た博士の車に乗りこんだ。

運転席に博士、助手席にコナン。後ろの席に勇気と灰原が座っている。

博士

「いや、大変じゃったのう…」

博士がハンドルを回しながら言う。

コナン

「あゝ…つたく…疲れたぜ…」

勇気

「同感だ…。でもまあ、いいもの見れたしな…」

コナン

「ん？なんだよそれ？」

勇気

「…秘密だ。」

コナン

「はあ？」

二人はさらに会話を続けていた…。

灰原は、すでに夢の中だったようだが…。

FILE 23 殺意のコーヒ―

――毛利探偵事務所――

コナン

「悪いな、わざわざ…」

勇気

「いや、気にすんな。博士に言われたただだから。」

勇気は、この前、コナンが博士に修理を頼んでいた探偵バッジをコナンに返すため、毛利探偵事務所に来ていた。

小五郎

「用が済んだらさっさと帰れよ！」

小五郎が勇気を見ながら言った。

蘭

「もう！せっかく来たのに！そんなこと言わないでよ！ねえ？勇気君。」

勇気

「あ…はあ…」

苦笑いの勇気。

「ピンポン…」

ここで玄関のインターホンが鳴る。

小五郎

「ん？誰だ？」

小五郎

「ホー…『毛利小五郎・密着24時』？そんな特番を東都TVで？」

「はい、月曜夜9時のゴールデンタイムに…警察に密着したそういう類の番組はよくあるんですが…探偵さんは顔バレしたり調査方法を知られたりすると仕事に支障が出るとかでよく断られるんです…」と、真表情で言ったのは、番組製作会社社長の染井彰吾だ。

染井

「でも毛利探偵は超有名ですし、視聴者の食いつきもいいと思います…依頼を…」

先程とはうってかわって笑顔になった染井。

小五郎

「しかし24時間ずーっと張りつかれるってーのは…」

呆れ顔で小五郎が言う。

染井

「あ、もちろんカメラが嫌な時は言って頂ければ外しますよ！オンエア前にチェックして頂いて、NGな所はカットもしますし…」

小五郎

「でもねえ…」

勇気

「最近、依頼なかったんじゃないのか？」

勇気はコナンと蘭を見ながら言った。

コナン

「ああ…」

蘭

「うん…昼間っからビール飲んで競馬中継聞いて夜は麻雀だし密着されても困るかも…」

今度は蘭が呆れ顔で言う。

染井

「し、仕事ないんですか？」

小五郎

「あ、いや…今はたまたま…」

小五郎はコナン達3人をにらみつけ、心の中で「コラッ！」と言った。

小五郎

「何ならそっちで用意してくれませんか？未解決の殺人事件とかでっち上げて！」

染井

「でっち上げてって…ヤラセはちよつと…」

「あ、でも一応スタッフに聞いてみましようか？殺人事件じゃなくても興味を引くこととか困りごととか何かあるかも…」

染井の隣に座っていた一人の女性が染井を見ながらそう言った。
その女性は番組制作会社社員の久住舞子だ。

染井

「ダメダメ！たといそれがヤラセじゃなくても、スタッフからの依頼だとわかったらヤラセだと疑われちゃうだろう？毛利探偵の名前にも傷がつくだろうし：それにオンエアまでも時間を考えるとそんな段取りしてる余裕もないし：」

自分の腕時計を見ながらそう言った染井。

久住

「ですよね…」

久住も自らの腕時計を同時に見る。

蘭

「あのー…」

ここで蘭が横から割って入る。

染井

「はい？」

蘭

「もしかしてお二人付き合ってたっしやるんですか？」

若干頬を赤く染め、蘭は染井と久住に聞いた。

「「え？」」

染井と久住も同時に頬を赤く染める。

蘭

「ペアウォッチされてますよね？」

染井

「あ…いや／＼…」

小五郎は腕時計を見ながら「ホー…」と呟いた。

染井

「これは私の誕生日に彼女がプレゼントしてくれた物で…／＼」

久住

「デ、デザインがよかったのでつい自分も…／＼」
「いまだに頬を赤く染めている二人。」

勇気

「（ペアウォッチか…）」

勇気は何を思ったのか、心の中でそう呟いた。

染井

「まあ、彼女には会社設立当初からずっと私の面倒を見てもらってますから…女房みたいな感じですけどね…」

久住

「／＼／…」

染井

「しかし弱ったな…毛利さんならきつとOKしてくれると思って、中目さんと会う段取りくんじゃったよ…」

ようやく染井の頬の色も戻ったが、今度は困り果てた顔をした。

小五郎

「中目さん？」

染井

「東都TVのプロデューサーです！番組の打ち合わせも兼ねて、一度毛利さんをスタッフと一緒に中目さんの自宅に招いてくれと言われてたので…」

小五郎

「んな、人の都合もきかずに勝手に決めるから…」

染井

「はあ…番組のナレーションの名前を見たら二つで返事を受けてくれると…」

小五郎

「ナレーションって？」

染井

「あれ？さっきお渡ししたその企画書に書いてありませんでした？」
「そう言われた小五郎は企画書をめくりだした。すると…」

小五郎

「ヨ…ヨ…コちゃん!!?」

小五郎は目の色を変え、ニヤケ顔になった。

小五郎

「お引き受けいたしましたよう!!」

染井

「は、はい！」

突然の小五郎の変貌ぶりに、少し焦る染井。

勇気

「（オイオイ…）」

コナン

「（簡単だな…このオヤジ…）」

コナンと勇気は呆れ顔で小五郎を見ていた。

小五郎

「その打ち合わせにヨーコちゃんも来るんだろ!？」

染井

「ええ!もちろん!」

＊

「オオ!毛利探偵は引き受けてくれたか!やはり沖野ヨーコという餌が効いたみたいだな…」

自宅のソファに座り、電話で染井と話すこの男こそ、東都TVプロデューサーの中目頼策だ。

染井

『ええ!ファンだとは聞いていたんですが、まさかあそこまでとは…』

中目

「まあ、くれぐれも悟られんようにな…視聴率の低迷で打ち切りになったドラマ穴埋めの特番だということは…」

中目は鬼のような顔で話している。

染井

「大丈夫ですよ！毛利さんノリノリでしたし！」

染井は助手席で、携帯を耳に当てながら話している。
運転しているのは久住だ。

中目

『…で…例の件もよろしく頼んだぞ！』

染井

「例の件？」

中目

『キックバックだよ！製作費を水増し請求して浮いた金をこっちに回すヤツ…儲かるぞ！』

染井

「あ、いやそれは以前お断りしたかと…」

中目

『あ、そう…君のトコと久しぶりに仕事ができると思ったんだが…残念だよ…』

染井

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

中目

『まあ、彼女をこっちに回してくれるのなら無理にとは言わんのだがな…』

中目は愛用のノートパソコンを開き、画面に映っている女性を見ながら話していた。

染井

「彼女？」

中目

『君のとこの舞子さんだよ！まだわかっていなかったのか？一度干した弱小制作会社に仕事を回したのは…彼女がわしのお気に入りだからだよ！』

そばにいて置きたいのだ…彼女のような仕事ができる女を秘書として…おまけに美人でスタイルもいいしな？』

染井

「いや…それもちょっと…」

中目

『まあ、詳しい話は後日、毛利探偵と家^{ウチ}に来た時にしようじゃないか！』

染井

「は、はあ…」

染井は電話を切り、息をフウッとはいた。

そんな染井を久住はなにも言わず眺めていた。

―打ち合わせの日―。

外は小雨がばらついている。

マンションの下で小五郎、蘭とコナンそして勇気は染井たちが来るのを待っていた。

コナン

「(――ったく…おせえな…もう30分以上は過ぎてるぜ…)」
不満そうにコナンは呟く。

小五郎は「ヨーコちゃんヨーコちゃん!」と言いながら手鏡を見ながら髪をセットしている。

コナン

「(まあ…おかまいなしなのが1名いるが…)」
呆れ顔で小五郎を見るコナン。

コナン

「…なんでオメーもついてきたんだ?」

コナンが小声で語りかけたのは勇気だった。

勇気

「いや、どういふもんなのか興味あってさ。そのプロデューサーっていう人にも会ってみてえしな…」

と、ここで車のクラクションの音が鳴る。

小五郎

「お！」

車の窓から顔を出したのは染井だった。

染井

「お待たせしてすみません！毛利さん！」

小五郎

「いえいえー！」

染井

「じゃあちよつと…車を駐車場に入れてきますので」

染井の車は「ブロロロ…」と音を鳴らしながら駐車場へと向かって行った。

小五郎

「あれ？ヨーコちゃんは？」

蘭

「もうプロデューサーの部屋に上がってるんじゃない？」

勇気

「…」

コナン

「…（あの人のコート…ずいぶん濡れてたな…）」

さすがはコナン。最初から着眼点が迷探偵とは違う。勇気の沈黙はコナンと一緒に考えなのかは謎だが…。

4人と染井はマンションに入り、プロデューサーの部屋へと向かった。

小五郎

「ええ！？ヨーちゃんが来られなくなったあ！？なんで！？」
楽しみがなくなったため声を無駄に張る小五郎。

染井

「ええ…急に都合が悪くなったそうで…だから本格的な打ち合わせはまた後日って事になり…だから今日はスタッフも来てないんです…」

蘭

「大丈夫ですか？」

蘭は染井を心配そうに見ながら言った。

染井

「え？」

蘭

「前にお会いした時より…やつれてらっしゃるような…」

染井

「ええ…色々と苦勞が絶えなくて…」
と、言いながら染井は玄関のインターホンを鳴らした。…だが反応

がない。

小五郎

「返事がねえな…」

蘭

「遅れたからどこかに出かけちゃったとか？」

染井

「そ、そんなはずは…」

何度もインターホンを押すが返事がない。

小五郎

「仕方ねえ！出直すか！ヨーコちゃんもいねえし！」

小五郎は引き返そうとしたが…

染井

「ちょ、ちょっと待ってください！もしかしたら何かあったのかも…」

小五郎

「…何かって？」

染井

「じ、実は最近、中目プロデューサーの様子が変だったんですよ！ホラ、少し前にニュースになったでしょ？東都TVのヤラセ番組！」

小五郎

「ああ…行った先の文化財にTV局のスタッフが自分で落書きして『心ない人間のイタズラだ』って騒いでたヤツか！」

染井

「ええ…そのヤラセに中目さんは噛んでいなかったんですけど、番組を立ち上げたのが中目さんだから責任感じちゃって…」

小五郎

「ホー…」

染井

「…それで最近お酒をよく飲むと漏らしていたんです…『死にたいっ』って…」

小五郎

「おいおい…」

事情を聞いた小五郎は引き下がれなくなった。

勇気

「…」

染井

「だからひょっとすると待ってる間にそんな気持ちになってしまっ
て…」

小五郎

「じゃあ、マンションの管理人に事情を話して鍵を借りてこい!!
今すぐに!!」

染井

「は、はい!」

染井は、小五郎の指示通り走って管理人の所へと向かった。

コナン

「…」

染井の後ろ姿をコナンはじっと見つめていた。

「ガチャ…」

玄関のカギが開く。

染井

「どうもすみません…」

染井は申し訳なさそうに管理人に謝った。

「ガン！」

小五郎

「な…チェーンロック？」

染井

「中に入るようですね…中目さーん！どうかしましたー！？」

小五郎

「仕方ない！チェーンカッターで！」

管理人

「は、はい！」

「バチッ！！」

小五郎はカッターでロックを切った。

染井

「中目さーん？入りますよー？」

小五郎

「えっと…スリッパは？」

染井

「あ、ここ土足でOKです！中目さん、外国暮らしが長かったらしくて…」

コナンと勇氣、そして蘭もあとに続き部屋に入る。

染井

「じゃあ私はこっちのリビングを見ますので、毛利さんはそっちの書斎の方を！」

小五郎

「オウ！」

小五郎と染井はそれぞれ別れ、「中目さーん」と叫び始めた。

蘭

「どうする？二人とも…わたし達も中に入ってみる？」

コナン

「いや、蘭姉ちゃんはそのまま見張って…「中目さん！！！！？」」
コナンの言葉を遮るように、染井の大声が響き渡った。

コナン達はこの声を聞いて驚く。

コナン

「見張っててよ！」

と蘭に言ってコナンはリビングへ向かう。

蘭

「あ、ちょっと…勇気君も！」

染井

「中目さん！？中目さん！？」

コナンと勇気がリビングに入ると、そこには口から血を流し目を開けたまま倒れている中目プロデューサーの姿があった。

小五郎

「おい！？どうした！？」

遅れて小五郎もやってくる。

染井

「リ、リビングに入ったら中目さんが倒れていて、動かないんです！」

小五郎

「何だとお！？」

小五郎は中目の方を向かって歩き出す。

そして中目の顔に手をやった。

小五郎

「口の中からアーモンド臭…青酸カリか！！…コーヒーに混ぜて飲んでってわけだな…」

小五郎の横のテーブルにはカップが横倒しになっていて、そこからコーヒーが流れ落ちている。

染井

「わ、私のせいだ…私が遅れたばかりに中目さんは…」

小五郎

「んな泣き言ほざいてる暇があったら、警察と救急車を呼べ!!」

染井

「は、はい!」

染井は携帯を取り出し、警察に電話をかける。

コナンはテーブルに近づき、布巾を手に持ちカップが乗っていた皿を少し上げる。

「コト…」

コナン

「(やっぱり…)」

勇気

「…これは自殺じゃなくて…それを装った殺人…違うか?」

勇気はコナンに小声でそう言った。

コナン

「ああその通りだ…そしてそれを仕組んだのは…恐らく…」

コナンの瞳には染井が映っていた。

FILE 24 不可能犯罪

外は大雨が降っており、マンションの前には1台のパトカーが止まっている。

目暮

「ホォー…探偵に24時間密着取材した特番を…その打ち合わせをやるためにTVプロデューサーの部屋にやってきたが…呼び鈴を鳴らしても返事がなく、部屋へ入って見たらそのプロデューサー中目頼策さんが毒入りのコーヒーを飲んで死んだというわけか…」
警視庁の目暮警部は、中目の死体を見ながらそう言った。

染井

「え、ええ…返事がなかったのでマンションの管理人さんに鍵を開けてもらい、毛利さんにチェーンロックを切ってもらって部屋の中に入ったらこんな事に…」

目暮

「んで？その特番の依頼を受け、番組製作会社の社長と打ち合わせにやってきて、事件に遭遇してしまった探偵というのが…たまたま偶然運悪く…君だったというわけかね？毛利君…」

目暮は小五郎にジト目を向けた。

小五郎

「はい！警部殿！」

小五郎は引き笑顔で言う。

目暮

「大体おかしいと思わんかね？連続モノのミステリーじゃあるまいし、何で毎度毎度都合よく……いや……やめておこう……アホらしくなってきた……」

小五郎

「そ、そうっスね……」

目暮の圧力に押されそうになった小五郎。
話題は事件へと戻る。

小五郎

「で？死因はやっぱり青酸性の毒物でしたか？」

目暮

「ああ……死亡推定時刻は夜6時前後、君らがここに来る1時間ぐらい前に飲んだようだ……しかし、よく部屋に入ろうと思ったな？チェーンロックを切ってまで……」

小五郎

「この染井社長に聞いたんスよ！中目さんが最近度々自殺をほのめかしていたと……だから緊急事態だと思い強引に……」
小五郎は染井に指をさしながら言った。

目暮

「なるほど……じゃあ、自殺の線もあるというわけだな？」

小五郎

「ええ……まあ……」

染井

「ちょ、ちよつと待ってください!」

小五郎と目暮が真剣に話し合う中、染井は慌てたように声を張らせて言う。

染井

「自殺の線もって…これって自殺なんじゃないんですか? 玄関の扉には鍵もチェーンロックもかかっていたんですから…」

高木

「いや、密室の中で首をつったり手首を切ったりしていたのなら自殺でしょうけど…毒の場合はそうとは限りませんよ!」

染井の後ろにいた高木刑事がそう言った。

染井

「そ、そうなんですか?」

と言いながら染井は高木の方を振り返る。

勇気

「犯人が中目さんの部屋にケーキを持って訪れコーヒーに毒を仕込んで出した後、急用を理由に席を立ち、出ていく際に最近物騒だからといってチェーンロックをかけさせればこの状況を簡単に作り出せる…犯人が出て行ったあと中目さんが席について毒入りのコーヒーを飲むだけだから…」

ここで、またしても勇気が出しゃばってしまう。

目暮

「そ、そうだな…」

目暮は呆気にとられ、高木は茫然としている。

小五郎

「このガキ…」

コナン

「オイ！少しは遠慮しろよ！」

とコナンは勇気に小声でささやいた。

勇気

「あ…すまねえ…つい…。(やべ…また志保に怒られるな…)」
と勇気は心の中でつぶやいた。

目暮

「ち、ちなみに犯行時刻の6時半頃、貴方はどこで何を？」

目暮は視線を勇気から、染井の方へ変えた。

染井

「わ、私ですか？最近体調が悪くて会社を休んで自宅で寝てました…そしたら丁度その6時半ぐらいに毛利さんから確認の電話を頂いて今夜中目さんと19時に会う約束だったのを思い出し、ここへ来たんです…1日寝てたら体調も良くなりましたので…」

染井は、若干上目遣いでそう話した。

小五郎

「……って、打ち合わせの約束忘れてたのか？」

染井

「え、ええ…すみません…」

目暮

「その電話…自宅備え付けの電話かね？」

染井

「いや…この携帯で受けました…」

と言って、染井は手に持った携帯を目暮に見せる。

染井

「ま、まさか私を疑ってるんですか？」

目暮

「まあ、念のためですよ…」

目暮と染井の会話の間にコナンの「あれれ…？」という言葉が入る。

その声に目暮が「ん？」と反応する。

コナン

「変だよ？このコーヒークップの受け皿の下…」

小五郎

「あん？」

と言って、皿の下をのぞく小五郎。

コナン

「普通、受け皿に載ったままこぼれたら、お皿の底の丸い跡がつくはずなのに…この机のは丸い跡がついてなくて…代わりにヘンテコな細い筋が2つ入ってるよ！お皿の裏もコーヒーがついてないしね！」

目暮

「た、確かに…」

高木

「その2つの細い筋：コーヒカップとその取っ手の跡ではないでしようか？コーヒーが入ったコーヒーカップを倒したままにしておく、机に密着しているコーヒーカップと取っ手のところだけ濡れませんから…」

小五郎

「…だとしたら中目さんが毒を飲んで倒れた後、誰かがわざわざコーヒーカップを受け皿に乗せて机の上に置きなおしたということか！コーヒーが渴いた後で…」

目暮

「しかし…一体だれが何のためにそんな事を…？」
目暮は中腰になりコナンの方を見る。

コナン

「何のためかはわからないけど…誰がっていうのは分かるよね？」

目暮

「え？」

コナン

「コーヒーが渴いた後でそんな事が出来るのはこの部屋に最初に入って中目さんの死体を見つけた…」

染井社長しかいないんじゃない？」

コナンは得意げの顔で、染井を見上げた。コナンの発言に、染井は表情を一変させた。

蘭

「ちょっとコナン君！」

蘭はコナンの失礼な発言に少し怒り、コナンを持ち上げた。

勇気

「（お前も…遠慮しろよな………ん？こいつは…）」

と、勇気はコナンに視線をぶつけながら言った。そのあとすぐに、視線をテーブルのそばにある椅子に変えた。

小五郎

「だが確かに…あんたしかいねえだろうなあ…机にこぼれたコーヒーが渴くのはだいたい1時間程度…我々がこの部屋に入った頃だからな…」

さらに顔を近づけ、小五郎は言う。

小五郎

「あんたは消しそびれた何かの証拠をこの密室に真っ先に入れて隠したんだよ！コーヒーカップの受け皿で！違うか！？」

染井

「だから何の証拠なんですか…？コーヒーカップの受け皿の下はコーヒーのこぼれ跡があっただけでしょ！？そんな物、なんでわざわざ隠さなきゃならないんですか！？」

染井は必死に言い逃れしようとする。

コナン

「（コーヒーがこぼれた後…）」

椅子を見て、蘭に抱えられているコナンは何か気づき表情を変える。

コナン

「（…ち、違う！こいつはただの殺人じゃねえ…不可能犯罪だ！）」

FILE 25 悲しい真実

コナン

「(こいつは……不可能犯罪だ!)」

蘭

「どうしたの? コナン君…怖い顔して…」

そう言っ、蘭は抱えていたコナンをちよつと上にあげ、自分と同じ目線に合わせる。

コナン

「あ、あのコーヒーが何かおかしくなーい?」

コナンは椅子に指をさしながら言った。

小五郎

「ん? …おかしいって…机にこぼれたコーヒーが、椅子の足を伝って床のカーペットに垂れてるだけだろうが!」

コナン

「それは椅子の左の前足! 右前足の少し前のところをみてみてよ!」
ようやく蘭から離れたコナンは、再び椅子に指をさす。

小五郎

「んー?」

小五郎は中腰になって、じつとりと椅子を見る。

コナン

「コーヒーのシミが丸く抜けてるでしょ? これって、コーヒーがこぼれた時に椅子の右側の前足がそこにあったって事だよね?」

素晴らしいながらコナンは小五郎を見上げる。

小五郎

「あ…ああ…」

コナン

「何で動いたの？椅子…」

小五郎

「だからそれもこの人が真っ先にこの部屋に入った時に何かの目的で動かしたんだよ！」

小五郎は染井を指でさしながら、コナンにそう言った。染井は哑然とした顔をしている。

コナン

「でもさー、コーヒーが渴いた後に動かしたんならシミの場所が変じゃなーい？」

小五郎

「だーからー…最初はこう置いてあった椅子をだな…」

素晴らしいながら、小五郎は椅子を少し後ろに下げる。

勇気

「…まったく…よく見てみなよ。迷探偵！」

勇気はポケットに手をつ突っ込みながら、コナンと小五郎の間に割って入る。

小五郎

「あん？」

小五郎は視線をコナンから勇気の方へと変える。

勇気

「右の前足にシミの跡を合わせると…左の方のシミがずれるだろ？だから最初にコーヒーがこぼれた時はこう置いてあった椅子が…左の前足をコーヒーが伝って床に垂れる前にこう動いたってことだ。」

高木

「た、確かにそうだけど…何で椅子が勝手に…」

目暮

「誰かが座ってたわけじゃあるまいし…」

と、ここで目暮と高木は共に顔を見合わせ、表情を一変させる。

コナン

「そう…これはコーヒーがこぼれた時に…誰かが座っていたという明らかな証拠……だよな？おじさん！」

コナンは笑顔で小五郎を見上げる。そしてコナンの問いに小五郎は

「ああ…」と答えた。

目暮

「ちょ、ちょっと待ってくれ！だしたら玄関や扉にチェーンロックがかかっていて、部屋に死体しかなかったということはまさか…」

高木

「不可能犯罪…密室殺人てことになりますね！」

小五郎

「いや、我々が部屋に入った時にはまだ犯人が中に潜んでいてどさくさに紛れて逃げたって事も…」
と、小五郎は言いかけたが、

蘭

「それはないと思うよ！」　蘭は否定する。

蘭

「私、コナン君に言われてずっと玄関の所で見張ってたけど…警察の人が来るまで部屋から誰も出てこなかったもの！」

目暮

「ということはまだこの部屋のどこかに潜んでいる可能性もある！隅から隅までチェックしろ！」

目暮警部は高木刑事を含めた3人の刑事に指示した。

目暮

「あ、高木君はちよつと…」

が、ここで目暮が高木を呼びとめ、耳元でつぶやくようにこう言った。

目暮

「この密室殺人を仕組んだのがあの染井社長で、密室にしたトリックの痕跡を真っ先に部屋に入って隠滅した恐れもある！本当に体調不良で会社を欠勤したか確認しておけ！」

高木

「はい！！！」

＊

『え？染井社長の体調っすか？』

高木は染井が社長を務めている、【テレビビデオ番組制作…染井企

画】に電話をした。

社員

『そうっすね…ここ2〜3日はずっと悪いらしくて今日も会社には来てないっすけど…』

高木

「はあ〜そうですか…その原因とかってわかります?」
すぐ横でコナンは、高木がもっている電話の子機に耳を傾けている。
そして勇気は、部屋の周りをウロウロしながらも高木と社員の会話を聞いているようだ。

社員

『そりゃ〜例の密着特番がポシヤっちゃったからじゃないッスか?』

高木

「え? 例の密着特番ってもしかして毛利さんの…」

社員

『ええ…毛利小五郎密着24時! かなりキャッチャーでイケてるっ
て思ってたんですけどねえ…』

高木

「じゃあ、中目プロデューサーとの打ち合わせは?」

社員

『なくなりましたよ? ナレーション役の沖野ヨーコちゃんも残念が
ってました…あ、そうそう社長って言えば今日の夕方、近所のドラ
ッグストアで見かけたっすよ! 確か…6時半ごろ!』

高木

「ろ、6時半!？」

時間を聞いて、高木は険しい表情に変わる。

社員

『あの刑事さん? 社長に何かあったんスか?』

高木

「あ、いやちょっと…」

勇気

「(…6時半…)」

コナン

「(それが本当なら完璧なアリバイだ…会社の場所はここからそこそ離れているから……なのになんでそれを言わないんだあの人…)」

コナンは遠くから、染井を見つめる。

＊

『ええ…染井社長なら6時半頃来たよ! 胃薬を買いに…いつもは栄養ドリンクなんだけど珍しくて覚えてるよ!』

続いて高木は、ドラッグストアの店員に電話をかけていた。

店員

『でも何でそんなこと警察が知りたがってんのよ?』

高木

「あ、いえ、染井社長がちょっとした事件に巻き込まれたというか……」

店員

『それって名探偵の毛利小五郎がらみかい？来店中に電話がかかってきてたから……あ、待って……そのすぐ前に1本かかって来てたわね……社長の携帯に……確か相手は女……“舞子”って呼んでたよ……』

高木

「舞子……ですか……」

勇気

「（ま……舞子……だど？）」

勇気の表情は一瞬険しくなったが、その後すぐに寂しげな表情に変わった。

コナン

「（舞子……前に染井社長と一緒に探偵事務所に来た彼女か！……でもなんで彼女が……そんな時間に染井社長と電話を……！……？ま、まさか……染井社長が真っ先にここに入ったわけは……）」

コナンはテーブルの上にあるケーキを見たあと、机の上、そしてテーブルのそばにあった植木鉢に近づいて行った。

コナン

「（植木鉢から……コーヒーの匂い……やっぱりそうか……）」

小五郎

「いませんなどこにも……」

目暮

「うむ…」

小五郎と目暮がベランダから部屋へと戻ってくる。

コナン

「ねえ？窓の外閉まってた？」

コナンは二人を見上げる。

目暮

「ああ。念のためベランダを少々調べてみたがな…」

コナン

「（…の割にはカーテンがかなり濡れてる…ん？そう言えば…染井社長がこのマンションに来た時も…コートが濡れてたな…）それで？どうだった？ベランダ？」

コナンは後ろにいる小五郎を見る。

小五郎

「あん？」

コナン

「隣の部屋に行けたり下に降りられたりしなかった？」

小五郎

「無理無理！隣のベランダとは壁でふさがれてるし、下のベランダに降りられる避難梯子も使った形跡はねえし…だいいち、ここは20階だ！！いくら真下が人のいねえ駐車場でもロープとか使ってちんたら降りてりゃその途中で誰か気付くっつーの！」

コナン

「(…)」

勇気

「工藤…」

勇気は小声で、コナンを本名で呼ぶ。

コナン

「……ああ……だとしたら答えは1つ…」

勇気

「そうだな…悲しい真実が…たった1つだけ…」

コナンと勇気は、寂しげな表情で染井を見ていた。

FILE 26 苦い真実

時刻は午後21時をまわっている。

小五郎や目暮警部たち警察は、今だ謎が解けずにいた。しかし、コナンと勇気はどうやらすべてのピースが集まったみたいだ。そう…悲しいパズルのピースが…。

染井

「あのー…そろそろ自宅に帰ってもいいでしょうか？時間も時間ですし…体調もまた悪くなってきましたので…」

染井は自分の腕時計で時間を確認しながら、正面にいる目暮達、警察を見ながら言った。

目暮

「あ、いや…」

おい…その体調の事、確認は取ったのか？」

目暮は横にいる高木に小声で語りかける。

高木

「ええ…あの染井社長の会社に電話したら、どうやら胃を悪くして会社も2、3日休んでいると…」

目暮

「ホウ…」

高木

「社員が今日の夕方、6時半頃、社長の姿を近所をのドラッグストアで見たとも言っていました…」

目暮

「ろ、6時半頃って、中目プロデューサーが毒入りのコーヒーを飲まされて死んだ時刻じゃないか！」

高木

「はい：その店にも電話しましたが、確かにその時間社長は胃薬を買いに来ていたようです：」
さらにこの二人の会話は続く。

目暮

「じゃあ、アリバイはあるわけだな？」

高木

「ええ：ですが例の『毛利小五郎密着24時』の特番はすでにポシヤっていて、何故それを黙って染井社長が毛利さんを連れてその番組の打ち合わせをしに、中目さんの部屋に来たかが引っかけりますか：」

目暮

「やはり、密室殺人のトリックの何かの証拠を隠滅しに来たとしか：うゝむ：だとしたらまずはそのトリックを解かなければ：」

勇気

「ねえ：警部さん達」
と、ここで勇気が目暮と高木を見上げながら話しかける。

高木

「ん？なんだい？勇気君」

勇気

「あのテーブルにあるケーキ…二人分あるけどもしかして後で二人で食べる気ですか？」

そう聞いて、勇気は後ろにあるテーブルを指さした。

目暮

「ふ、二人分？」

コナン

「ホラ、よく見てよあのケーキ！真ん中に切れ目が入ってるよ！」
勇気に続いてコナンも目暮達に、ヒントを与える。

高木

「ホ、ホントだ！なんで？？」

コナン

「これってさー…」

とコナンが何かを言おうとしたが、

小五郎

「急にもっと多く食べたくなっただけじゃないッスか？冷蔵庫に残りのケーキホールがあったから、大きさは自由に変えられたようですからな…」

小五郎が余計なことを言ってしまう。

コナン

「（このオヤジ…）」

勇気

「（…こりゃ工藤も苦労するよな…）」

思ったことは違ったが、小五郎にジト目を向けているという点は変わらない二人。

コナン

「ね、ねえ？　そう言えば…木にコーヒーあげるとよく育つの？」

蘭

「き、木にコーヒー？　何言ってるの？　コナン君」

小五郎

「またわけのわからん事を…」

コナン

「でもコーヒーの匂いがするよ！　あの植木鉢から！」

コナンにそう言われて、目暮と小五郎は植木鉢に近づく。そして目暮はそこにしゃがみこむ。

目暮

「た、確かに…」

小五郎

「育ち、良くなるんすかねえ…？」

次にコナンは、テーブルに近づきさらなるヒントを与える。

コナン

「あれれ？　この筆立てもコーヒー臭いや！　ホントにコーヒーが好きだったんだね！　あの中目っておじさん！」

コナンは作り笑顔で、高木を見ながらそう言った。

高木

「そ、そうか！もしかしたら！この机の上のコーヒークップとケーキの配置！本当はこうじゃなくて…実際は…」

と言いながら高木は筆立てからペンをすべて取り出し…さらに…

高木

「こうだったんじゃないでしょうか？」

蘭

「ふ、二人分を増えた！」

目暮

「なるほど…ケーキを一つの皿に移し、空になった皿をコーヒークップの下に敷いて受け皿のように見せ、自分のコーヒークップは観葉植物の鉢に流し、空いたカップの中に筆記用具をさして筆立てに偽装したというわけか！！中目さんが毒を飲んだ時、誰もそばにいなかったと思わせるために！」

高木

「これならこぼれたコーヒークップの下に皿の跡がなかったのもうなずけますね！」

高木は真剣な眼差しで、目暮を見つめる。

目暮

「しかし誰がそんな事を…」

小五郎

「決まってるじゃないですか…犯人ですよ！犯人がこれは中目さんの自殺だと思わせるために…」

コナン

「あれれ〜おかしいぞー！」

コナンの子供特有の声が室内に響く。

小五郎

「またお得意の『あれれ』かよ？」

コナン

「だってー、机の上の食器、足りないものがあるんだもん！」

小五郎

「あん？ ケーキ、皿、コーヒーカップが2つずつ：足りてるじゃねえか：」

小五郎の鈍感ぶりに呆れた勇気が、後ろから「フォークがないよ。」と呟く。

小五郎

「え？」

勇気

「ほら、よく見ろよ！ ケーキを食べるフォークが1つしかないだろ？ 受け皿にした方のフォークがさ：」

高木

「ほ、本当だ：じゃあそれもこの部屋のどこかに：」

蘭

「もしかして、キッチンとか？」

「いや：キッチンの食器棚に隠す暇があったら：流しに置いてますよ：時間がなかったので思わず懷に：中目さんの死体を目の前にし

てすぐに大声を出さないとばれてしまいますからね……」
と背後からつぶやいたのは、染井だった。さっきまで言っていた自分の主張を大きく変えている。

目暮

「じゃあやはり……貴方が中目さんを……？」

染井

「ええ……仕事上でかなりいやな目に遭わされてたんでね……」
殺した方法は最初に警部さんが言った通り、ケーキ持参でここへ訪れ、コーヒーに毒を仕込み……急用を思い出したと言って席を立ち、用心のためにチェーンロックをかけさせて出ていったんです！」

勇気

「……」

染井

「その時、机の上に置きっぱなしになっていた私のコーヒーやケーキが気になって……私は出て行く前に片づけると言ったんですが……中目さんが『急用なら早く出て行った方がいい、片づけは自分でするから』と……だからそのコーヒーやケーキを隠蔽するために毛利さん……とここへ来たんですが……余計なことをしてしまったようですね……」

高木

「で、でもあなた、犯行時刻の6時半頃あなたの会社の近くのドラッグストアで目撃されてますよ？」

染井

「え？……誰に？」

高木

「あなたの会社の社員と、その店の店員に…」

染井

「確かに今日、薬を買いに行きましたけど時間は5時過ぎ…ホラ、最近暗くなるのが早いから時間を勘違いしてるんじゃない…」

目暮

「し、しかし、あのコーヒーのシミはどうなのかね？」

目暮は後ろのテーブルを見る。

目暮

「コーヒーが床に垂れたあのシミの具合からみるとコーヒーがこぼれた時にあの椅子に誰かが座っていたとしか…」

染井

「ああ…あのシミは私がわざとこぼしたんです…毛利さんこの部屋に入って自分のコーヒーを植木鉢に捨てる前に…そうやっておけば不可能犯罪に見えるでしょ？」

高木

「でもコナン君に言われてすぐにそのシミに触ってみましたけど…濡れてませんでしたよ？」

染井

「それっていつ触ったか覚えてます？」

高木

「いや時間までは…でも多分…死体発見の通報を受けてから30～40分後ぐらいかと…」

染井

「た、多分じゃないでしょ？ 確実じゃないですか！ 時間がたってもう渴いたんですよ！ それに、あのシミを私がつけたんじゃないんなら誰が付けたっていうんですか？ その人物はその後どうやって部屋を密室にし…どこに消えたって…」と、言いかけるが…

「ええ…消えたんですよ…あの世にね…」 小五郎の背後から、低い男の声が聞こえた。

目暮

「あ、あの世って…？ なんだね？ 毛利君！」

小五郎

「え？ あ、いや…それは……いっ！…！？」

小五郎の首に小さな針がぷすっと刺さった。言うまでもない。コナンの時計型麻醉銃が命中したのだ。

そして、さっきの低い声もコナンが蝶ネクタイ型変声機で小五郎の声を出しただけである。

小五郎は「ひい いん」と言いながら座りこんだ。

勇気

「（ほう…これが噂の眠りの小五郎か…）」

勇気は、興味深そうな顔で小五郎とその背後にいるコナンを見ていた。

蘭

「お、お父さん！ まさか…」

目暮

「やっと来たか…」

小五郎^{コナン}

「そう…誰もがききたくなるその謎…犯人はこの密室からどーやって抜け出しどこへ消えたか…その答えがああ世…我々の手の届かない黄泉の国へ逃げてしまったというわけですよ…」

目暮

「おいおい…意味がさっぱりわからんが…」

高木

「ま、まさか中目さんが毒を飲む前に自分で!?!」

小五郎^{コナン}

「いや、中目さんじゃありませんよ…考えてみてください…この部屋の窓は閉まっていたのにどうしてカーテンが濡れているのかを…このマンションにやってきた染井社長のコートが車に乗っていたにもかかわらず…何故濡れていたのかを……犯行時刻の夕方6時半頃、染井社長の携帯電話をかけたのは…私以外にもう一人いたこと…その犯人は染井社長が自ら罪を被ってまで…かばいたい人物であるということを…」

蘭

「え?…ちょ、ちょっとそれって…」

高木

「まさか!?!」

勇気

「そう：蘭さん達の予想通り：中目さんを殺した犯人は、染井社長の会社の社員でもある：『久住舞子』さんだよ！！」
勇気は蘭や日暮、警察関係者を見上げながらそう言った。

コナン
小五郎

「：彼女はおそらくケーキをもってここへ訪れ、毒入りコーヒーを
中目さんに飲ませ：死んだのを確認した後、ベランダに身を投げ自
らの命を絶ったんです！」

蘭

「そ、そんな：」

高木

「じゃあ、犯行時刻に染井さんの携帯にかかってきた彼女の電話は
！」

コナン
小五郎

「多分、これから自殺することを告げたんでしょう：自分が最も信
頼し、大切に思っている染井社長にね：」
コナンは着々と悲しい真実を解き明かしていくが：

染井

「ち、違う！！彼女は何もやっちゃいない！すべて私が仕組んだ犯
行で：」

染井は必死にそれを否定する。

コナン
小五郎

「……そうやって彼女を殺人者にしないために来たんでしょ？彼女
がここへ来た痕跡を消して、中目さんに自殺したように偽装し、い
ざとなったら自分がその汚名を被る覚悟で！！」

目暮

「じゃあカーテンが濡れていたのは、彼女がベランダに出た時に開けっ放しになっていたからか！」

コナン
小五郎

「ええ…その窓の鍵をかけたのも染井社長…そして大声を出し死体を見つけたことを私に知らせたんです！」

染井

「違う違う！！彼女じゃない！！私だ！私なんだ！！私を捕まえてくれよ警部さん！！！」

染井は、必死に目暮に突っかかっていく。その染井の背後で勇氣はこう告げる。

勇氣

「いいんですか？放っておいて…このままあんたが連行されればこの冷たい雨の中に閉じ込められたままですよ…？20階のベランダから駐車場に転落し…あんたがずぶ濡れになりながら車のトランクに寝かせた…久住舞子さんの遺体はな…」

染井

「！！……ま、舞子…」

染井は泣きじゃくれながら、腰から崩れ落ちた。

目暮

「すぐに車のトランクを調べろ！」

高木

「はい！」

案の定、車のトランクから舞子さんの遺体は発見され…この不可思議な密室殺人の謎は解明された…

染井社長にかかってきた彼女の最後の電話によると殺人の動機は…中目プロデューサーのキックバックの要求を蹴ったため、特番をつぶされ業界に根回しにして干すと脅されて、日に日に染井社長を見るに見かねての犯行だったらしい…

その殺意を心に秘め、犯行前日に会社を辞めたことすら染井社長に言わなかった彼女が…身を投げる直前の電話で彼にやっと伝えたそうだ…自分の気持ちを…雨音に消え入るような…か細い声で…

FILE27 裏切り者に迫る闇? (前書き)

大変ながらくお待たせしました!裏切った男シリーズ今日から復活です!

FILE 27 裏切り者に迫る闇？

7月某日。真夏のある日。外は夜だというのに、怒りがこみ上げてくるくらいに強烈に暑かった。

隣には東の名探偵と呼ばれる高校生探偵、工藤新一の家がある。そう、ここは阿笠邸だ。

勇気

「福引券??」

先程までテレビを見ていた勇気が、博士の声を聞いてテレビに背を向けた。

博士

「そうじゃ。今日、買い物途中で福引券をやっとってな…哀君が見事に当てたんじゃよ！一等賞を！」

どうやら、博士はかなり興奮しているようだ。

灰原

「バカね…偶然よ」

灰原はいつも通りクールにさらっと流しながら、飲み物を飲むため、台所にある冷蔵庫を開いた。

勇気

「んで？その一等賞ってなんなんだ？」

博士

「豪華！温泉旅行3泊4日の旅じゃー！」

徐に博士は10枚分のチケットを手を持ち、朗らかに言った。

勇気

「…ん？1…2……………10枚？？10人も行けんのか？」

博士

「ああ、こんなチャンスはなかなかないぞい！以前にも園子君の計らいで処女旅行したじゃろ？」

えっと…船の名前は何と言ったかの…？」

博士は困った顔で、灰原を見た。

灰原

「確か…『アフロディーテ号』ね…。あの時は大変だったわね…確か。」

勇気

「ふ…ん…」

何かを考えるように勇気はそう呟いた。

灰原

「で？博士。またあの時みたいに船で行くの？」

博士

「そうじゃよ。それよりせっかくチケットが10枚あるんじゃないから、新一達に連絡しといたほうがええじゃろ」

灰原

「そうね…」

灰原はソファを離れ、受話器がある場所へ向かった。

勇気

「……あ、博士。ちょっと手伝ってほしいことがあんだけど……」
勇気は受話器を取りに行く灰原を一瞬見たあと、博士の方を向き、話しかけた。

博士

「ん……? なんじゃ? ?」

場面は変わって、ここは毛利探偵事務所。

「ブルルルル……」

不意にコナンの携帯が鳴りだす。

コナン

「ん? 電話か……?」

コナンは自分の部屋にいた。すぐ隣にある工藤新一用の携帯が鳴りだしたため、手に取る。

コナン

「（ん……? 灰原? ?……）はい? もしもし……?」

灰原

『あ、工藤君。ちょっといいかしら?』

コナン

「おう、灰原。どした?」

灰原はコナンの携帯に電話をかけ、先程の用件をすべて話した。

コナン

「わかった。後で、蘭や小五郎のおっちゃんにも話しとくよ。でも…これで6人か…あと一人は園子で7人…。残り3人は…」

灰原

『あの子たちでいいんじゃない?』

灰原が言う“あの子たち”とは、同じ少年探偵団の小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美のことである。

コナン

「…そうだな。わかった。で?日にちを教えてくれ」

一方その頃…。

黒いポルシェが暗い夜道を走っていた。

ウォツカ

「なんでそんなくだらないツアーなんかに!？」

ジン

「さあな…。俺も詳しくは聞いてねえが…。 “アマレット” 曰く、そのツアーで使う船の中に組織にとって都合がわりいネズミがいるんだとよ…。」

ウォツカ

「アマレット…あいつは何を考えているんですかね？」

ジン

「フン…さあな…」

ジンの不敵な笑みとともに、月が闇を照らしている。

FILE 28 裏切り者に迫る闇？

それから二週間後、温泉旅行に行くことになった一行はすでに船の上、【サタンディータ号】に乗船していた。

コナン達以外にも、他の客がざっと100人以上はいる。灰原同様、福引券で1等賞を当ててきている人や、他のルートで皆、チケットをゲットしたのだろう。

目的地の旅館に着くまで、距離は結構ある。3泊4日といっても1日半は船内で過ごさないといけない。なので実質、旅館に泊まるのは2日弱といったところか。ちなみにこの日は天候も良く、旅行日和になっていた。

現在は午前11時半。コナン達10人は、皆甲板に来ていた。一つの白い小さなテーブルに、小五郎に蘭と園子、そして阿笠博士が座っている。そしてもう一つのテーブルに、元太達探偵団の三人に、コナン、勇気、灰原が座っていた。

園子

「ん〜♪久々の旅行〜。潮風が気持ちいいわぁ〜」

園子は思いつきり羽を伸ばしている。

蘭

「なんかすいません。阿笠博士。私達まで旅行に呼んでいただいて……」

蘭は謙遜している。

博士

「ああ、別にいいんじゃないよ！ チケット10枚分なんてわし等には多

すぎるし、なにより皆で行った方が旅行は楽しいじゃろ！」
博士は満面の笑みで笑う。

蘭

「そうですね！」

蘭も笑顔で返す。

灰原

「でも旅行に行ってよかったかもしれないわね…あの人のそばに居ないですむし…」

コナン、勇気の前で灰原は意味深なことを言う。ちなみに元太達3人は他の話をしていた。

コナン

「ん？誰だあの人って？」

灰原

「…今あなたの家に住んでいるあの沖矢昴って人よ。いい加減にしてほしいわ。いつになったら出て行ってくれるのかしら？」

コナン

「ああ、なんだ。昴さんか。大丈夫だって！ホームズファンなんだから！」

コナンは笑顔になっているが、作り笑顔にも見える。

灰原

「呆れた…」

勇気

「…そんなに気になるんなら、お前が直接言えばいいんじゃないか？ 『出て行って』って」

コナンの横で、ジュースを飲んでいた勇気が言う。

灰原

「あのねえ…？ そんな事が言えたら苦労しないわよ…。——ったく貴方わいいわね。私と違って組織の気配を感じることができないみたいだし…」

勇気

「…悪かったな。ヘッポコで」

勇気はスネ気味に言った。

コナン達3人が話している最中、元太達は蘭に話しかけていた。

蘭

「かくれんぼ？」

歩美

「うん♪ そうだよ！ この前も船に乗った時にやったじゃない！ 前は園子お姉さんが大変なことになったけどね…。でも今度はさすがに大丈夫だと思うから！」

蘭

「うーん。そうねえ…。ねえ？ 園子はやる？」

蘭は横にいる園子に問いかける。

園子

「別にいいわよ。どうせやることないし」

光彦

「じゃあ決まりですね!」

元太

「博士とおっちゃんはとうすんだ?やるか?」

博士

「悪いがワシはパスさせてもらうよ」

小五郎

「俺もだ!色々やる事があつからな!」

蘭

「あ、お父さん!!」

「そういい残し、小五郎はどこかに行ってしまった。

コナン

「(色々って…ナンパじゃねえだろうなあ?おっちゃん。。。)」
「遠くでコナンが心のツツコミを入れる。」

歩美

「じゃあ、コナン君達も来て!鬼さんは2人ね!」

コナン

「ああ…(つたく…しょうがねえな…)」

こうして、じゃんけんの結果、鬼は勇気と灰原に決まった。

元太

「じゃあ、30秒たったら探しに来いよ！」

光彦

「ちゃんと！30秒数えてくださいね！」

勇気

「わかったわかった。ちゃんとやるから」

勇気がそう言った後、コナン・蘭・園子・探偵団の3人はそれぞれバラバラに散って行った。

———30秒後———

勇気

「よし、30秒たったな。じゃあ、志保。見つけたら探偵団バッジで連絡くれよ」

灰原

「はいはい。いつてらっしゃい」

勇気

「あのなあ…お前も鬼だぜ?？」

灰原

「そのくらいわかってるわよ…行くわよ」

勇気

「…ああ…（…ん?）」

勇気は一瞬何かに気づいたが、忘れることにした。

FILE 29 裏切り者に迫る闇？

勇気

「ようお！元太！」

元太

「げっ！？なっ、何でわかったんだ！？」

一同は船内にてかくれんぼをしていた。鬼は勇気と灰原。その他の面々はそれぞれバラバラに隠れている。ちなみに元太の隠れ場所は前回同様、食堂のテーブルの下だった。その後も勇気は、ロビーのカーテンの裏にいた園子と、同じくロビーのソファの下に隠れていた光彦を見つけ出し、甲板に戻っていた。

灰原

「フウ…バレバレよ？吉田さん」

歩美

「！…あ、哀ちゃん…。…あゝあ…もう見つかった…」

歩美は狭い倉庫の中にあつた段ボールの中に入っていたが、簡単に灰原に見つかってしまった。

その後、灰原も歩美を連れ甲板に戻った。

灰原

「あとは、江戸川君と蘭さんね…」

園子

「蘭はそう簡単に見つからないわよ！お子様達！」

園子は胸を張り、自分のことのように自慢げに言う。

勇気

「え？何で？」

歩美

「前も船の中でかくれんぼしたって言ったでしょ？その時鬼だった、哀ちゃんも園子お姉さんも二人とも、蘭お姉さんのこと捜しきれなかったんだよ」

勇気

「フーン…。そうなのか…」

元太

「あゝあ…見つけたら暇だなあゝなんか腹も減ってきたし…」
ここでついに、元太の口癖『腹減った』が始まった。

光彦

「えゝゝっ！？またですかっ！？元太君！」

光彦は眉をひそめながら、呆れるように言った。

元太

「しょうがねえだろ…へっちゃまったもんは…」

「おゝい！みんなあ！？」

歩美

「あ…蘭お姉さんだ!!」

歩美がそう言って後ろを向くと、隠れていたはずの蘭が戻ってきた。

園子

「蘭!! あんた…どうしたの?? まだかくれんば、終わってないわよ??」

蘭

「だって…誰も見つけにこないし、それにもうそろそろお昼でしょ? おなかすいちゃって…」

歩美

「蘭お姉さんったら、元太君と言ってること一緒だ〜!」

元太

「ほら! 蘭姉ちゃんだって腹減ってるじゃねえか! 光彦お!」

元太は光彦を睨みながら言った。いつもだが今回は相当にお腹が減っているのだろう。

光彦

「わ、わかりましたよ…。全く…。元太君はどこにいても言うてることが変わりませんね…」

元太

「なんだとお!??」

「「ハハハハッ!!」」

一同の笑い声が響く。

「オメーらなあ…誰が探しに来いよ…ったく…」
その様子を後ろで見ていた勇気と灰原のもとに、かくれんぼで蘭同様に誰にも見つけられなかったコナンが呟きながらやってきた。

灰原

「あら、おかえりなさい」

コナン

「…んで?…なにやってんだ?」

勇気

「なんか今から昼メシだよ」

蘭

「ほら!コナン君達もいくよ?」

コナン

「あ、ハイ!(ったく…しょうがねえな…)」

コナンはいつもの子供声で蘭達のもとへ走っていった。

時刻は正午0時。先程までかくれんぼをしていたメンバーは博士と合流し、昼食をとるため、食堂に来ていた。
食堂のメニューは、バイキング形式で好きな食べ物を選ぶことができる。

蘭と園子は一足先にメニューを選び、今はトイレにいる。

元太

「んめえ!!」

当然といえば当然だが、元太はほとんどの食べ物を自分の皿に乗せ、食らいつくように食べていた。

光彦

「ちょ、ちよつと!?!? 食べ過ぎですよ元太君!!」

灰原

「全く…そんなに食べるから一向にやせないのよ…」

博士

「食べすぎはいかんぞ!?!? 元太君!」

コナン

「(オイオイ…博士が言っても説得力ねえーって…)」

歩美

「哀ちゃん…それだけでお腹いっぱいになるの?？」

歩美は隣に座っていた灰原を気遣っていた。それもそのはず、灰原はコーヒー1杯しか飲んでいないのだから。

光彦

「もしかして…ダイエット中ですか…? 灰原さん…」

コナン

「小学1年生がダイエットって…必要ねえーんじゃねえかあ?」

コナンは、半分からかいながら灰原に言った。

灰原

「うるさいわね……。じゃあ、私、自分の部屋に戻るから、この残りのコーヒー飲んでいいわよ？」

光彦

「えっ！？飲んでいいんですかっ？？／＼」
何を思ったか、光彦の頬は赤く染まっている。

灰原

「ええ、円谷君でもかまわないわよ？」
そういつて灰原は席を立った。

光彦

「じゃ、じゃあ…遠慮なく…／＼／…」
光彦は、灰原が飲んでいたコーヒーの入ったカップに手をやろうとした。

歩美

「（え…？それって哀ちゃんとか光彦君の間接キスになるんじゃない？
／＼／…）」
歩美も光彦ほどではないが頬が赤い。

勇気

「よっと！俺、コーヒー飲みたかったんだよ！」
勇気は光彦より一瞬早くカップを手に取り、コーヒーを一気飲みした。

光彦

「あー!! ゆ…勇氣君…そんなあ…」

歩美

「勇氣君と哀ちゃん…か…間接キス…」

勇氣

「ヴァカ! 哀が飲んだことはちゃんと逆のところで飲んだって。心配すんな!」

元太

「フウー食った食った…」

光彦

「…脅かさないでくださいよ…勇氣君……って、元太君! まだ食べてたんですか!？」

元太

「おう。ところで何の話してたんだ?」

光彦

「何でもありませんよ…あ、歩美ちゃんどこ行くんです?？」

光彦は歩美が席を立てていたので、声をかけた。

歩美

「トイレだよ! すぐ戻ってくる!」

元太

「で、何の話してたんだよ?」

光彦

「だ・か・ら！なんでもありませんって！！」
この後も元太と光彦はこの言いあいを繰り返していた。

コナン

「なくに、必死になってんだよ！ガキじゃあるめえし…」

勇気

「何のことだよ……。それより工藤、博士。」

コナン

「ん？」

博士

「なんじゃ？」

勇気

「志保がいなくなった今だから言えるけど…気をつけた方がいいぜ…この船…」

博士

「ど、どういう意味じゃ？それは？」

コナン

「何が言いてえーんだよ？…」

勇気

「ほんの一瞬だけど…かくれんぼを始める直前に…組織の気配を感じたんだ…」

博士

「な、なんじゃと!?!」

コナン

「…オメーもそんなのわかんのかよ…?」

勇気

「ああ…。志保には言っただけだな…。あと、お前の家に住んでるあの“沖矢昴”って人からもわずかだか感じたぜ…。……そろそろ話せよ工藤…。あの男…何者なんだ?」

コナン

「……」

今の勇気の瞳にはコナンしか映っていなかった。

FILE30 裏切り者に迫る闇？（前書き）

6か月ぶりですね^^;すみません^^..

今回から台詞の書き方を「マモノガタリ!」と同じにしました。

FILE 30 裏切り者に迫る闇？

時刻は午後17時過ぎ。

少しずつだが、陽が沈み始めている。コナン達はそれぞれの部屋で時間をつぶしているようだ。

2時間後の19時からロビーで何やらショーがあるらしい。ちなみに今、コナン、勇気、哀と探偵団、博士は303号室に集まっている。

ここでコナン達の部屋割をお教えしよう。

—301号室—

小五郎・蘭・園子

—302号室—

博士・哀・元太・光彦・歩美

—303号室—

コナン・勇気

この部屋割に不満を持っているものが多数いた。ちなみに部屋割を決めたのは博士だ。

「ええ！？私たちコナン君達と一緒にじゃないの!？」

「コナン君と勇気君二人だけって理不尽すぎませんか？」

「俺ら少年探偵団は一緒にいいだろ?？」

元太、光彦、歩美の3人は不満をコナン一人に集中してぶつける。

「ま、まあ…いいじゃねえーか…そんな細かいことは…」

「細かく（ありません・ない）ねえ!!!!」

「コレコレ…喧嘩はよさんか…」

その後もブツブツと不満を言う3人だったが、博士がうまくフオロ
ーしたようだ。

「これで…よかったんじゃろ?」

博士はコナンと勇氣に耳打ちをしながら言う。

「ああ…。こうでもしねえと、灰原の部屋だと、江藤と話ができね
ーしな…」

「わりいな…博士」

それから1時間後、まだショーまで時間があるが、小五郎と博士以
外は廊下に集まっていた。

蘭や園子はきれいなドレス、元太たち探偵団はおしゃれな衣装に身
を包み、コナンはいつもの衣装（初期の服装）哀はピンクのロング
スカート（リアル30ミニッツの時のような服装）勇氣はコナンの
衣装の赤バージョンで、ネクタイをしていた。

「オイ…なんか腹へってこねえか？」

「ええーっ？昼間あれだけ食べたじゃないですか!!」

元太と光彦はいつも通りの会話。

「蘭お姉さんも園子お姉さんもとっっても綺麗だよ♪」

「ありがとう。歩美ちゃん」

「フン♪当たり前でしょ？この園子様に着こなせない服なんて一枚もないのよ♪オッホッホ♪」

「園子お…」

園子節は今日も快調のようだ。そんな中、コナンと勇気は二人でヒソヒソ話。以前なら勇気の立場は哀だったのだが。

「で？あれから奴らの気配は感じるのか？」

「ん？ああ…時々な…」

「オメー…少しは表情に出せよ…わかんねーだろ？」

「ヴァカ野郎。顔に出しちまったら、志保^{あいつ}に悟られんぞ」なにを悟られるのかしら？」

「は…灰原…」

哀はコナンと勇気の顔を覗き込んだ。

「あ…いや…」

「全く…貴方達、最近やけに仲がいいじゃない？なにかあったの？」

「いや…そういうわけじゃなくて…」

さすがに勇気も動揺している。

「…ハア…あなた…ネクタイがおかしいわよ？綺麗にしてあげるからちょっと動かないで！」

「へ…？」

哀はずれていた勇気のネクタイを丁寧に直した。周りから見れば朝の夫婦に見えなくもないが。

「これでいいわ…。しっかりしなさいよ？もう子供じゃないんだから……」

「わ…悪い…／＼…」

「（勇気君…なんとうらやましい／＼…）」

その様子を光彦がうらやましそうに見つめていたとか。

「ホオ…よかったな…勇気君♪」

「…うつせーよ…：お前も蘭さんに同じようなことしてもらったことあんだろ？どうせ…」

「ね、ねえよ！バーロー！」

「おお。皆待っておったのか！」

博士が到着した。

「もう…遅いですよ！博士！！」

「待ちくたびれたぜ！！」

「（そんなに待ってねーだろ…）」

コナンは突っ込みを入れた後、勇気の顔をちらっと見た。先ほどまでとは違い真剣なまなざしになっていた。

「どうした…！？まさか奴らが……」

「いや…：何でもねえよ…：ただあの女の人……」

「あん？あの女の人がどうかしたのか？？」

勇気が言う女の人とは、5mほど先にいる見たところ若い大人の女性だ。

「……
（な、何だこの感じ…組織とは違う何か…）
」

FILE30 裏切り者に迫る闇？（後書き）

6か月開いてすみません^^；

「マモノガタリ！」もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7408i/>

～名探偵コナン～裏切った男

2011年9月4日07時15分発行